

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

14.5  
179

始





8.6.27



14.5  
179

大正十五年六月

史蹟名勝天然紀念物調查報告

第二輯

名勝及天然紀念物之部

山梨縣



大正十五年六月



史蹟名勝天然紀念物調查報告

第二輯

名勝及天然紀念物之部

山梨縣





目次

◆名勝の部

◇甲府附近

舞鶴公園

遊龜公園

酒折

差出の磯

鹽の山

恵林寺

猿橋

桂川

三ツ峠

月江寺庭苑

◇富士山麓

◇都留北部

◇峽東方面

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



諏訪の森	11
躑躅ヶ原	11
小倉山	11
小佐野の瀧	11
忍野八海	11
山中湖	11
河口湖	11
御坂峠	11
西葉湖	11
紅葉臺	12
長尾平	10
富士の御庭	10
青木ヶ原	11
精進湖	11
登仙角 <small>(パノラマ臺)</small>	11
本栖湖	11
◇峽南方面	
富士川	11
下部温泉	11

身延山	10
西行坂	10
◇峽北方面	
花水坂	10
白須の松原	10
千ヶ瀧	10
ラザウム鍬泉	10
◇御嶽園内	
白山	10
天神平	10
御嶽昇仙峽	10
御嶽	10
御嶽展望道路及登仙角 <small>(パノラマ臺)</small>	10
御嶽奥山の奇勝	10
◆天然紀念物の部	
山高の神代櫻	10
橋立の大杉	10
田木畑木 <small>(大櫛)</small>	10



針樅の純林	四
公孫樹 (俗稱逆銀杏)	五
大榲	五
朝鮮五葉松	五
大檜	五
矢立の杉	五
光 蘇 (ヒカリゴケ)	五
四ツ白檀 (ヨツビヤクタン)	五
いぞいたち (ヤマイタチ、オコシヨ)	五
水晶傾軸式双晶 (一名日本式双晶)	五
大水晶	五
石 膏	五
富士風穴	五
蝠 蝠 穴	五
熔岩樹型	五
雁の穴	五
富士岳麓の天然物	五

寫眞目次

一	舞鶴公園
二	遊龜公園
三	酒出の庭
四	差出の庭
五	惠林寺の庭
六	猿江寺の庭
七	月詠の庭
八	詠訪の庭
九	瀧野ヶ原
一〇	小佐野の
一一	山中
一二	河口
一三	鶴の島
一四	西の湖
一五	紅葉臺より青木ヶ原を望む景



一六 長尾平  
 一七 御庭  
 一八 小嶽  
 一九 精進湖  
 二〇 登仙角(パノラマ)の景  
 二一 本栖湖  
 二二 富士川發船場附近  
 二三 屏風岩  
 二四 身延山々門  
 二五 身延山祖師堂  
 二六 身延山水鳴樓庭苑  
 二七 身延山全景  
 二八 花水坂より見たる富士  
 二九 白須の松原  
 三〇 ラヂウム泉  
 三一 長橋  
 三二 天神潭  
 三三 長潭

三四 富士石附近  
 三五 登龍岩  
 三六 覺円峰  
 三七 石門  
 三八 雪虹瀧  
 三九 昇仙橋  
 四〇 仙娥瀧  
 四一 金櫻社  
 四二 御嶽展望道路三聲返りの望景  
 四三 瑞牆山  
 四四 山高の神代櫻  
 四五 橋立の大杉  
 四六 田木の(大)櫻  
 四七 畑木の(大)櫻  
 四八 針縦の純林  
 四九 針縦の純林  
 五〇 公孫樹葉上に生じたる種子  
 五一 公孫樹葉上に生じたる種子



六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二
雁	蝠	富	富	大	傾	四	大	朝	大
		岳	士	大	軸	ツ		鮮	
の	蝠	風	穴	水	水	白		五	
穴	穴	穴	柱	品	品	檀	檜	葉	榲

## 序 言

一、本書は本縣内に於ける名勝及天然紀念物に關し大正十五年三月迄に調査終了したるものの内其一部を掲録せり。

一、本書は名勝及天然紀念物に關し著名なるものを擧げたるに過ぎざれば、更に次輯を待つて掲げんとす、而して名勝に就ては史蹟及天然紀念物と異り到底之を科學的に叙記せん事不可能なるにより單調に失するの嫌なきを保し難し、尙史蹟因縁と共に名勝たる處は前輯と或は重複せるも敢て省畧せず茲に收めたるものあり。



一、調査及本書の編輯は名勝に就ては調査委員小尾保彰氏之に當り、天然紀念物に就ては調査委員石塚末吉氏之に當れり。

大正十五年六月

山梨縣

史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二輯

名勝之部

甲府附近

舞鶴公園



所在地 甲府市櫻町

縣經營に屬する唯一の公園にして市の中央なる舊城址の一部に施設を加へ面積二萬三千二百五十三坪あり。此地は往昔一條忠頼の館址たりしを慶長年間加藤光泰築城の工を起し淺野長政に至りて完成す、一名府中城又は錦城と稱せしが近時舞鶴城の名あり。本丸の外廓に謝恩塔あり本縣累年の大水災は畏くも先帝陛下の勅聞に達し治山治水の聖旨を以て三十萬町歩

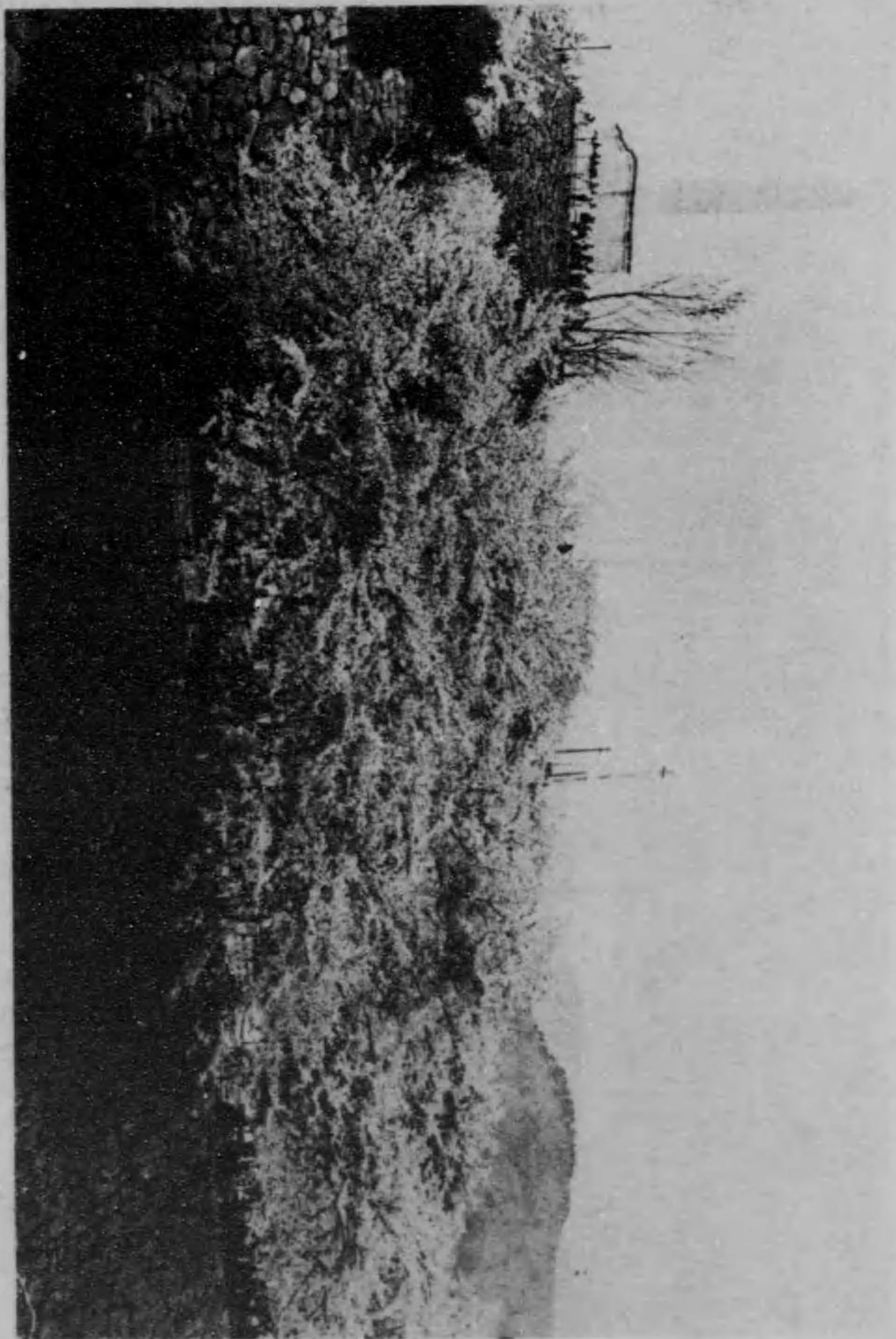


の帝室林野を下賜せらる。大正六年聖恩に謝し奉らんと東山梨郡神金村恩賜縣有地に花崗岩の良材を得て此の工を起し同十二年九月竣工す、工費十餘萬圓、碑身總高百尺、臺座の中央に山縣有朋揮毫の謝恩碑の文字を刻す、蓋し舞鶴公園中の一偉觀たり。稻荷曲輪に縣有公會堂、山館あり、先年今上陛下の行在所に充てられし所、二の丸趾に武徳殿、圖書館等あり、園内四圍の壘廊には數百株の櫻樹立並び花時は紅雲緩々として數層をなし樹下には臨時賣店、掛茶屋等軒をつらね、夜は花間に紅燈をかけ遊覽者の出入夥しく曉を徹して殷賑を極む。現今縣下に於ける櫻の名所として第一位にありて櫻の公園とも云ふ可く、此他天主閣より府中を俯瞰せる眺望と夏は殘涼中に紅白の蓮華妍を競ふの風情また捨て難き美觀なり。

遊 龜 公 園

所在地 甲府市太田町

甲府市の南端太田町にあり、市經營の公園にして面積一萬五百八十二坪、明治六年隣接せる一蓮寺境内を分割して築造せる縣有公園たりしが、大正七年より甲府市に移管せらる、中央なる圓形の池には岩窟よりなれる噴水あり、周圍に銅製の龜を配置す、遊龜の名に因める處か、橋を東に



園 公 龜 舞



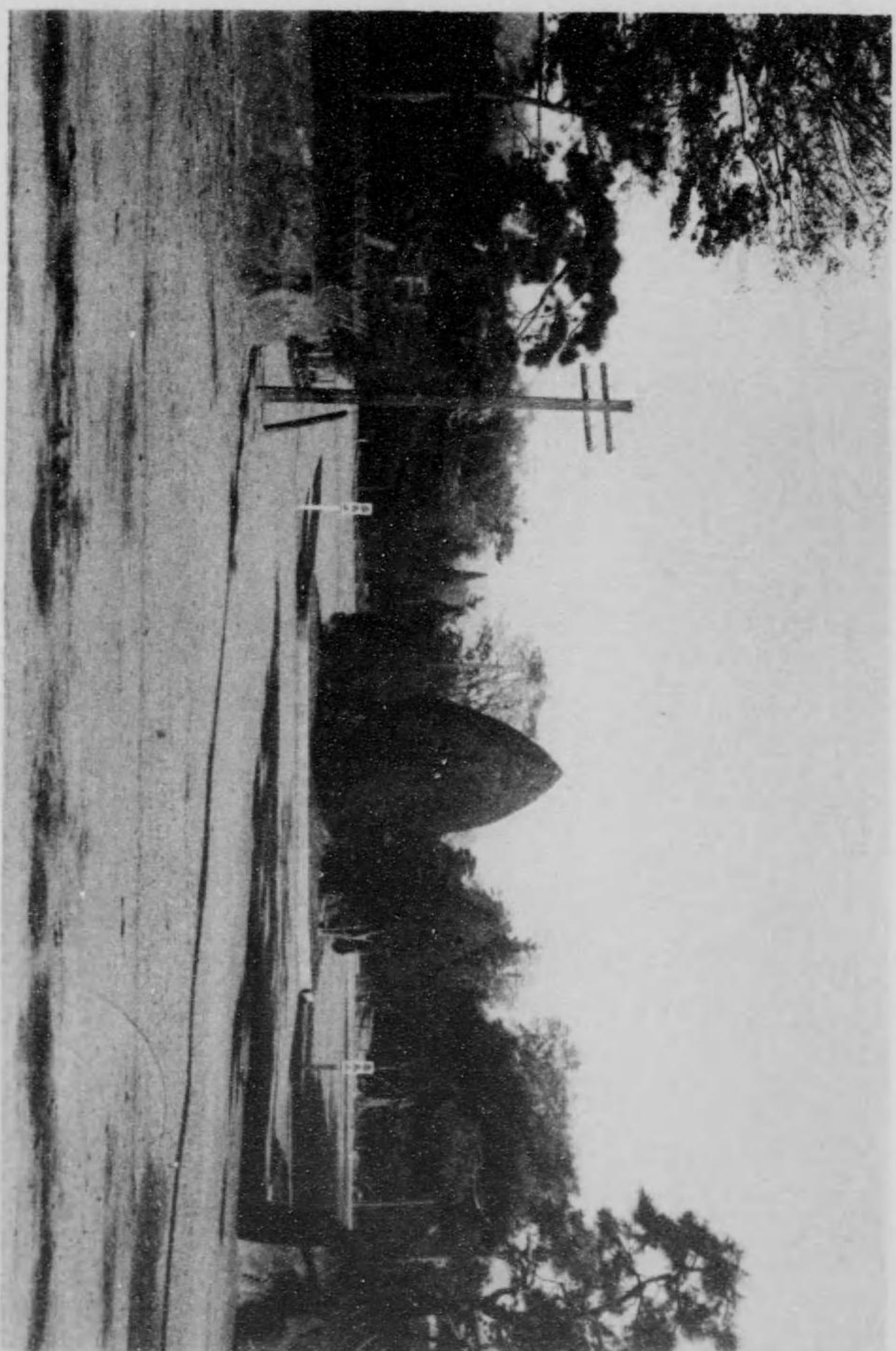
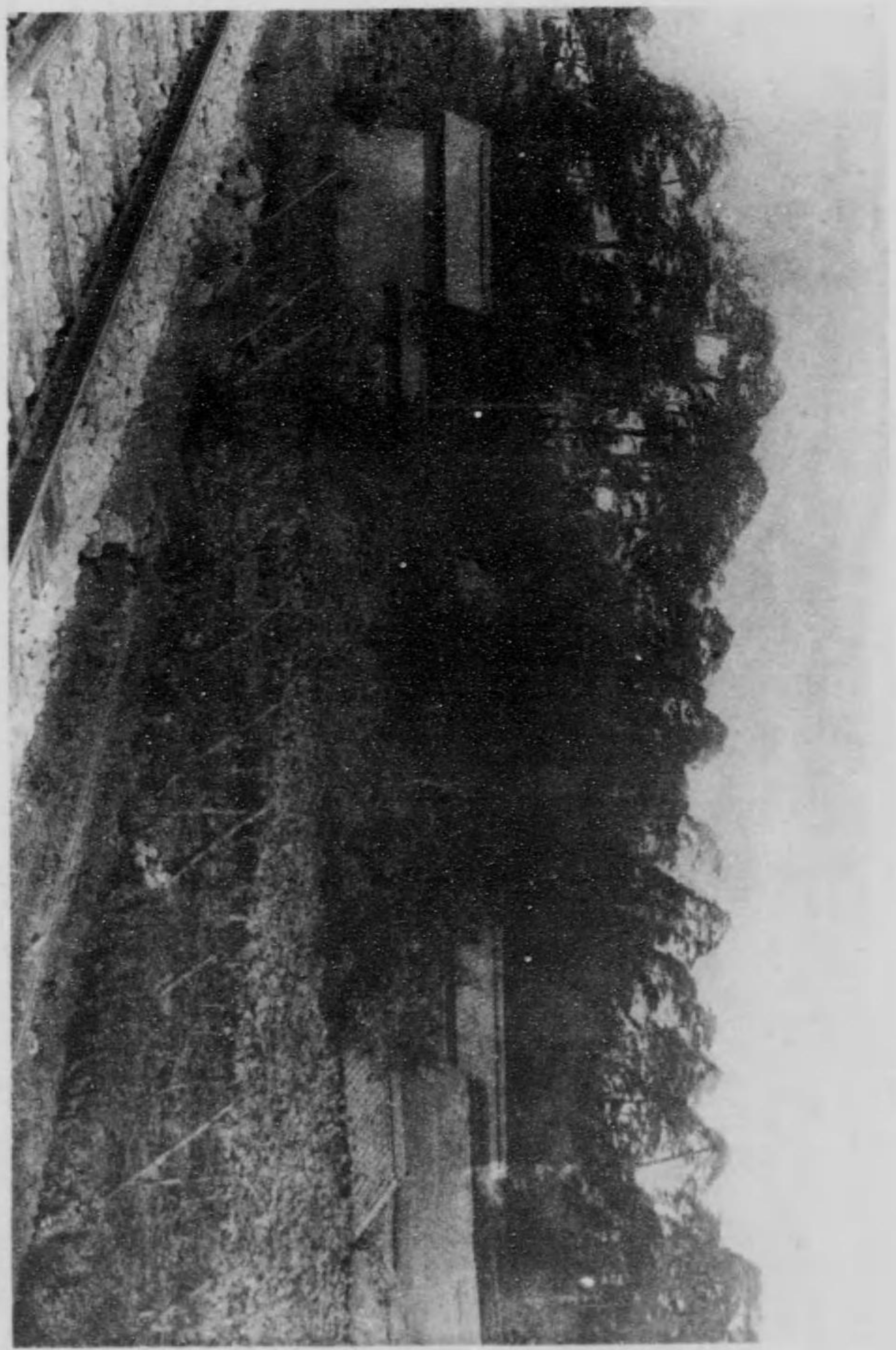


圖 公 魚 港





折

景

三



渡れば藤棚あり、春は數尺の垂房環路を連ね、曳杖の客、樹下に絶えず。東に太鼓形の一橋あり、渡れば稻積神社の境内に入る、神社の側より池に沿ふて西に入れば瀧口と稱する所、細流石にくだけて奔湍をつくるわたり、松楓等の樹木鬱蒼として、泉石の配置最も妙を極め、幽靜閑雅の趣をなす、尙西に隣接して戦病死者の英靈を奉祀せる招魂の祠あり、此他旗亭、四阿、ベンチ等隨所に配置せられ、池に面して南に附屬動物園あり、斯くて早春の梅花を魁けとして、櫻、躑躅、藤、菖蒲、殊に納涼の頃は池畔に燈籠をつらね、噴水には電氣を装置し、臨時の興行及飲食店の設備至らざるなく、既に年中行事の一に數へられ、薄暮より深更に亘りて逍遙の人踵を接す、而して秋の萩、紅葉に至る迄殆ど四季を通じて、行樂に適する市内無二の遊覽地たり。

## 酒 折

所在地 西山梨郡里垣村

酒折は酒折の宮のある所、史蹟として國史に重要な關係を有すると共に、甲斐八景酒折夜雨と稱する名所たり、日本武尊が甲斐入國の時、駐蹕の所、連歌の嚆矢として、事蹟普く世に知らる、南は甲府盆地を控え、背後は一帶の山脈連亘し、靈域は松樹鬱蒼として繁茂す、林の中に日本武尊を



祀れる酒折宮あり、社前に山縣大貳、本居宣長撰文の碑あり。

酒折の林の背後に續ける丘陵一帯に近年數百株の梅樹を植栽し、石徑を配し、點々と孤亭四阿等を設けて大に景趣をそふ之を不老園と云ふ、甲府附近に於ける唯一の梅園にして二月中、下旬紅白の梅花艶を競ふの時、其の風趣頗る佳なり。

酒折 夜雨

冷泉爲綱卿

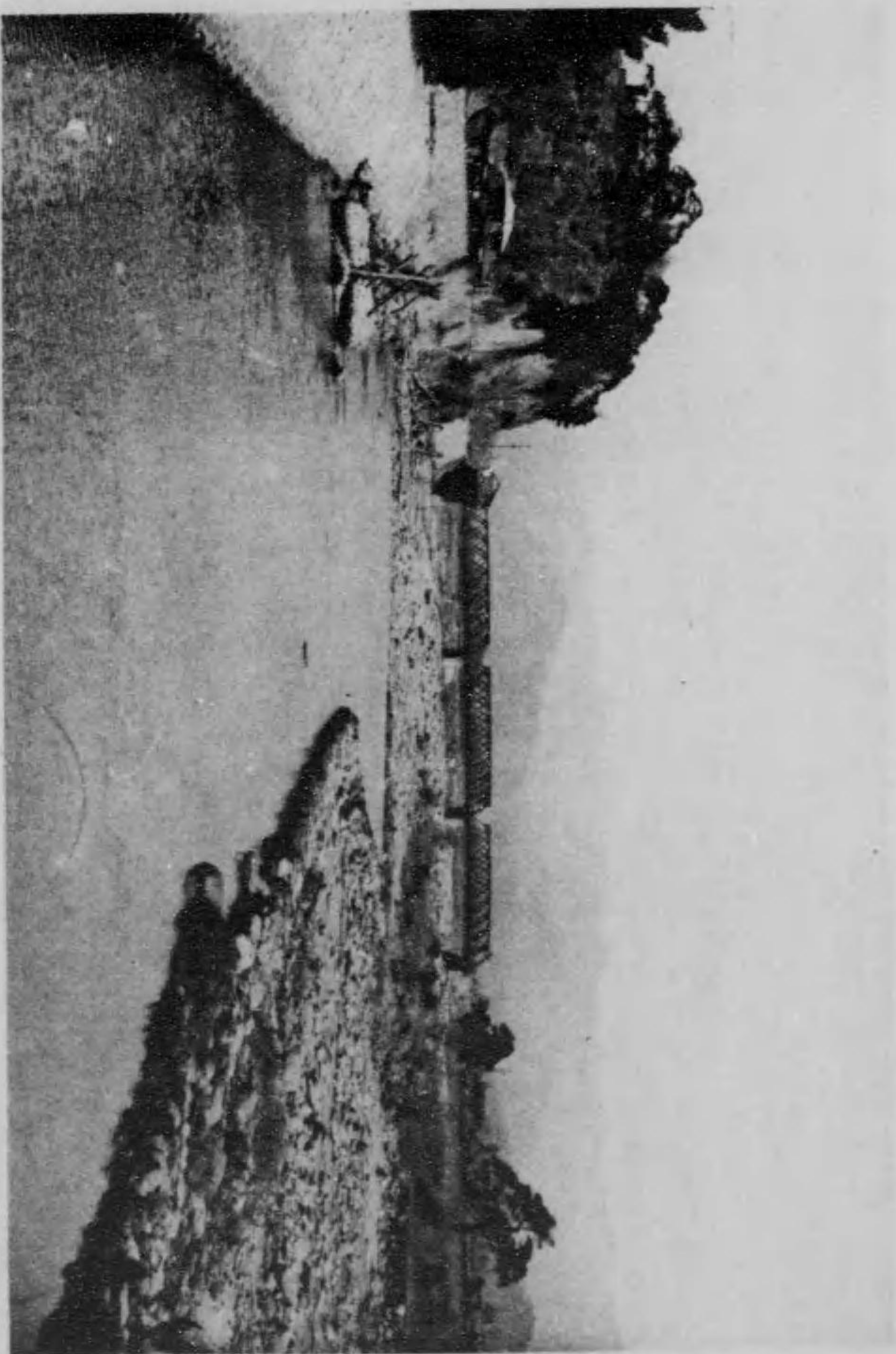
くれぬ間の嵐はたえて酒折に枕かる夜を雨になるやと

### 峡東方面

#### 差出の磯

所在地 東山梨郡八幡村

差出の磯は塔の山の一角、笛吹川に突出せる處をいふ、丘陵は斷崖により上に小祠あり、東方近く鹽の山と相對し、富士を南大に仰ぐ、下流の河畔に長く續く松林は宛然海濱に髣髴たるの景趣あり、古來鹽の山差出の磯と稱し、萬葉古今の歌集に現はれたる名所の果して此地たるや聊か疑



磯の山差



問とせらるるも、我が峽中にては往昔より歌の名所として人口に膾炙せられつつあり。

鹽の山さしての磯にすむ千鳥君か御代をば八千代とそなく 讀人 不知

鹽の山さしての磯の秋の月八千代すむへきかけそみえける 前大納言雅言卿

小夜千鳥空にこそなけ塩の山さしての磯も浪やこすらん 忠房 親王

今はまた川にさしての磯千鳥ふりし昔のあとをとめけり 加茂 季鷹

### 鹽の山

所在地 東山梨郡七里村

しほの山といふ、差出の磯と相對して歌の名所たり昔此山より塩を産せるを以てこの名ありと云ふ、周圍一里餘登るに二十分を要す、山甚だ高からずと雖、山容悉く蒼黒の松樹を以て蔽ひ郡の東部に悠然たる雄姿をなす、山中の觀國岩は徳川家康入國の時此の岩上より國中を觀望せられたる處、山麓に向嶽寺あり、臨濟宗向嶽寺派の大本山にして境内八町武田刑部大輔信成の開基、拔隊得勝和尚の開山にて本邦有数の巨刹なり、之と並びて東方に塩山、鹽泉あり、天授六年拔隊禪師の發見にかかり攝氏十八度塩類泉にして泉質滑かに、卵臭を帶び、リョウマチス癩疹等に特効



ありといふ。

道興法親王

春の色も今一としほの山なれば日かけさしての磯そかすめる

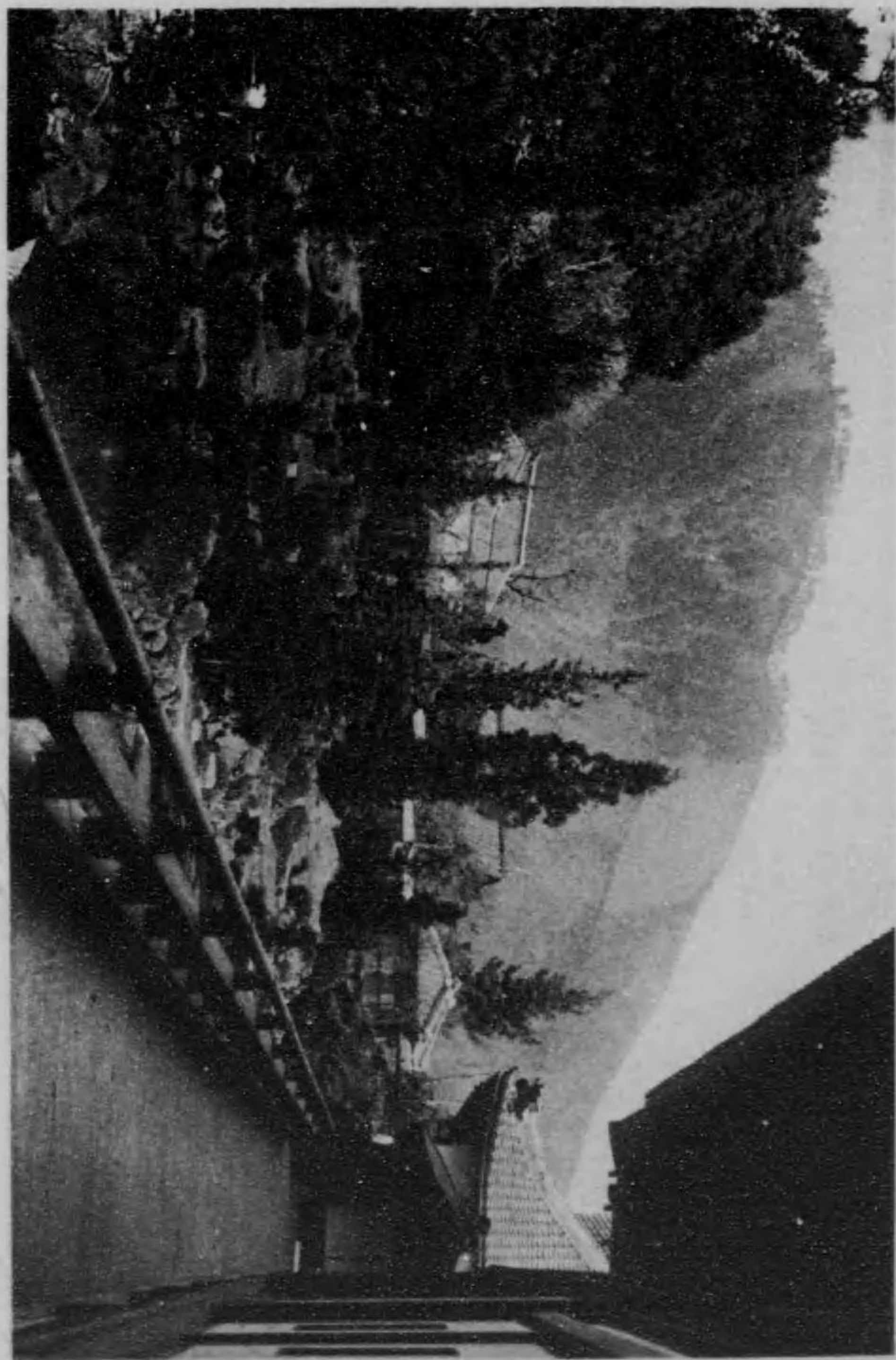
物茂卿

天府徒來誇富強 不須一事問他方 早知塩嵩在山國 百二未應必海王

惠林寺

所在地 東山梨郡松里村

甲斐八景の一にして惠林寺の晚鐘といふ寺は元徳三年夢窓國師の開山第一祖として臨濟宗妙心寺派に屬する名利なり、永徳七年武田信立寺領三百貫をよせ壽像所と定む古規を改めて關山派とし快川國師を聘して住せしむ元龜四年信立卒しこゝに葬る、武田氏滅亡するや江州の佐々木承禎大和淡路等會て此寺に寄食せしを信長の知る處となり承禎等を捕へんと兵を遣し寺内を搜索し、終に快川以下長老喝食小者七十餘人を三門の樓上に監禁し梯子を撤して火を放ち生ながら悉く茶毘の煙りとなす、國師は結跏趺坐從容せまらず最後の法問として滅却心頭火自



惠林寺の朝景



涼の偈を残して、さしも莊嚴なる道場一燼の煙りと運命を共にせらる。後家康入國の時當寺の有縁者を召し寺領を賜ひて再興す寶永二年に至り柳澤吉保當國に封をうけ大に之れを修理す、境内八千九百餘坪明治三十八年二月再び炎上の災禍に遭遇し本堂及庫裡を焼く、後寺領の山林を伐採し數年にして再建せらると雖も昔日の古雅崇嚴を缺くの憾あり、賽路を入れれば黒門三門に續いて千代の櫻三本杉の名木あり、本堂の梁間十二間奥行九間、正面なる勅使門は、今上陛下御大典の時、信玄贈位の策命使を迎へし記念として建築せられたるもの、庫裡は間口十七間奥行二十六間、本堂の西に信玄公の御廟所あり、武田不動堂と唱へ輪王寺宮親筆の額を掲ぐ、堂内の不動尊は信玄都より佛師を招き自像を刻せしむ、其顔容不動に似たるを以て之れを武田不動尊と名づく。庫裡に隣接して蘭香軒といへる貴賓室あり、庭中の梅花莊は故小松宮殿下の御座所に充てられし所襖には蕪村の描ける三十六歌仙の色紙あり。庭園廣く池あり橋あり築山あり瀑ありて、樹木のたたすまい泉石の配置妙趣を極め、苑内の雅致は輪奐の美と相俟て關東第一の名苑といふも敢て憚らざる所なり、人稱して夢窓國師の築庭なりといへど、幾度か回録の災禍に遭ひ年を追ふて修築する毎に漸次原形が傷けられ、今は全く開山當時の佛を偲ぶ能はずと雖、徳川時代の瀟洒たる築庭形式にかなひ尙誇るに足る可きものあり、惠林寺十勝といふものあり、左に掲



兩班杉、兩袖櫻、横月梅、臥龍松、惠山水、笛水流、心地月、土峰雪、松間板橋、林沙浮圖

惠林寺 晚鐘

外山中納言光顯卿

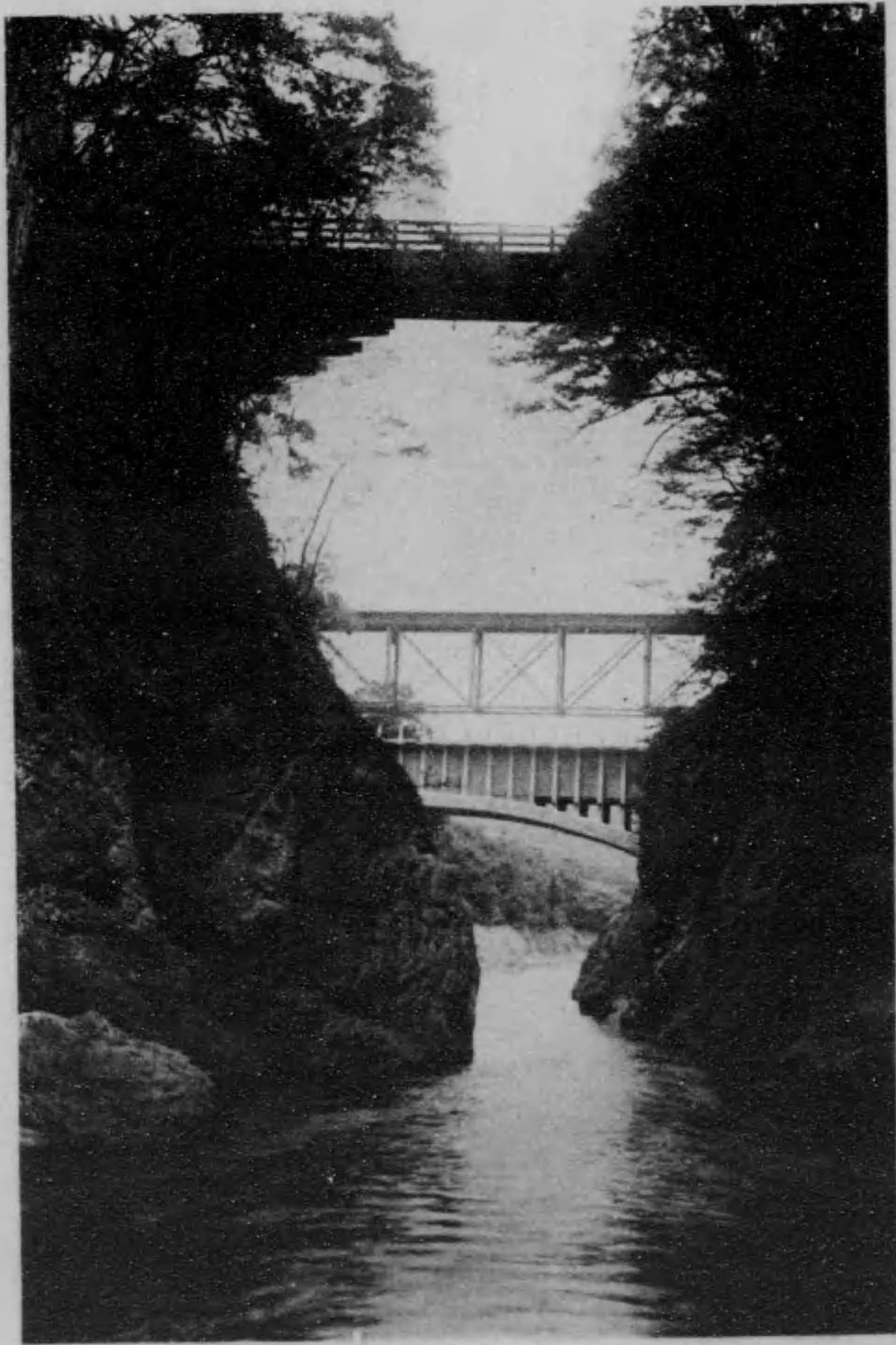
靜かなる夕の鐘の聲ききて見れば心の池もにこらす

### 都留北部

#### 猿橋

所在地 北都留郡大原村猿橋

日本三奇橋の一にして猿橋驛より烏澤驛に通ずる縣道の中央にありて桂川の兩岸相迫りて絶壁をなす所一橋を架す長さ十七間巾三間水面より高さ百〇二尺敢て橋脚を用ひず兩岸の懸崖より數多の樞を重ねて橋となす傳説に因れば推古天皇の時百濟の歸化人創めて設計せるものなりといふ又一説には或時猿が藤蔓を傳ひ彼岸に渡るを見て之により考案せるにて且つ猿橋の名の起因する處なりと其濫觴何れにあるを知るよしなけれど技工驚く可きものあり晚春



六 猿橋



岩壁に點々と咲ける丹躑躅の可憐なる眺めと中秋紅葉の深潭に映する景趣とは最も妙なり。

道興法親王

名のみしてさけふも聞かぬさる橋の下にこたふる山川の水  
谷ふかきそはのいはほの猿橋は人も梢をわたるとそ思ふ

### 桂川

山中湖に源を發し忍野の湧水を加へ忍野村地内に於て小佐野の瀧となり、更に東桂村に於て田原の瀑をなし、大月より北都留郡に入り笹子川を合流し、猿橋上野原を経て相摸に入り馬入川となる。流程十八里、此間數ヶ所に發電所を設けたるを以て常に河川の水量を減ぜられ、自然風致を破壊さるるに至れるも上野原附近に至りて稍々平水に復す、河水清冽多くの鮎を産す上野原は鮎漁に絶好の地たるを以て毎年六月一日漁の解禁を待ち釣又は鶴飼の客群集し、驛の旅館は之れが案内に忙殺され河植には數隻の遊覽船設備を整へて客を迎ふ。

橋 千 蔭

行水のいつれはあれと桂川名をなつかしみ月やとるらん



### 富士山麓

三ツ峠

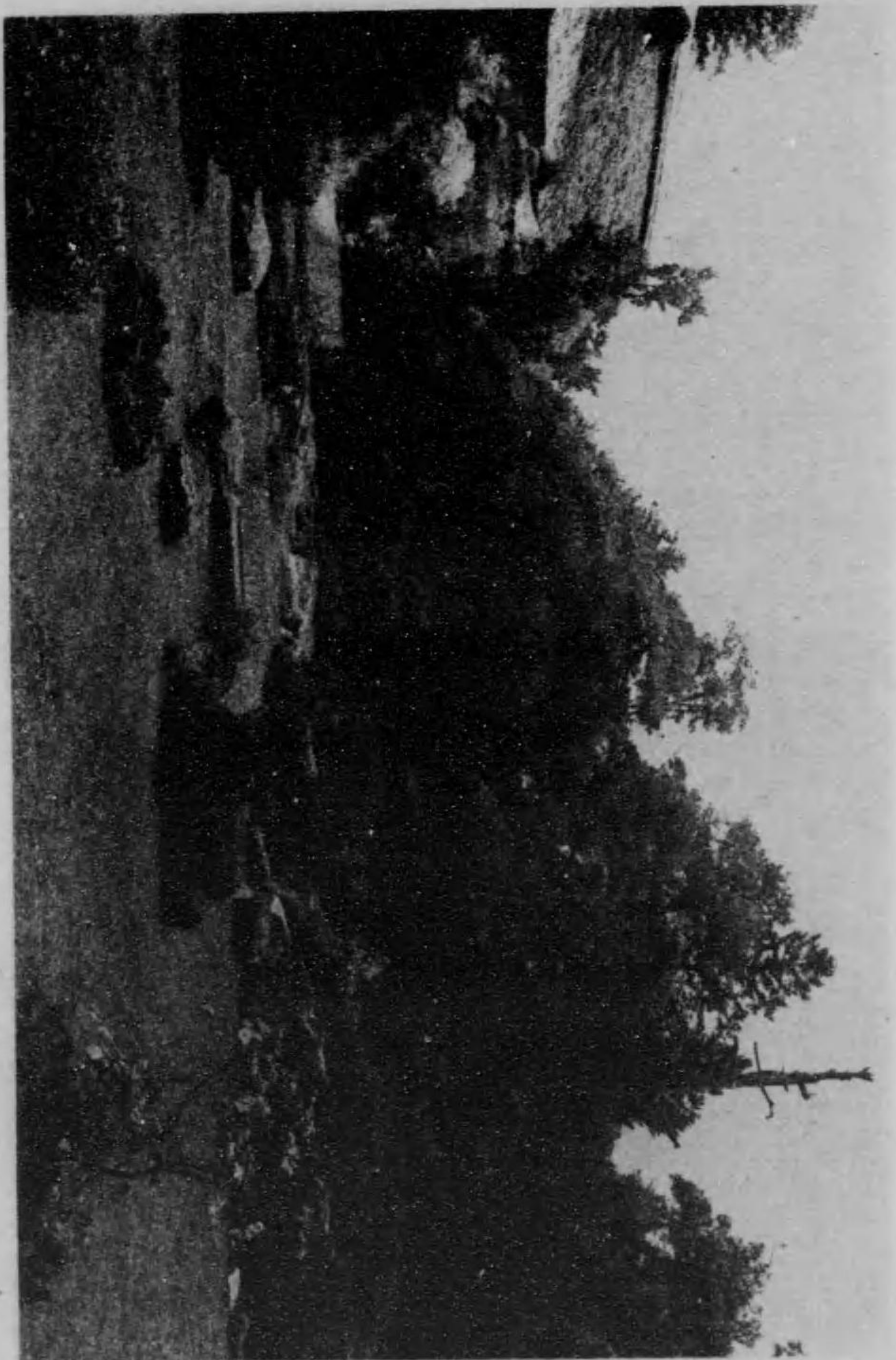
所在地 南都留郡西桂村

大月、吉田間縣道西桂村役場側より西に入りて進めば一里二十八町にして三ツ峠頂上に達す。斷崖峭立一逕を通し奇嶮百折登れば眼界頓に開け五湖を望みて富士の秀峰を仰ぎ眼を轉すれば西北に南アルプス、駒八ヶ岳、金峰國師の連山一眸の下に聚り、東南には丹澤山を隔て、箱根、足柄を指呼するを得、其の展望頗る雄大なり、且つ山中多く珍奇の高山植物を産す、頂上より富士山麓の展望を擅にしつゝ山顛道路を辿り河口湖畔の船津村或は河口村に出づることを得べし。

### 月江寺庭苑

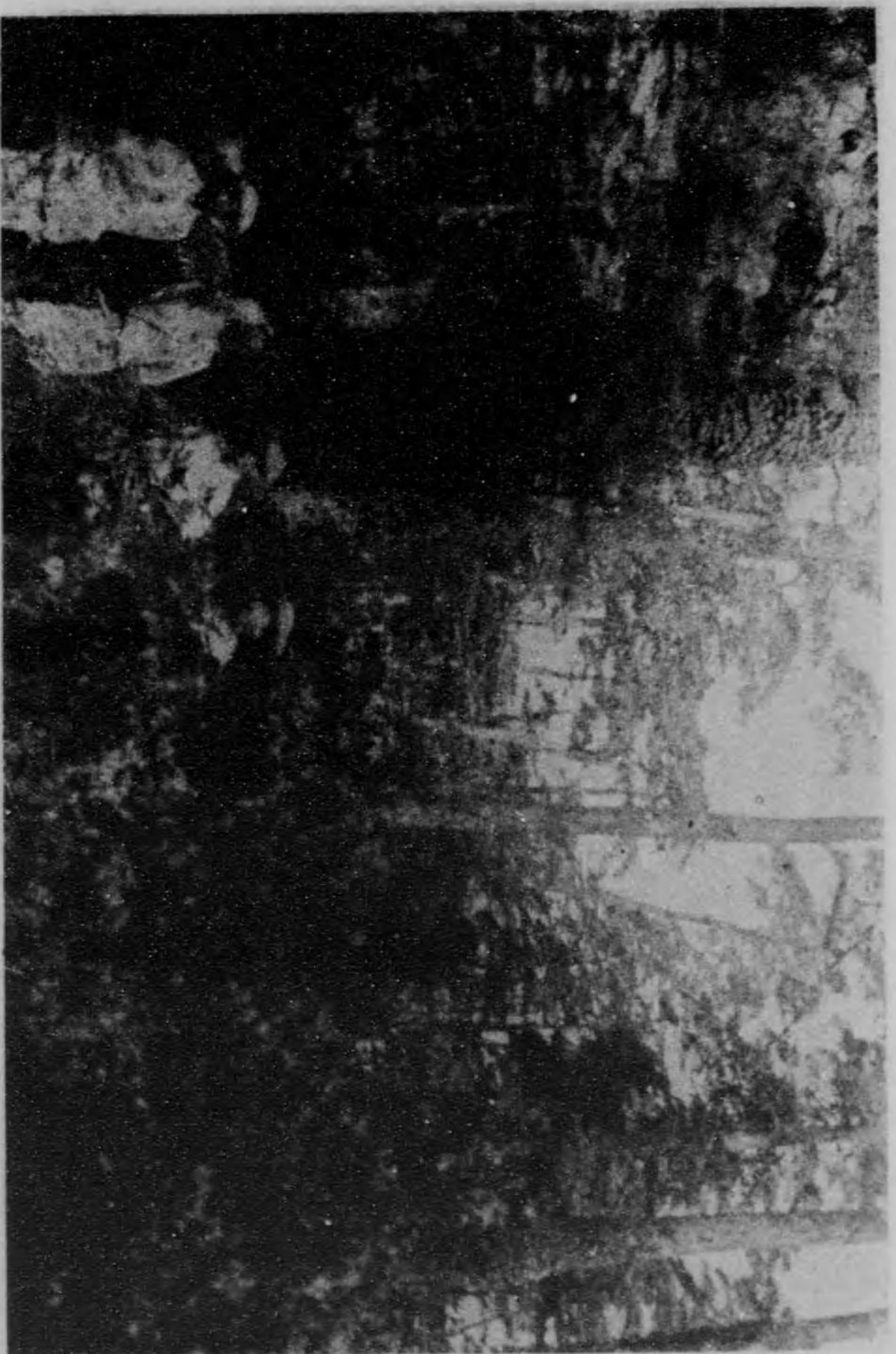
所在地 南都留郡瑞穂村下吉田

瑞穂村下吉田の中央を西に入りたる處にあり、水上山月江寺といふ、三門の下なる燦岩より湧



苑庭寺江月

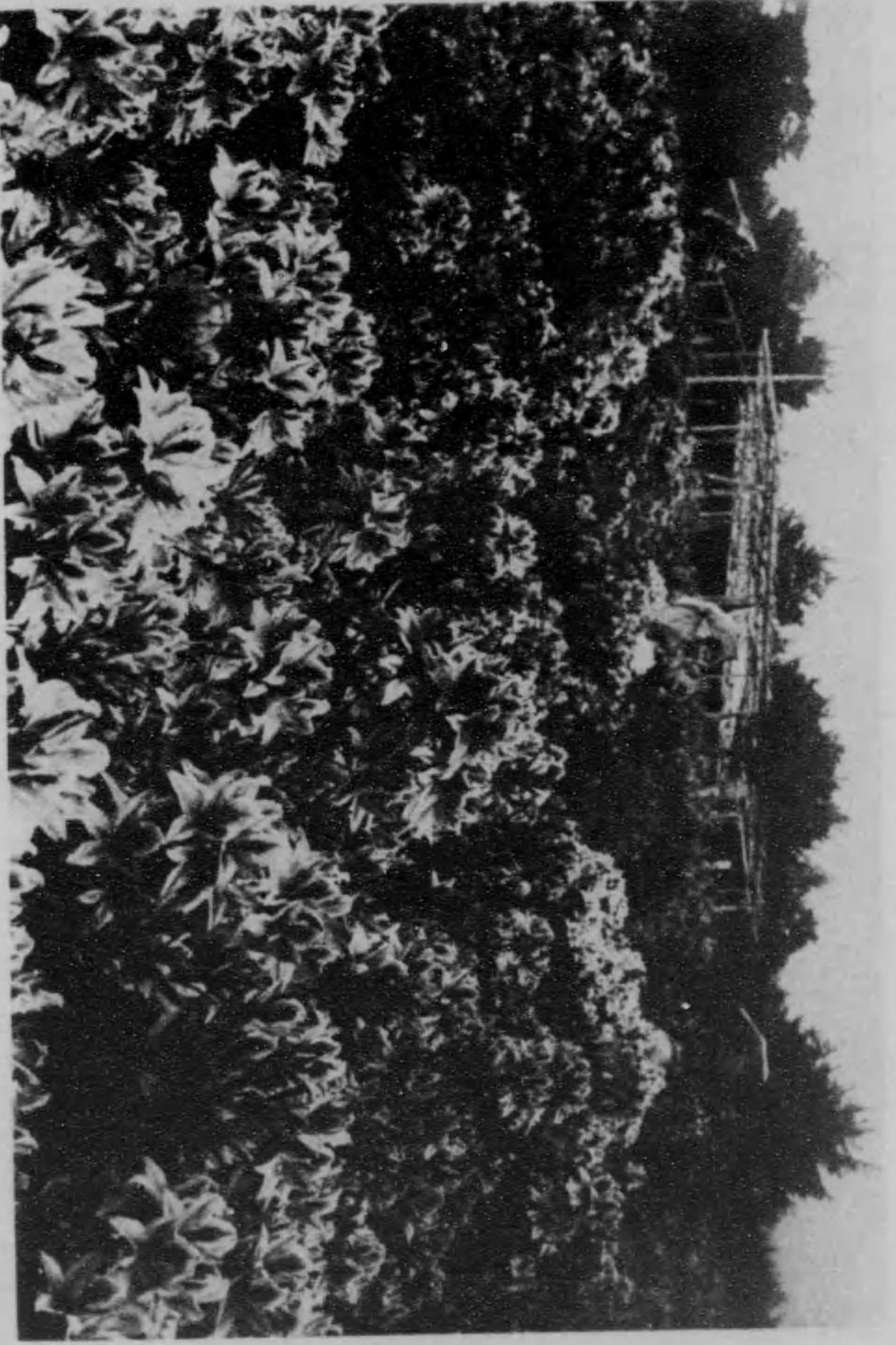




森の訪 八







原ヶ岡原



泉渾々として流る、境内約六千坪庭苑又廣く、**劔丸尾**に屬する熔岩流の爰に壘積して自然の築山となり、たけ低き古松其間に簇立し、石徑苔滑かに樹間に近く富士を背景とし、其雅趣崇高他に需むる能はざる特殊の風致をなす。

### 諏訪の森

**所在地** 南都留郡福地村

赤松の單純林にして**富士淺間神社**の境内に接し、樹齡三百年を經たる喬松鬱蒼參差として面積四十六町八反二畝步、富士北口登山路の兩側をかこみて群立す、樹幹に年古りし蔦の點綴するありて紅葉の季節に至れば翠綠の間に眞紅を彩り、其配合頗る艶麗なりといふ。

### 躑躅ヶ原

**所在地** 南都留郡福地村富士登山道、大石茶屋附近

北口富士登山道中の茶屋少し上より大石茶屋附近に至る百數十町歩の廣き區域に亘り一面にツツジ簇生し、六月中旬開花の頃は見渡す限り桃紅眞紅新綠と交り、其の燦爛たる美觀は實に



譬ふるにもなく、蓋し天下に其の比を見ざるべし、種類はレンゲ、ツツジにして花瓣甚だ大にして眞紅色を呈するもの多し。

一一

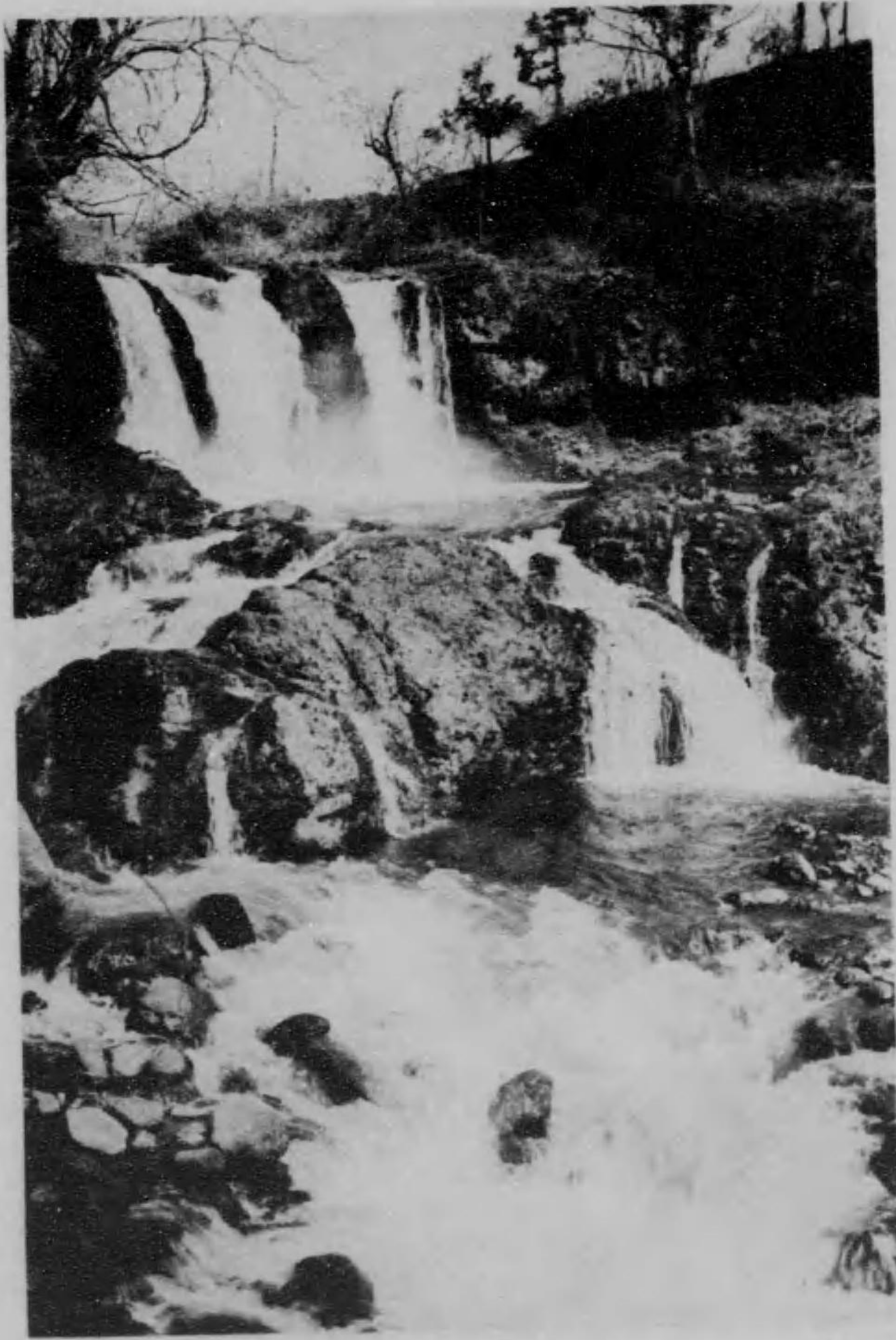
### 小倉山

所在地 南都留郡福地村

富士浅間神社の境内の東に接し、山頂道路をとれば自ら其頂上に達す、地を抜く百二十米突、山高らずと雖、急峻にして登り二十分を要す、上に數株の古松ありて樹下に四阿と側に虚空藏の石佛を安置す、頂上に立ちて南面すれば富士の全容を眉端に仰ぎ、脚下に雁の穴の熔岩流を俯瞰す、雲海樹海等の名に倣ひ、俚人は之れを熔岩海と呼ぶ、西北遙かに御坂山脈連互して下に河口湖を望む、北方は吉田・小沼の白雲にそふて桂川流域遠く帯の如く三ツ峠の峻嶺を境として眼界盡く、其眺望雄大にして岳麓北部の鳥瞰圖に接するが如し。

### 小佐野の瀧

所在地 南都留郡忍野村



小佐野の瀧

〇一



吉田より山中に向ふ鎌倉街道の路傍にあり、荒寥たる裾野の寂寞を破つて鞆の聲樹間に響く、一名鐘山の瀧といふ山中湖と忍野八海の湧水を集めたる桂川の奔流は檜丸尾の熔岩流の堰塞に遮られ二段の瀧となり其懸崖より水勢すさまじく落つ、瀧甚だ高らずと雖巾八間水量豊かに岩頭に碎けて白沫四方に飛散し、更に峽谷にせかれ奔湍をつくりて樹蔭に隠見しつゝ流れ去る、對岸の小丘を鐘山と稱し孤亭共同椅子等を設けて富士見公園となす、展望頗る佳なり、武田氏時代爰に警鐘をかゝけ非常の信號に備ふ、後年此鐘瀧壺に落ちて沈みしより人呼びて鐘ヶ淵と稱す、茲に瀧澤堀と稱する支流あり富士八百八澤の一にして合流點に近く渾々たる湧水あり、更に瀧の側面なる熔岩よりも一の湧水出づ、猫穴と稱し此水瘡傷に効ありとて馬など引入れ、之れを洗ふに忽にして治癒すといふ。盛夏岳麓遊覽者の流汗の苦を忘ると休憩所に最もふさはしく、又天幕露營に好適地たり。

### 忍野 八海

所在地 南都留郡忍野村

忍野八海とは忍野村内、野忍草二部落の各處に湧出する泉をいふ、此處は吉田より山中に至る



鎌倉街道を左に入る事十數町、周圍山を以てかこみ一大盆地をなす、地勢上一瞥して往古の湖沼たる事を想像さる、即ち一の湖底平野にして土壤肥沃、近時耕地整理に因つて岳麓唯一の米産地たり、泉源八ヶ所、水は玲瓏玉の如く、飲用及灌溉に供用さる、富士道者は之れを御八海といひ、信仰的に八海廻りと稱して巡拜す、曰く出口池・小谷池・銚子池・湧池・濁池・鏡ヶ池・菖蒲池等の名稱あり、近時同村鐘ヶ淵発電所附近の桂川々畔に鑛泉を發見し、之れに熱を加へて客を迎ふ、旅館一戸、幽靜閑雅の地たり。尙忍野八海古跡靈歌と稱するものあり、左に掲ぐ。

- 出口池 天地の開ける時に動きなき御山に水の出口たふとし
- 御釜池 富士のねの麓の原にわき出づる水ぞ此世のお釜なりけり
- 銚子池 汲めはこそ銚子の池のさはくらんもとより水に浪もある川
- 底抜池 くむからに波はきえなん御佛のちかひそふかき底なしの池
- 湧池 今もなほわく池水にもる神の末の世かけてかはらぬそしる
- 鏡池 底すみてのとけき池はこれそこの白妙の雪のしつくなるらん
- 菖蒲池 あやめ草名に負ふ池はくもりなきさつきの鏡見る心地せり





## 山中湖

所在地 南都留郡中野村

富士五湖の一にして周圍三里十二町、標高三千二百四十尺、岳麓湖中其最高位置にありて桂川の水源をなす、一名臥牛湖又は三日月湖といふ、形各々之れに似たる所以なり、湖畔に平野、長池、山中の三部落ありて常に石油發動汽船の往復によりて交通上の聯絡をなす、四圍は圓頂形の草山を以てかこみ、而かも高峻ならず僅かに落葉松の點々たるのみにして、廣漠たる裾野に富士は全容を現はし昂然あたりを拂ひ、茫々無涯、眺望雄大、眼醒むるが如く豁然として風光明媚たり、曾て十數年前川村伯が瑞西湖畔の其れにも勝れる風景なりと讚美のあまり平野に別莊を設けられしが、交通の不便と物資供給不備の爲開發の緒に就く能はざりしが、中央線開通し富士電車鐵道の敷設以來年々暑を避くる者多く、年と共に世に知らるゝに至れり、湖中に産する魚族は鯉、鮒、鱒等に於て味ひ頗る美なり、石油發動汽船の外に貸舟あり、綠蔭相映する所、小舟に棹さし或は綸を垂れ、或は網を投ずるも亦一興ならん、冬季は長く湖面氷結するを以て、スケートに適し而して又降雪多きを以て湖邊の草山スキーを遣るに絶好の地なり、東京帝國大學及東京高等師範學校は



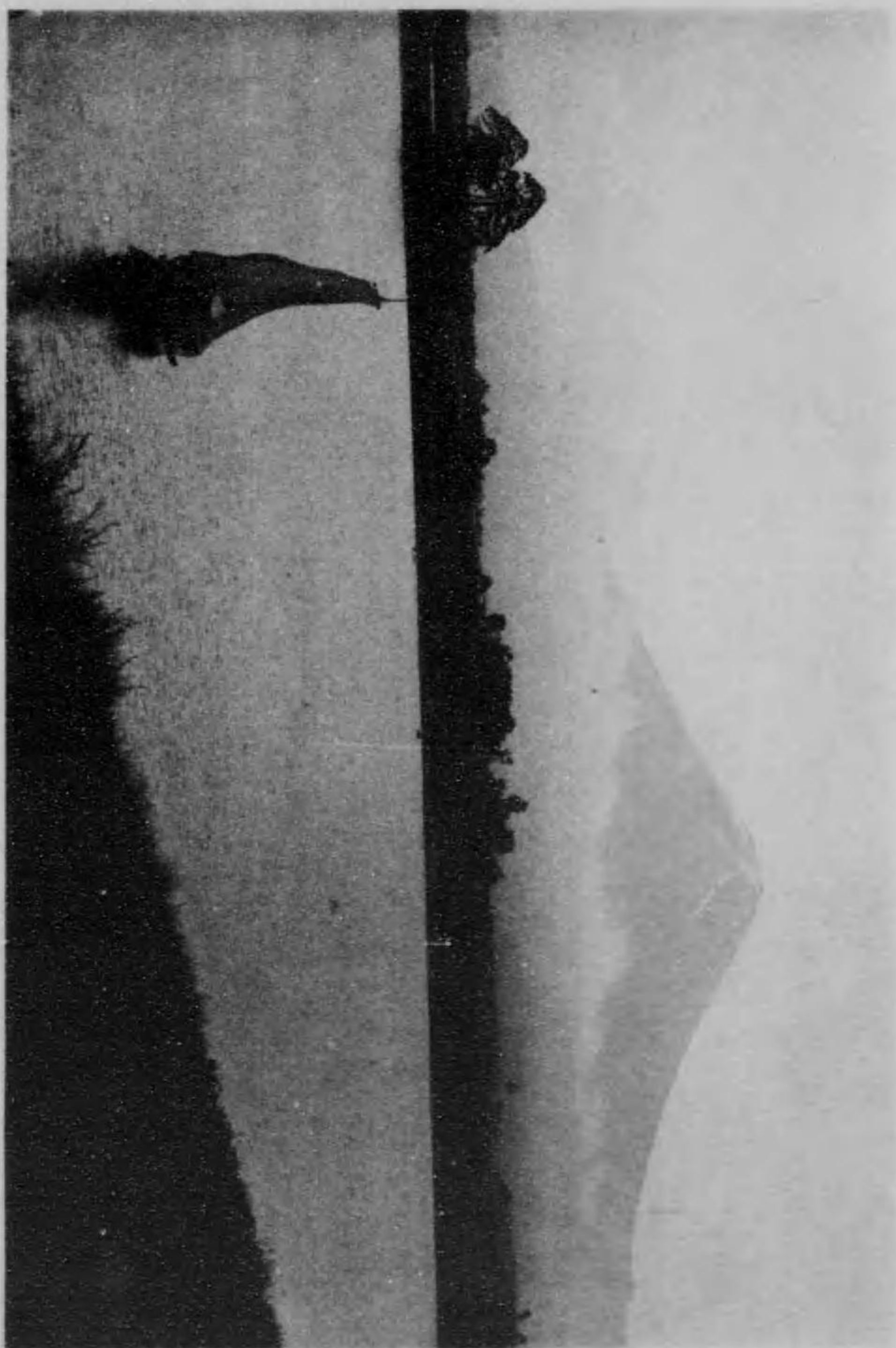
本湖畔に大グラウンドを建設し其他各専門學校に於ても同建設を企畫し居るもの多し。

一六

### 河口湖

所在地 南都留郡船津河口、大石、長濱、小立、勝山村

富士五湖の一にして東西二里南北一里、湖岸の長さ第一位にあり、周圍四里二十六町、標高二、七四〇尺、南に富士を望み影を湖心に浮べ、所謂河口の逆富士と稱し世に著はる、此湖無口湖にして大雨の時は湖水氾濫、沿岸の村落を侵したるも、十數年前船津に一大排水口を設け桂川に放流するに至り稍々水災を除く、湖岸の河口船津は鎌倉街道の衝に當り、近年嶽麓の開發に伴ひ船津、河口間船津、大石、長濱間には十數のモーターボート常に飛來して交通に便す、湖畔の各所には旅館別荘等の施設ありて觀光者を迎ふ、船津に嘯山公園あり、全山翠松を以て蔽はる、北に續いて産屋が崎あり、湖中大石村に面して鶴の島あり、嶋は四境悉く懸崖をなし西に向つて僅かに一路を残す、老樹綠層の間を登る二町にして最高所に達す、年古りし辨天の祠あり、祠背の丘上なる四阿より富士の全容に對する風景最も優秀にして雄大の觀あり、傳説によれば日本武尊東征の時、富士の裾野を過ぎ大石峠の嶮をこえ、芦川村より奈良原、八代、國玉を経て板垣に出づるの途次、此島に



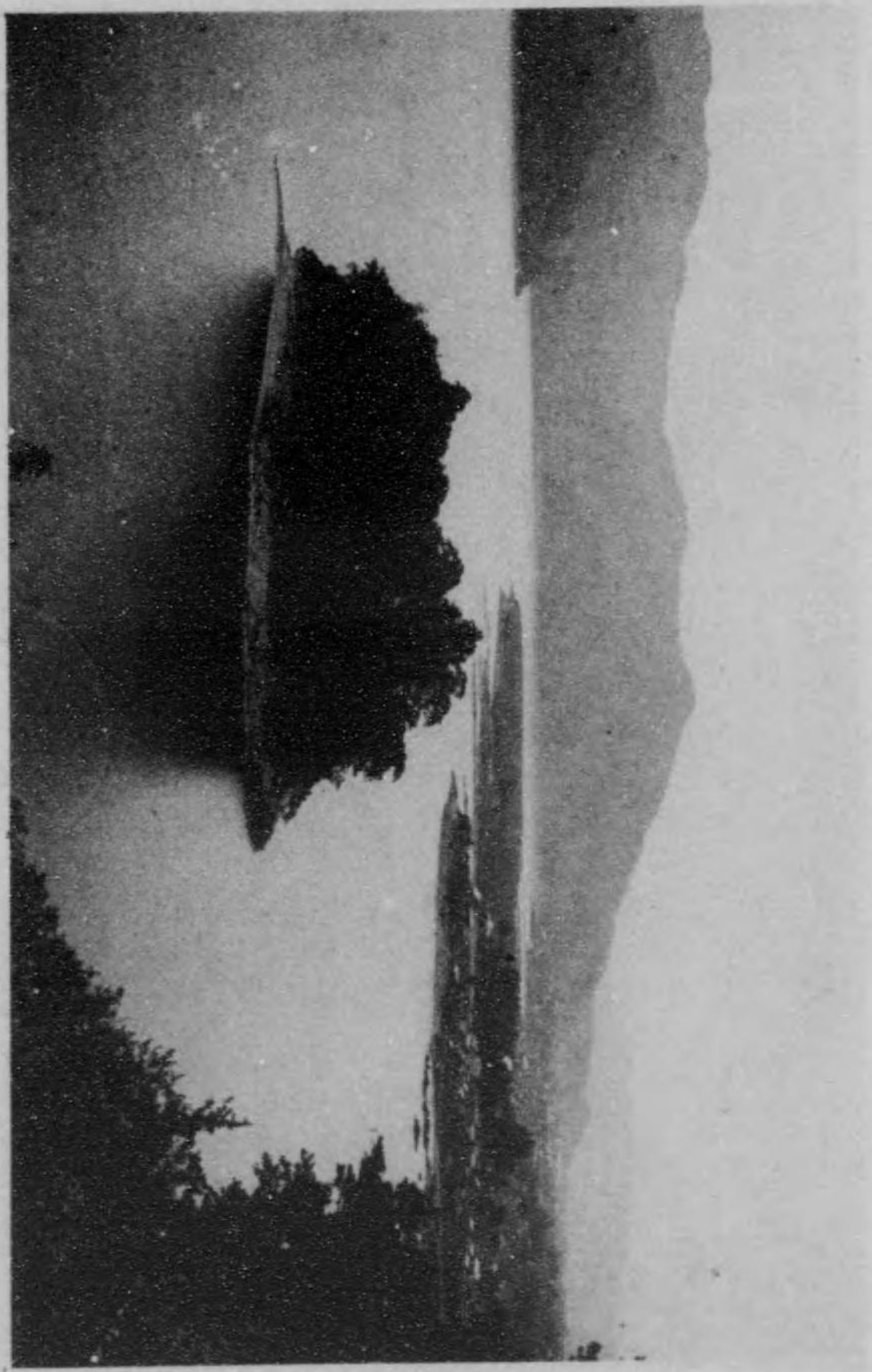
湖

口

湖

一六





島  
の  
船



て凱旋の式を挙げしと云ふ、近くは大正十一年十月、畏くも東宮殿下本縣へ行啓の際、鶴駕をよせられ、折から秋雨蕭々たる富士に對し、親しく雲霧の去來を嚮はせ給ひし處なり。湖の南岸に小海と云ふ部落あり、其の湖岸近く、簇立せる松は幾百星霜の風雪を凌ぎ、老ひくねる枝幹の風趣雅致ふかく、稱して敷島の松と云ふ。國營巻煙草敷島の表装の圖案となりしとて、新名所の一として宣傳せらる。湖中の魚族は鯉、鮒、鯰、腹赤、石班等なりしが、近年海老、公魚を放養移殖せられたるに、其成績良好なりと云ふ。若夫れ湖中に綸を垂れんとせば、釣船、釣道具の準備あり、冬期は雁、鴨等の水禽、集し一段の趣を添ゆ。

清水濱臣

影うつす富士の高峰は埋もれて残る水よき河口の湖

### 御坂峠

#### 所在地

南都留郡河口村、東八代郡黒駒村

往昔御坂三里と稱し、鎌倉街道に於ける第一の難關たり、標高五〇三三尺、甲駿の要路に當る、日本武尊東征の時越えられしより、神の御坂路の稱あり、頂上の城趾は天正十年北條勢の陣砦たり



し所、此地より望めば河口湖は脚下に碧水を湛へ、波なき湖心に富岳の倒影するさま宛然畫面に接するの觀あり花・水・坂・西・行・坂と共に古來甲斐富士見三景の名勝たり。

御坂路に氷りかしかける甲斐が根のさながらさらすたつくりのこと

能因法師

時しらぬ雪に光りやさえぬらん富士の高峰の秋のよの月

藤原教定

よの山の高峰たかねをつたへきて富士の高峰にかかる白雲

家隆

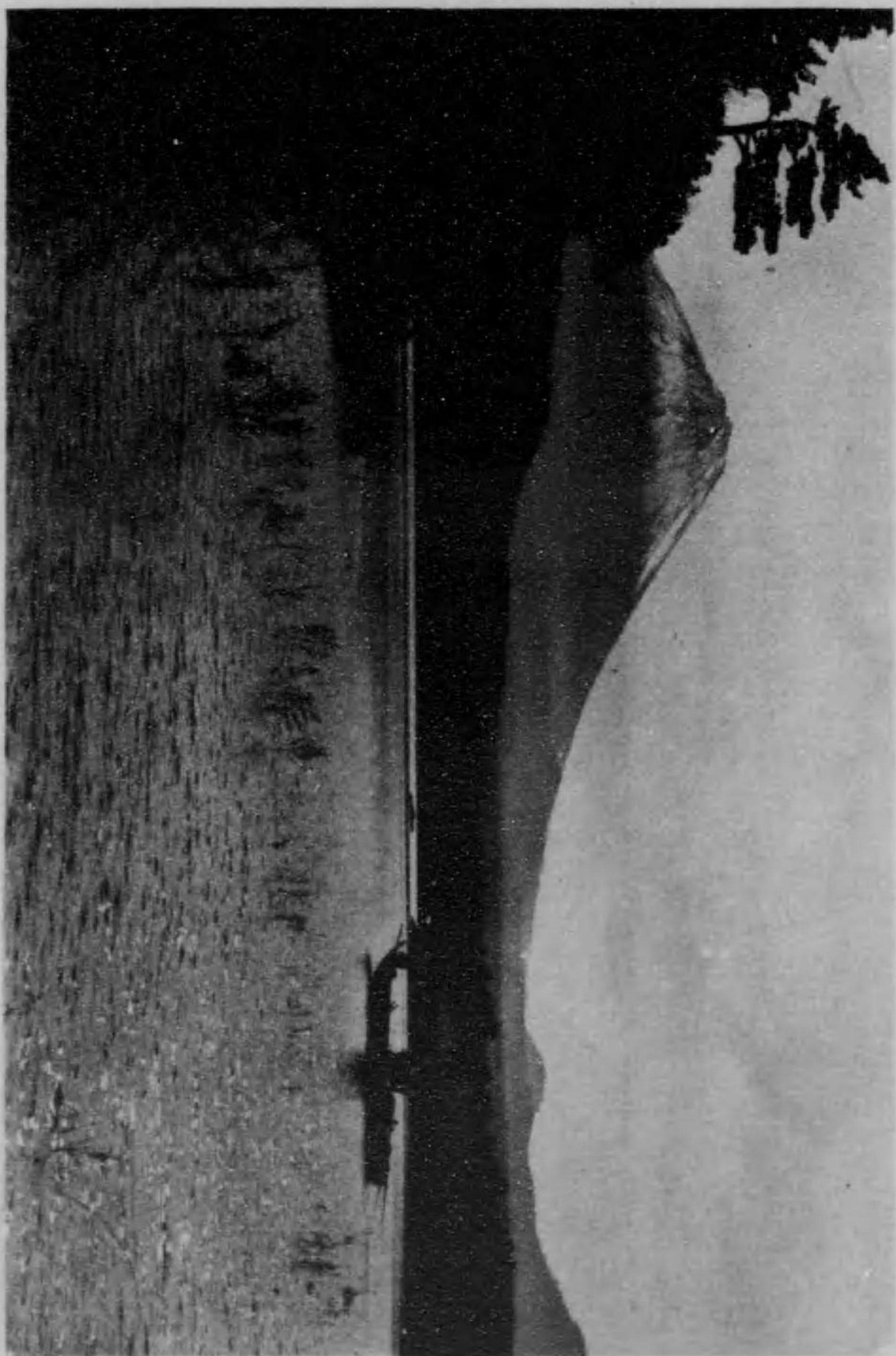
萩生祖徠

美人微笑立雲端 向背誰言都一般 欲識士峰眞面目 却從甲斐國中看

### 西 湖

所在地 南都留郡西湖村

富士五湖の一にして、河口湖と僅かに一嶺を隔つるのみ周圍三里十八町標高二、九八〇尺河口湖畔の長濱より烏居峠の洞門をくぐれば豁如として西湖の別乾坤を現す、北方部落の後方に屹立する十二ヶ岳は相重疊して湖面を壓し碧水を隔て、青木が原の樹海は遠く連綿として雲に入る、此湖もと精進、本栖と共に一湖をなし、富士の西麓に於ける代表的太湖たりしを以て西の湖

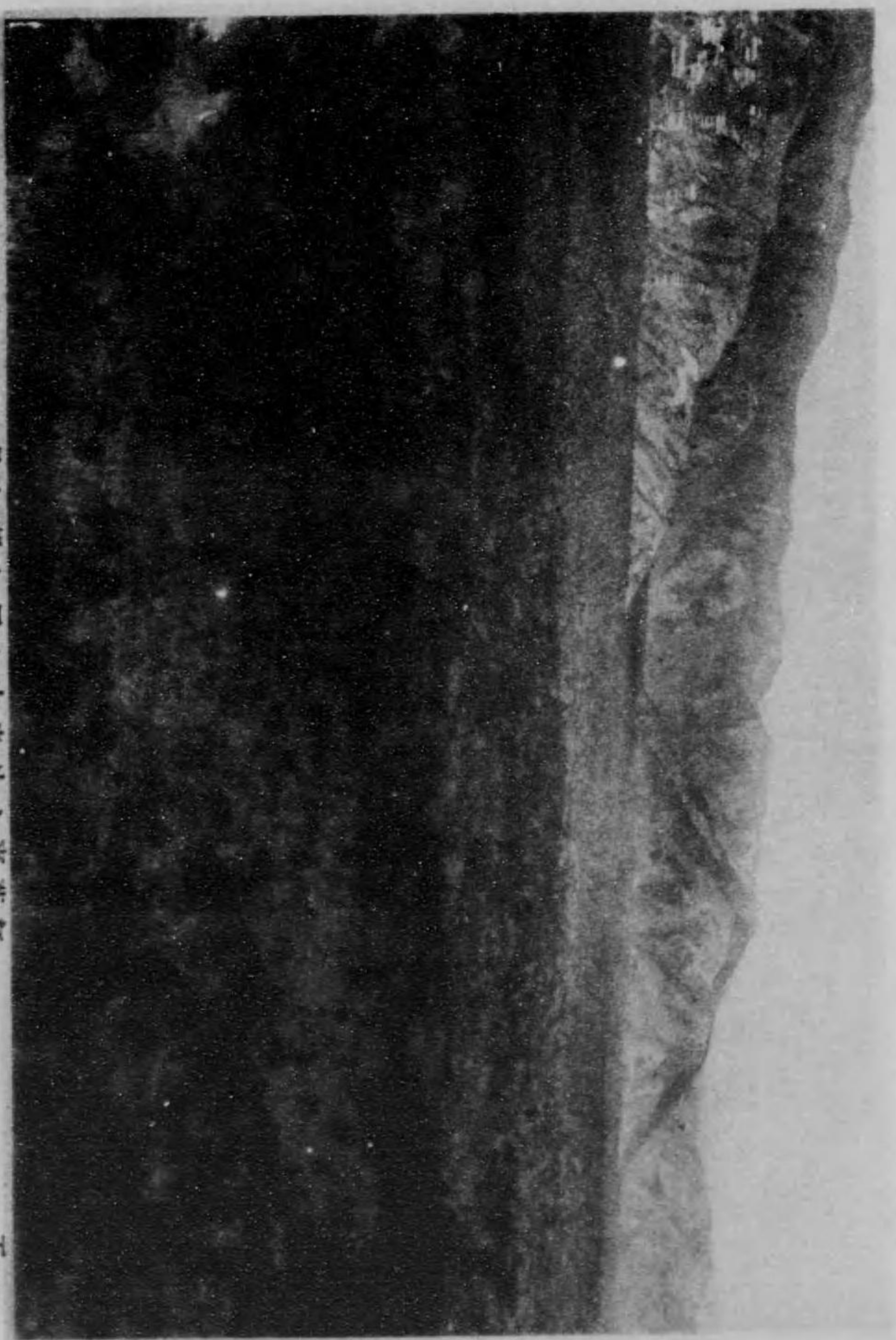


醉

屋

四一





景む望を原々木青りよ深葉紅



剡の海等の名あり、萬葉集、虫麿歌集に「背の海と名けてあるも其山をつつめる海ぞ」と詠ぜし處なり、斯て貞觀六年富士の噴火により熔岩流出して遮斷され本栖、精進と分轄さるるに至る、今尙三湖水準面の同一なるは湖底相通する所以なりと言ふ、之れも河口湖と均しく無口湖たりしが、近年北岸なる足和田山腹に隧道を穿ち河口湖へ百五十尺の落差をとりて發電所を設く、魚族は河口湖と大差なく只十數年前姫鱒を放養せるに、其成績優良にして今や西湖の姫鱒と稱し名産の一となれり。

### 紅葉臺

所在地 南都留郡鳴澤村

西湖畔に突出せる一峰にして足和田山嶺の峰線延びて青木ヶ原の平坦に落つる處にあり、脚下に西湖の風光を望み青木ヶ原の樹海を瞰望す、初秋既に降霜を帯び蒼綠の間に眞紅の點綴する景他に需むる能はざるの詩趣ありて眞に紅葉臺の名にふさはしき處なり、河口湖畔の小海より敷島の松に至り足和田山嶺道路によれば自然足の向ふ所となる、又吉田より自動車にて鳴澤を経て山麓に至り其より徒歩三十分にて頂上に達す、昔は名もなき湖畔の一丘たりしが、今は嶽



北に於ける景勝地として逸す可からざるものなり。

長尾平

所在地 南都留郡鳴澤村

精進より林道を経て小御嶽に出づる所謂精進口富士登山路なるもの近年開鑿せらるる道にそふて西に大室山突起し、東に長尾山と稱する圓錐形の一峰あり、等しく寄生火山にして海拔一、三七〇米突頂上に舊噴火口あり、其南麓は長尾平一名天神峠にして、やと平坦をなす所、弓射塚の裾に接し落葉松の密林あり、よく風霜を凌ぎ枝幹屈曲或は伏して蛇尾の如く或は亂立銳鋒の如く稱して長尾公園といひ、精進口の一合目となす、現時村經營に屬する常設の休憩所あり、以て登山者の便を圖ると雖、只飲用水に乏しきを遺憾とせるに、近年附近に無盡藏なる氷穴を得て此欠陥を償ふに至れり。

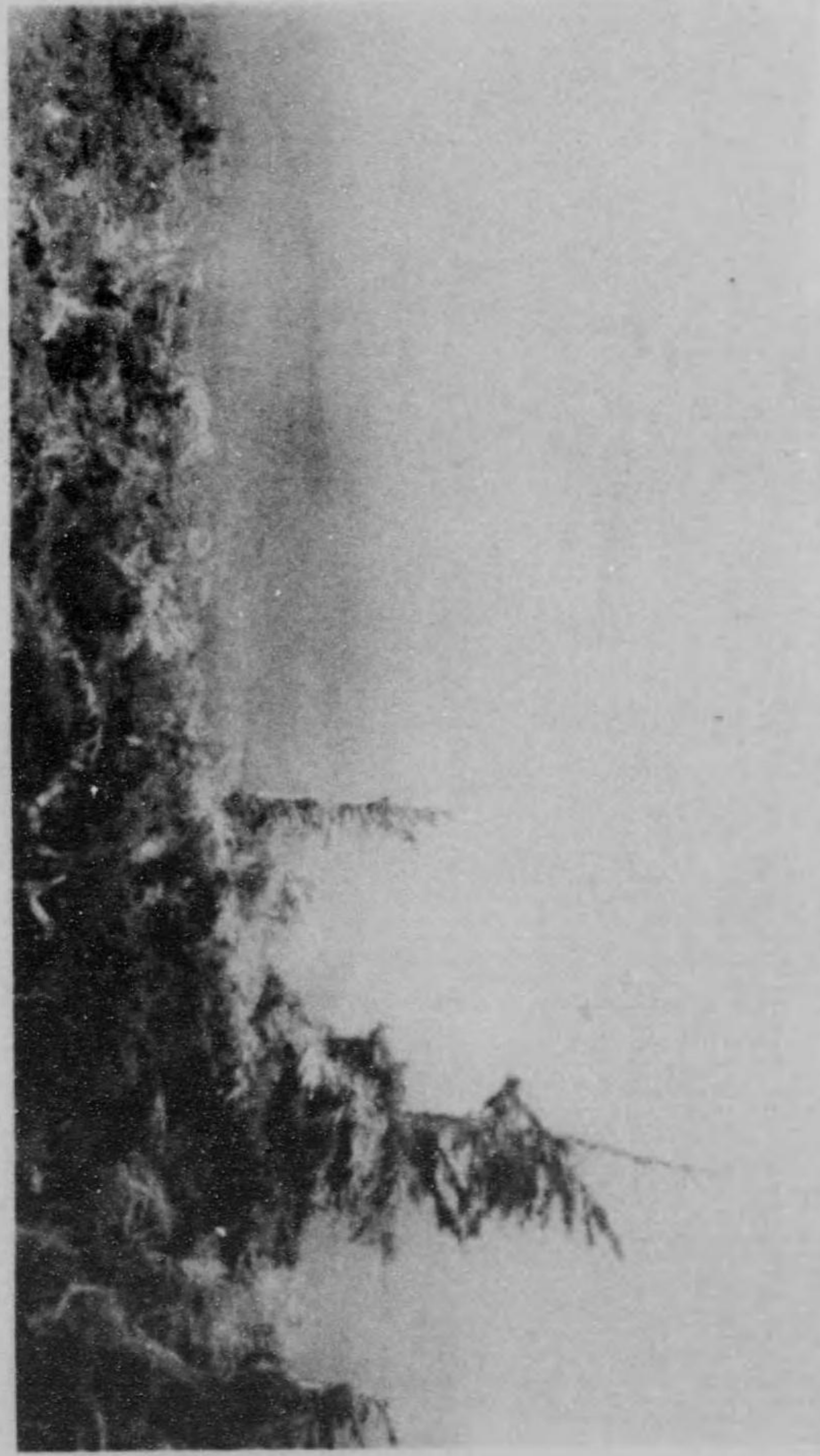
富士の御庭

所在地 南都留郡鳴澤村、富士山五合目



平尾長六一





庭

御

七





猿

御

小

八一



精進口富士登山道五合目(吉田口五合目より十二町)を小御嶽と稱す、砂礫より成る古き側火山にして、雅致に富む落葉松の群落に蔽はれ、小御嶽神社鎮座す、社後の展望頗る佳なり、小御嶽より御中道を西に入れば約一里にして御庭に至る、其の面積八十町歩の廣きに亘る、上方を御庭と稱し、下方樹木の茂れる部分を奥庭と稱す、特種の焙岩上に千古を経たる落葉松の老木風の爲めに高く伸ぶるを得ず、枝は地に俯し、俯しては偃ひ古色蒼然、奇趣横溢、實に清淨美觀の仙郷たり、御庭の景觀は展望又大に勝れ、南アルプス、八ヶ岳、甲府盆地、關東山地、御坂山脈等を一望の下に集め、脚下に碧澄せる湖水、及青木ヶ原の大樹海を俯瞰し、眺望絶佳、富士山中特殊の勝地たり。

### 青木ヶ原

青木ヶ原の大森林は西精進本栖の三湖畔より大室山に亘り鬱蒼際涯なき樹海をいふ、貞觀六年、富士噴火の際流出せる焙岩帯の森林にして、其根を悉く丸尾の裂隙中に衝き入れ、密生せる原生林たり、或は高く或は低く、長尾、大室、弓射塚等起伏常なく、遠くみれば恰も海中に浮ぶ島嶼に似たり、西湖に船を浮べ、水に映する翠巒を亂して西に渡れば、根場に著く、船を捨て、坦々たる大正道路を入れれば、直ちに青木ヶ原の樹海となる、密生せる樹林はよく千古の風霜に堪へ、焙岩散亂、起

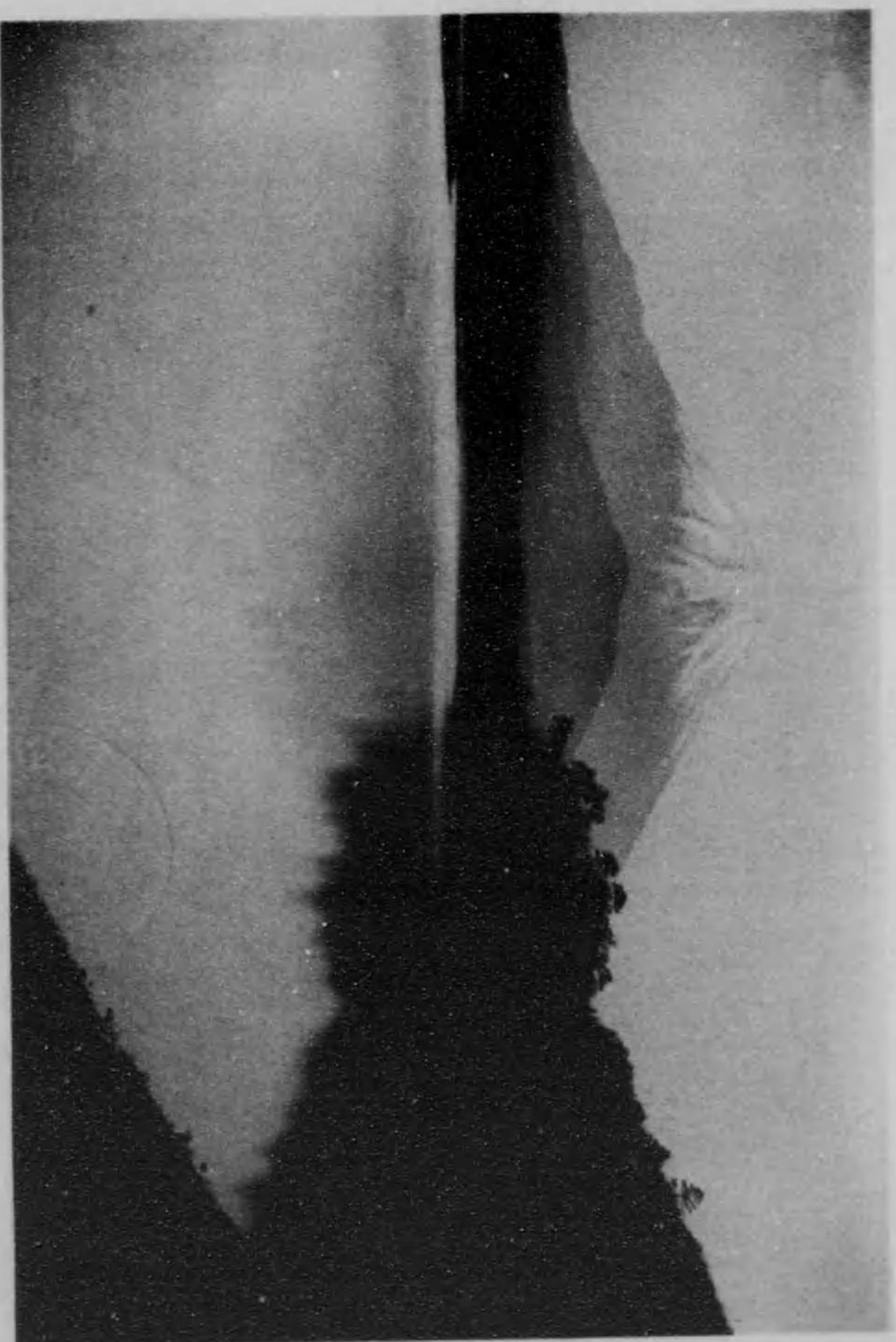


伏凹凸、苔蒸し、石朽ち或は枯木倒れて蛇尾の如く這へるもの、或は熔岩くづれて靈芝の如く立てるもの、一石の寄、一木の珍、凡そ天下の名裁奇木を一地に蒐め名工をして如何に巧みに配置せらるゝも恐らく之れに擬するを得ん、一步は一步送迎に違なく幽邃境裡際あるを知らず、眞に塵寰を離れたる神仙遊翠の別天地なり、大正道路を入る一里強にして御殿庭に至る、樹林や絶えたる間に富士を望む、此附近塗黒なる熔岩特に重り、恰も人工の庭園をみるの感あり、斯る大自然が斧鉞の冒さるゝ所なく、今や世界的に讚美せらるゝに至れるは、古來交通機關の不備と比較的街道筋を離れたる等の關係、裏富士一帯は全く世人の閑却せらるゝ所となり、足跡至らず一の神秘的靈地たるものゝ如く天然に保護せられ、東海の鎮たる秀麗極まりなき富嶽と相待つて此自然美を發揮するを得たり、而して之れを管に名勝地として逸す可らざるのみならず貴重なる博物資料の寶庫として天下に誇る可きものなり。

精進湖

所在地 西八代郡上九一色村

富士五湖中の最少にして周圍二里十六町、標高西湖に等しく一名石花湖と稱す、傳説によれば





役の小角富士登山の通路となれるより後世此處より登山する人多く湖中に入りて沐浴齋戒せ  
るを以て地名となれりと、北に阿難坂を負ひ、東南青木ヶ原を隔て、富士の雄姿を望む、西湖より  
大正道路を経て樹海の變化に打興じつゝ易々として精進湖畔に出づ、大聲呼べば聽て對岸のホ  
テルよりボートを出して客を迎ふ、層巒夕暉に浮ぶ蒼黒の湖面を白き端艇に棹さし渡る詩的感  
興は湧然として爽快さり難きを覺ゆ、こゝは嶽麓五湖中、風景に於ては其白眉とも言ふ可く、俗塵  
寰外なる幽邃境裡、一蠶の痕なく一指の垢なき名畫に接するの感あり、煤煙揚らず脂臭至らず松  
に天籟の樂あれば水に太古の調あり、心神爽快恰も原始の境を彷彿するが如く、湖畔に立ちて眺  
むれば青木ヶ原の樹海は斜面なだらかに富士の中腹に達し、正面に大室山突起す、西南は烏帽子  
岳の山脈を以て包み、湖岸鷯の崎の突端松翠滴る處に白雲のホテル隱見す、倒影湖心に亂れず、漣  
漪音なく幽靜閑雅疾くに歐米に其名を知られ萬里を遠しとせず白人の年と共に來遊する者多  
く、特に英國には早くより宣傳され、ボンテングのすみれ集及びビュローの旅行案内によりて紹  
介せられつゝあり、湖畔の精進ホテルは全く設備洋式にして夏季の避暑より紅楓の秋、雪の富士  
觀望クリスマス前後よりスケートに至る迄、觀光の客常に絶えず、曾ては英國皇儲殿下深く此地  
の風景に御憧憬遊ばされ、大正十一年御來朝の時、親しく御遊覽の御豫定なりしも、當日大風雨の



ため中止され、次で同年秋十月、我が 東宮殿下本縣へ行啓仰出され、此ホテルに御二泊遊され、いたく此景勝を愛で賜はせらる。

登 仙 角〔バナラマ臺〕

烏帽子岳の連互嶽麓に向つて突出せる一角を云ふ、精進湖畔苗積澤より登攀二十三町にして達す、針葉樹及潤葉樹の密林中、道屈曲折して急峻をなす、登り果つれば御坂峠より阿難坂を經由せる山嶺道路と接続して南に走り、全く密林を出で、眺望廣漠たる山上の平地に出づ、是れ即ち登仙角(バナラマ臺)にして、東宮殿下御野立趾に四阿あり、山上の眺望は恰も裏富士一帯の鳥瞰圖をみる如く、青木が原を隔て、富士を眉端に仰ぎ、脚下に精進、本栖、西湖を俯瞰し、足羽田山と烏居峠の相接する所、缺所ありて河口湖の一端を望む、眼を南に轉すれば、近く本栖湖を隔て、龍ヶ岳に對し、東南遙かに裾野の傾斜なだらかに雲烟模糊の間に駿河灣を望む、更に踵を回せば、中の倉の丘陵蜿蜒西に延びて富士川の流域に盡き、突如雲を抜いて赤石白根の大山脈立續き、北方八ヶ嶽より秩父連山に至る迄、峯巒長く連互し、其展望眞に豁然たるものあり。



岳に對し東南遙かに裾野の傾斜なだらかに雲烟縹緲の間に駿河灣を望む更に踵を回せば中の  
倉の丘陵蜿蜒西に延びて富士川の流域に盡き突如雲を抜いて赤石白根の大山脈立續き北方八  
ヶ嶽より秩父連山に至る迄峯巒長く連互し其展望眞に豁然たるものあり。



登仙角(マラノバ)の景





景の(マラノバ)角仙登





湖 栖 木



## 本 栖 湖

所在地 西八代郡上九一色村

富士五湖の一、周回三里五町標高精進湖と同一にして、西湖と共に水準面の昇降常に一定せるは、地下の熔岩をくぐりて湖底相通するが故なり。湖岸に接續して本栖部落あり、住民多くは木炭製造、林産物の加工を業とす。武田氏治世の頃は戸數千餘戸山間の小都市を形成し龍ヶ岳の麓なる河尻千軒と共に繁榮を極めたりしも、河尻鑛山の全く廢坑となれると、本栖湖水量増加の爲め生活上の安定を失し、さしも殷盛たる千軒部落も槿花一朝の昔語りとなり今は僅かに下駄、箆天稗棒、糸棒等の製造を以て一縷の烟りを立つるに過ぎず。此湖一名鶏の湖とも言ふ。湖水深透鏡の如く澄み渡り、悠揚眠るに似たる湖心の平和は永久の沈黙をなし、龍ヶ岳の峻峰影を落し、雄大にして荒寥、幽邃にして靜寂の感、人に迫る。今湖沼學者田中博士の説によれば、富士五湖中、水深第一位にして最深度一二六米突に達し、無口湖なるを以て排水は一に天日の蒸發に待つのみ、故に降雨過大の時は湖面隆起し、湖畔に漲漫して容易に減せず、而して湖水は頗る濃厚なる藍色を呈し、一度湖上に棹させば、恰も海洋の碧濤に漂ふの感あり、水は清澄透明、質良好なるを以て飲料に適



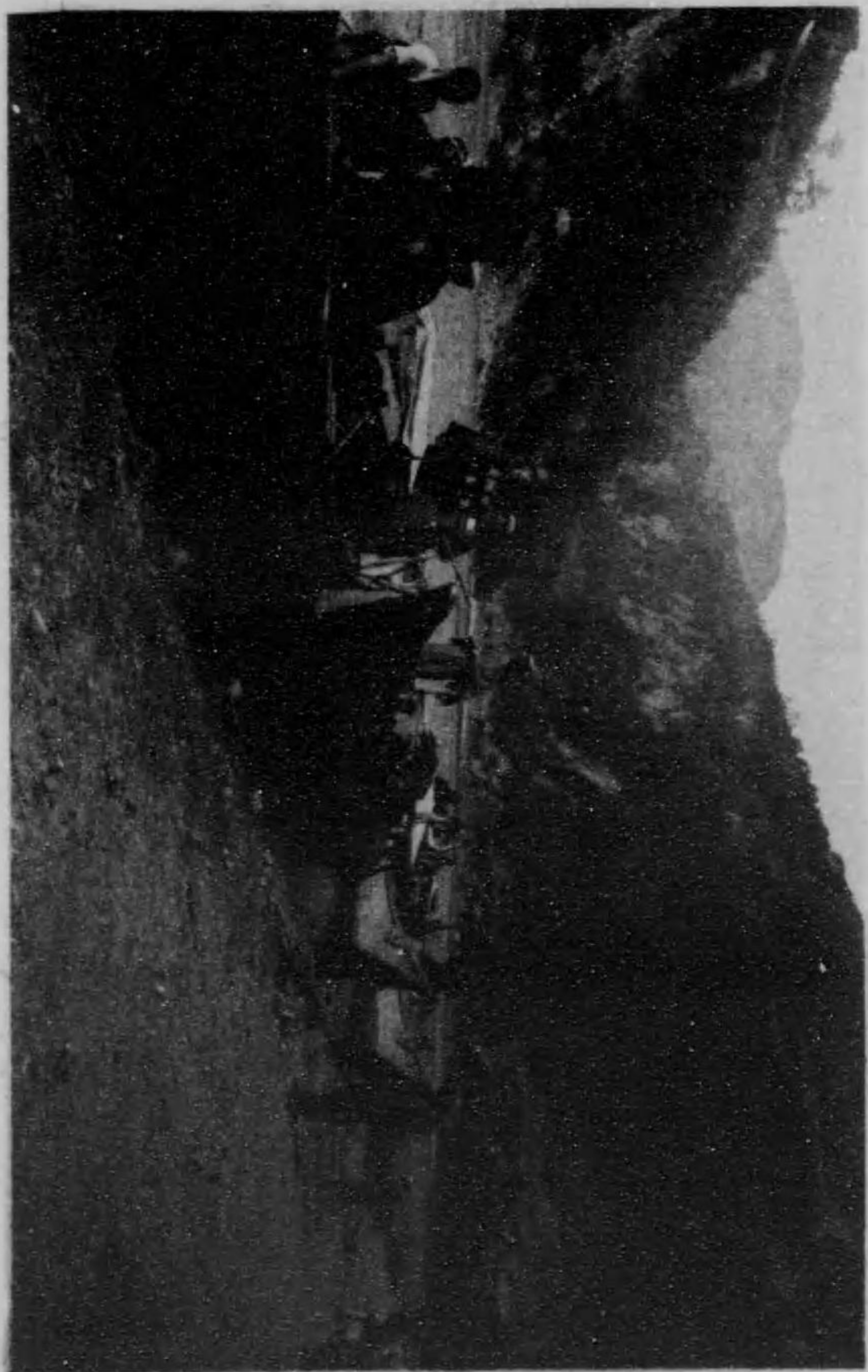
するは勿論、其他の工業灌溉用としても更に不可なるを認めず、本柄部落民が熔岩上に居をトして此水に生を託するは天恵の一と言はざるを得ず、水温測定の結果よりすれば純然たる熱帯湖の標式を有し、冬季と雖結氷する事なしと言ふ。

### 峡南方面

#### 富士川

所在地 西八代、南巨摩郡界

徳川時代に於ける江戸甲府間交通要路の一にして、生産物資移出入の咽口たりし所、幕府の貢米は悉く此の通船によつて清水港に廻漕し、旅客貨物の運搬を共にせり、發船所、鵜澤、河岸より駿河の岩淵、迄十八里、急流に鑿を押せばよく半日にして達す、太古甲府盆地は一大湖水たりしが、景行天皇の御宇、埴土翁なるもの湖水疏鑿の工を起し、後養老年間、僧行基本州に入り、更に劈開して富士川に導くと、は國誌の示す所、下つて徳川時代に至り、慶長十二年、角倉了以家康の命により河川の大改修を行ひ、五ヶ年の日子を要し、同十三年初めて船を通ず、後更に河床の變化著しく、危険



近所、船發、川、士、富



多きを以て了の子、立之及飯田の古屋彌次右衛門此工事を繼續し全く交通の安全を圖るに至れり、現時の發船所より數町の下流なる天戸と言へる部落は當時の鰍澤にして、之れに續ける禹の瀬が其排水口なりといふ、渡船は長さ七八間巾六尺、船底を平らになし河床に隠れたる岩礁の衝突をさくろに備ふ、舟子は舳先に棹をとつて河流の進路に向ひ船を操縦す、更に後尾に櫂をもつ所謂舵手と船腹に艫をこぐものあり、斯くて乗客二十人、多少の貨物を積載す。近時飛行艇なるものと往復するありて愈々航程時間を短縮せらる、觀光の季節は陽春四月山吹の花咲く頃より秋の紅葉に至る迄とす、船は時間によりて發す、發船所を離るれば忽ちにして禹の瀬の急瀬をながれ、鬼嶋を右岸にみて富士川第一の難關たる天神ヶ瀧にかゝる、水流矢の如く巖の缺所を迂りて一段の瀧をなす、碧潭水漫々として蛟龍の棲むかを疑ふ、航路甚だ危険なるを以て旅客は上流に船を捨て碇を徒歩して瀧の下流に待つ、舟子は船を回轉し舳先を上流に向け數條の綱によりて徐ろに之れを曳下す、此附近箱原と稱す、右岸の巖頭に天神の祠あるに因り其名の起れるなり、尙行くに従ひ幾多の支流を合し船の流るゝ愈々急なり、山郭水村藁屋の點々として斜面の處々に竹林あり、峰の斜面に群を抜きて鋭く蒼黒の杉亂立し、峻直削るか如き懸崖の蔭に炭竈の煙り細く棚びき揚柳眠るが如き渡しの岸には、主なき船に浮嶋の夢安く村童打群れて論たる

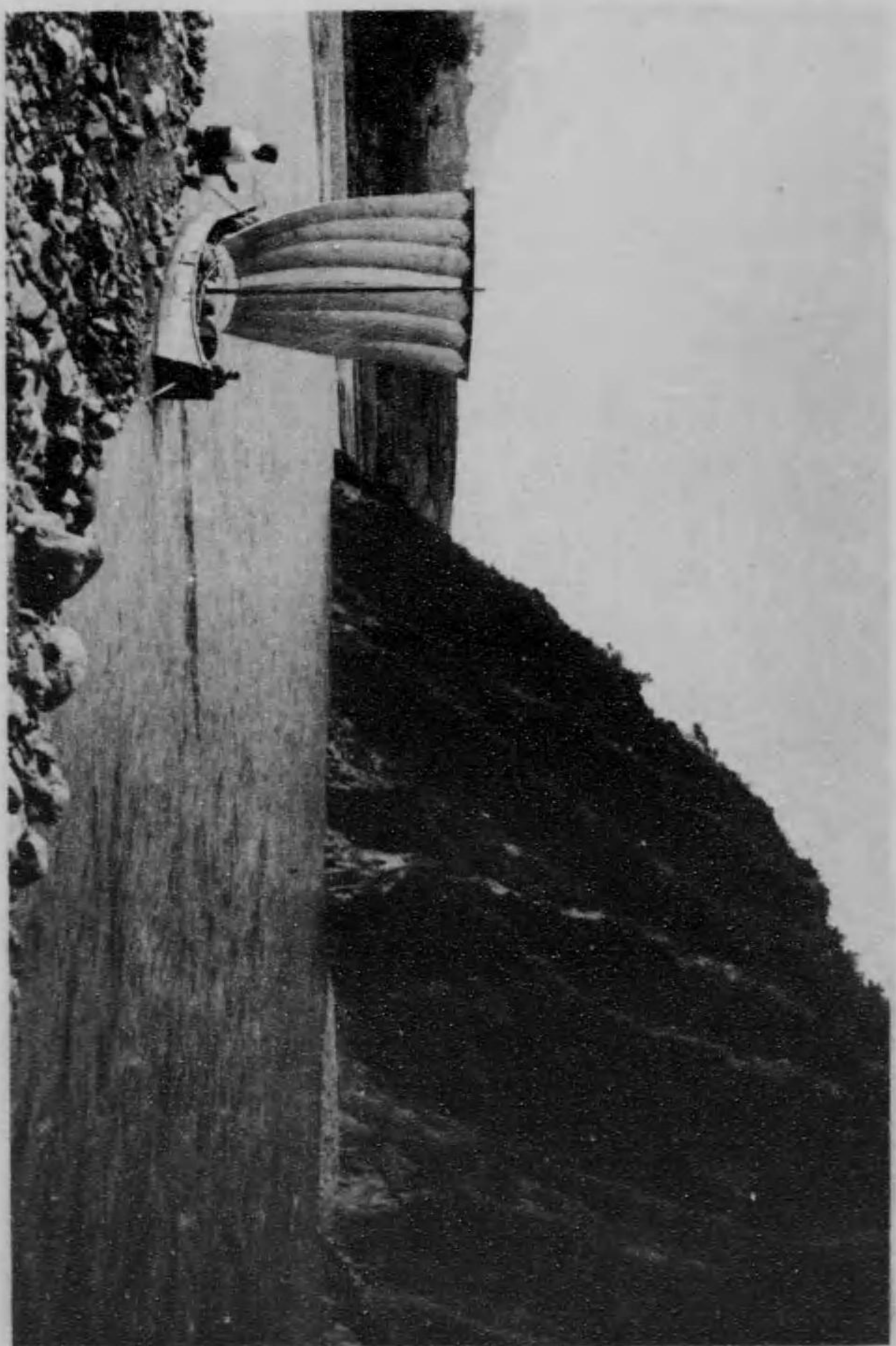


この外、山水寥廓として完く人籟を聞かざるの感あり、左岸楠・甬村・近く鴨・狩・峠の一角をこえ、巍然たる富士を中天に仰ぐ、右岸に製紙業地の西嶋あり、船は幾回か客を送り且つ迎へつゝ行く、忽ちにして西の峽間七面・策ヶ岳と連互せる白根山脈の一端を見る、身延山は今や目捷に迫り、題目の聲は常に此船中に於て聞く所なり、下山を過ぐれば早川、右より來りて合す、水勢愈々急に突如進路を遮る、屹然たる大斧壁は屏風、風岩の難關にして、船は恰も彼れを突撃するものゝ如く、激浪に翻弄され、今や岩角に當り粉砕されんとして、舟子は巧に棹を立て徐ろに廻轉す、船腹と岩礁と眞に間髪を容れず折觸せんとして折觸せざる此刹那、思はず手に汗し、そぞろ心膽の寒きを覺ゆ、是天神ヶ瀧に次ぐ第二の難所たり、程なく右岸の波高嶋に着く、之れより常盤川の流れにそふて、溪谷を東に入れば一里にして下部温泉に至る可し、次で來る右岸の波木井は身延行きを捨つる所、更に數分を出でずして航路の終點丸瀧は即ち富士身延鐵道の起點身延驛の所在地なり。

夫木集

峰はもえ籠は氷る富士川のわれもうき世をすみぞわつらふ

## 下部温泉



岩風峠



所在地 西八代郡富里村

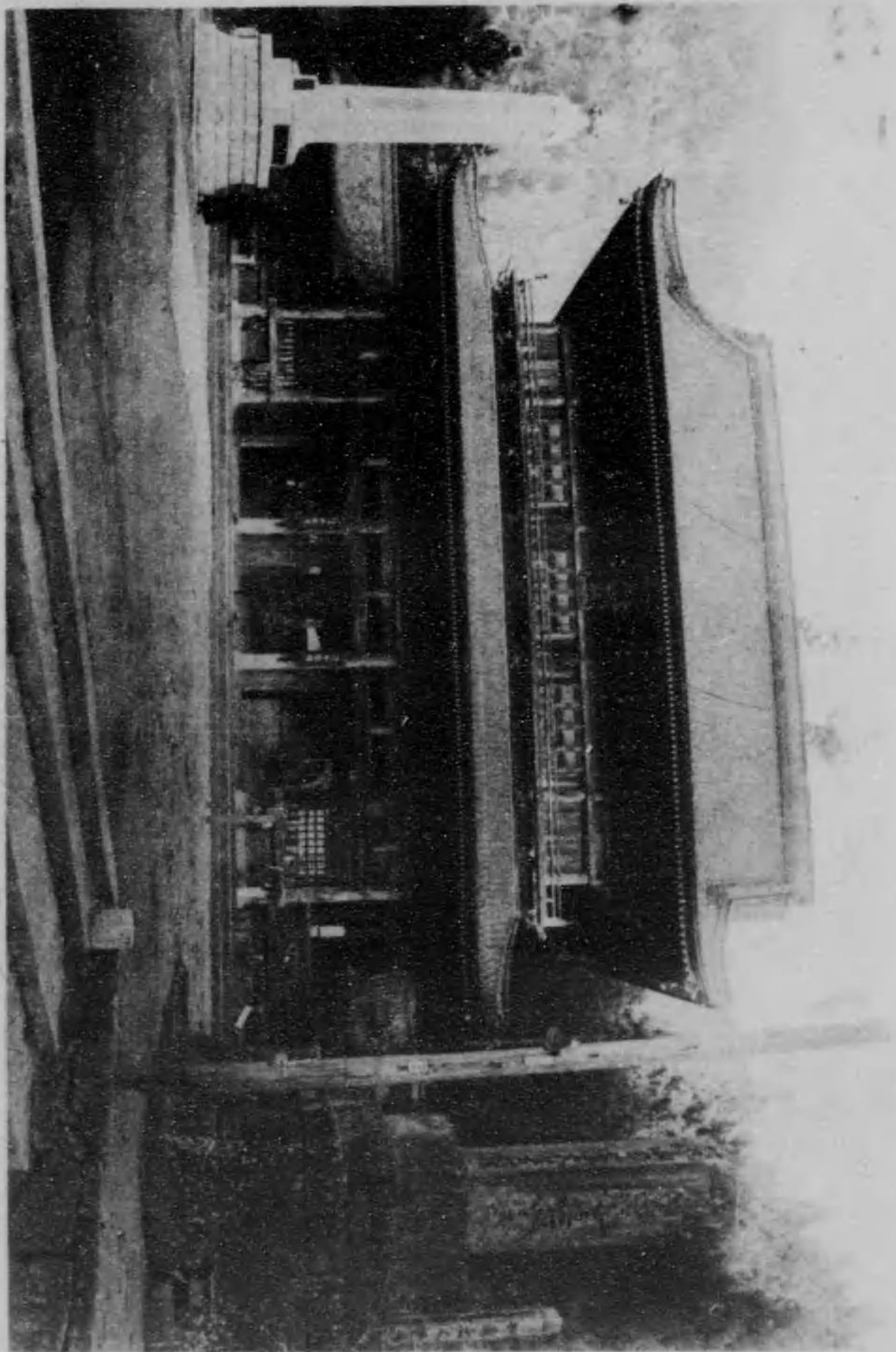
波高嶋より常盤川に沿ふて東に入る約一里、常盤川の支流湯川の沿岸にあり、山秀で、水清く、飛瀬峡谷に響き寂として清閑幽靜の地たり、旅館四戸あり、よく數百人の浴客を收容するに足る。此地は冬暖に夏涼しく、三伏の暑と雖華氏八十五度に至らず、而して土地の高燥と泥土沼澤皆無と、空氣清涼なる關係よりして蚊蠅極めて少なし、温泉は湯川の岸より湧出するを其儘浴槽となすも、溫度低きを以て冬は之れに加熱して入浴す、傳説には仁明天皇の承和三年、熊野權現の出現によりて始めて湧出す、其後修理大夫正信といふもの神祠を修造し、天正年中穴山梅雪之れを再修し、其後徳川家康入浴ありし時、制札を神官依田氏に賜ふと、斯くて昔は信玄公のかくし湯と稱し、金瘡に効能顯著なるを以て、當時麾下將卒の負傷は悉く此湯にて治癒せしむ、今も數十里を遠しとせず、負傷患者の訪ひ來ると又、此温泉を樽詰めとし、遠隔の地に輸送するなど、實に其効顯著く許りなり。

身延山

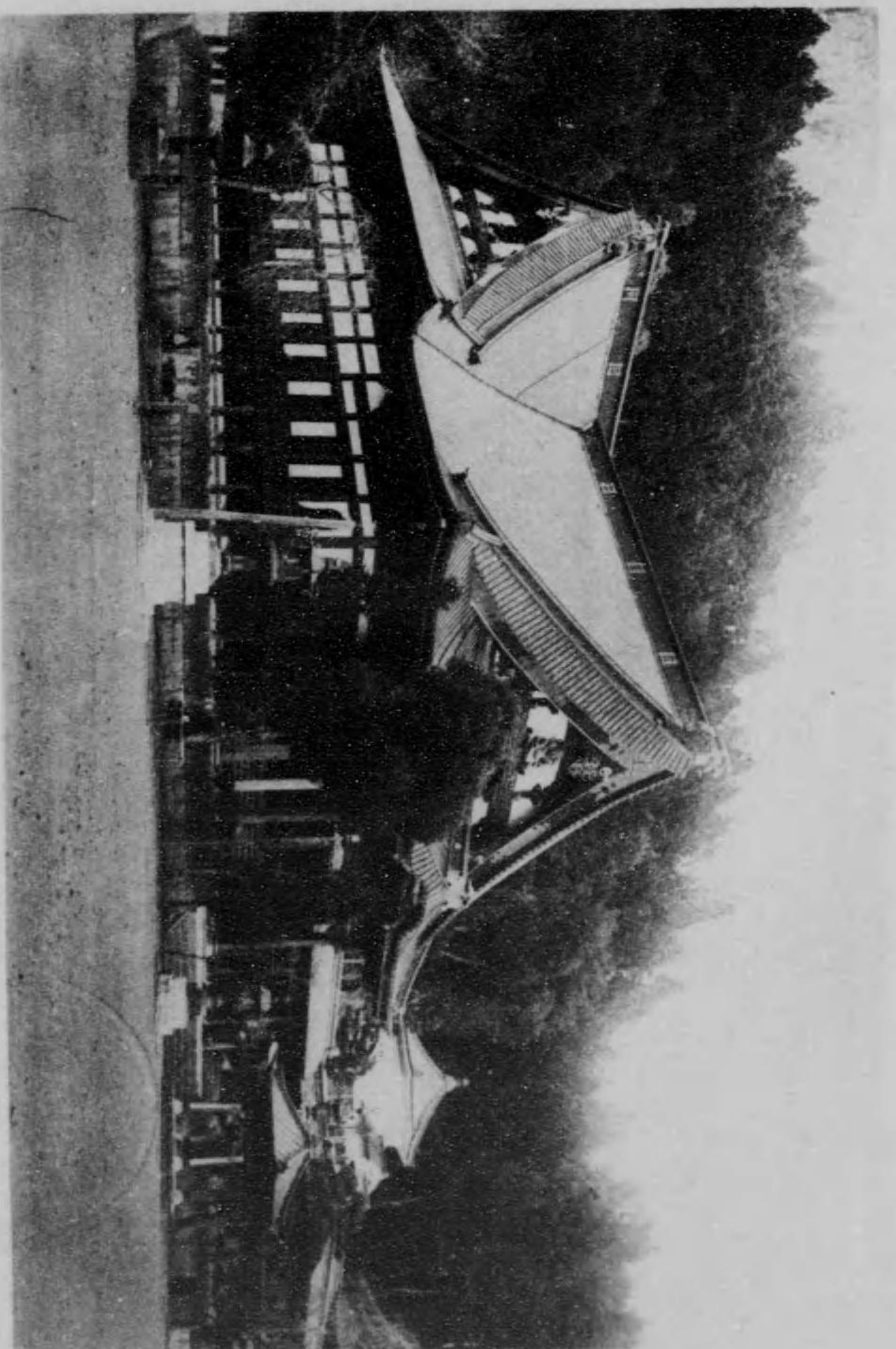
所在地 南巨摩郡身延村



日蓮宗總本山久遠寺によつて著名なる身延山は、靈夫の里と稱し古來名邑の一にして、營に單純なる佛跡たる以外風光に於ても特殊の印象深き處、元より佛者が草創の當時、豫め風景交通水利其他に亘り微細の用意を拂ふて適當の地を相せるが故、靈場必ずしも靈場のみならず、之れに伴ふ自然は俗塵界を超越して所謂山水明媚清淨を以て誇るに足るものあり、身延山亦然りと云はざるを得ず、喬杉立續き綠蔭ふかき處、碧丹の堂塔隱見し、清冽玉の如き溪流は、賽者の心神を洗ひ、よく其自然は人工美と相待つて愈々靈威の莊嚴なるを懐はしむ。宗祖日蓮は法華經創設の大志をいだし、難行苦行捨身の修練を積み、あらゆる百難を排して幾多の迫害に打克ち、更に一面法敵の襲來に備ふる自衛上の施設なかる可らず、熟々身延の地勢を案するに、四面峰巒圍繞し、僅かに南に向つて一路あり、之れにそふ流れは奥深く通じ、思親閣は天然の望樓にして、山又山を越えて一徑遠く七面山に至り、之れを非常の避難所とす、斯る自然の要害に開拓の基礎を造れるは、完く偶然に非らず、大偉人が宗門創設の道場として用意周到を極めたりと言はざるを得ず、身延の町は富士身延鐵道の身延驛より二十町、富士川畔の波木井より十五町にして、町はづれの總門に至る、左の丘上に小堂あり、文永十二年夏、日蓮此山に入らんとして、波木井氏と會見の趾、蓬嶋といひ、別に發心堂と名づく、堂前に上人腰掛石あり、總門を入り身延川に架せる大平橋を渡れば町

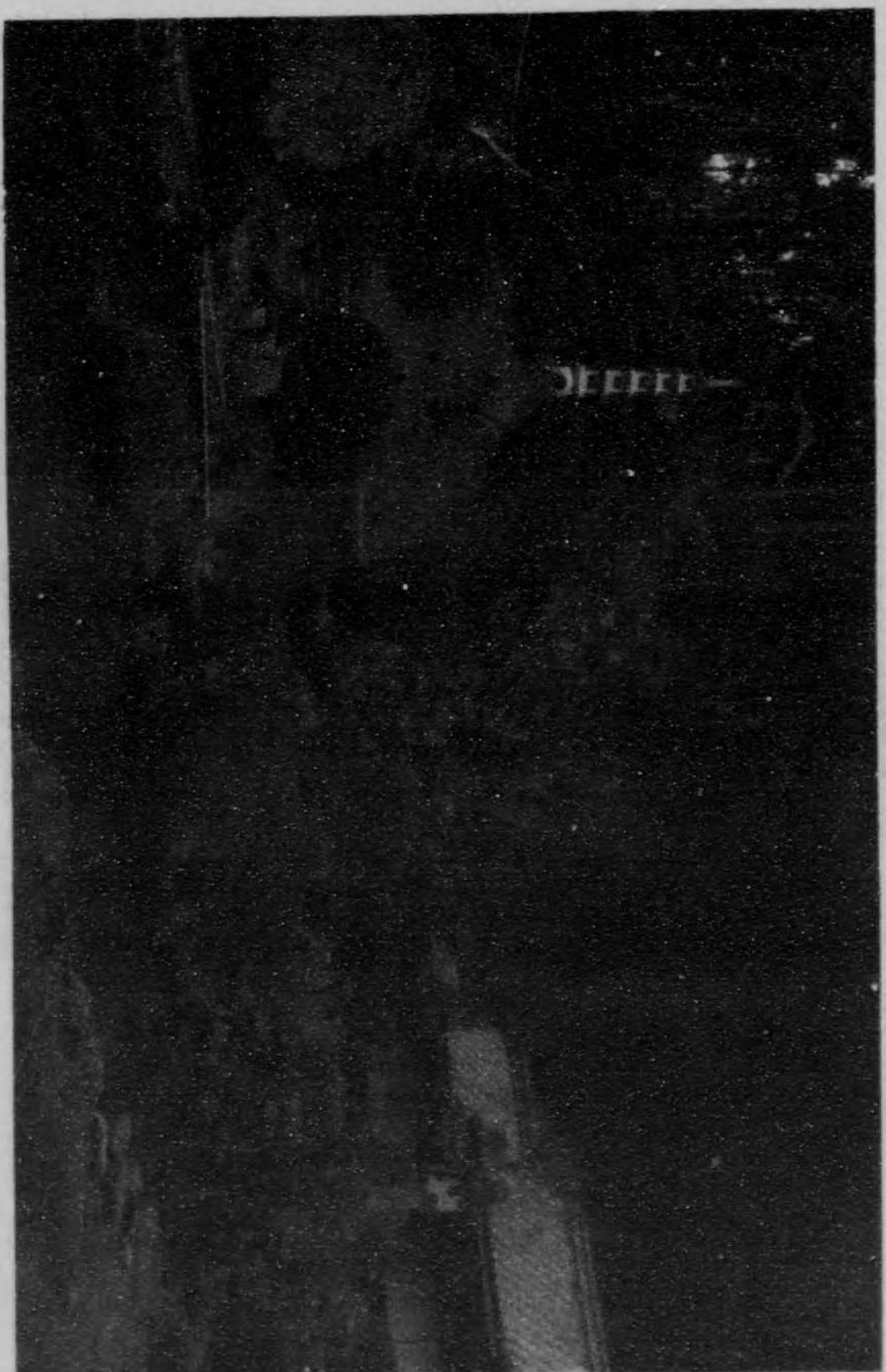






臺前山延身





荒庭樓鳴水山延身



は兩側に長く戸數凡そ三百餘戸、上町中町下町片隈等に區劃さる、道路は山に向つて傾斜し町盡くる所巍然として立てる山門は地を抜く事七十尺、梁間十三間、奥行五間、明治四十五年五月竣工せり、此附近を金剛谷といふ、右側に山林復古の記念として波木井侯の銅像あり、門を潜り菩提梯と稱する二百八十七級、高さ三百四十八尺の石段を昇れば鬱然と巨杉聳ち、甚猶暗き木蔭をあへぎつゝ登り果つれば右に大鐘樓、左に納骨堂及寶物陳列所あり、正面なる朱欄碧瓦の大堂閣は即ち祖師堂にして南に面し、間口十二間、奥行二十四間、結構壯麗、金彩燦然と輝き、經韻絶えず、妙香恒に薰じ、賽者をして思はず襟を正さしむ、廻廊を東に渡れば上人眞骨堂に至る、八角の寶藏は祖師の眞骨を奉安せる廟所にして、金銀を鏤め、珊瑚の天盖、瑪瑙の瓔珞などあたりまばゆく中央寶龕の中、水晶八角の玉塔に納めたるは、碎身の舍利として尊し、尙東に續きて釋迦堂、位牌堂、大客殿、書院あり、書院には狩野元信の描ける牡丹に孔雀の襖、梅林の戸棚あり、書院の奥なる水鳴樓の庭苑を林泉といふ、築造は極めて新しく、徳川末期のもの、雖名園の一に數ふ可く、自然の懸崖を巧みに取入れ、一條の瀑は淙々として池に注ぎ、池を廻らすに奇樹怪石をあしらひ、名禽人に馴れて嘯り、梵唄の聲相和して、幽邃の趣ふかく森閑として、靈氣身に徹するを覺ゆ、本堂より奥の院へ五十四町、即ち身延山の絶頂なり、途中本地堂、十如坊、文珠祠、丈六堂、蓮師堂、月光庵、三光堂、法明坊等あり、奥



の院は思親閣のある處にして、斷崖萬仞、富士川の流域を脚下に俯瞰し、東南遙かに駿河灣を望む。高祖九年、身延の澤にありて、常に此峯に登り、房州の空を仰ぎ、望郷思親の情切に、憧憬の涙に暮られし靈蹤なり。更に引返し、三門より左折し、七面山參道口を身延川に沿ふて行く數町にして、妙福坊と言へる寺あり、之れ日蓮廟所の別當なり。橋を渡り、數十級の石磴を登れば、草庵の舊跡あり。文永十一年、日蓮、波木井實長の歸依により、爰に一字の草堂を創む。是れ久遠寺の濫觴にして、法華宗發祥の地なり。喬杉參差鬱蒼と天を蔽ひ、身延川の清流淙々として、寂寞の感人に迫る。石の玉垣廻らす中に、題目を刻せる二丈餘の大銅碑あり、山際なる寶形棟の一堂は、之れを法界堂と稱し、前に櫻の老樹あり、常に雫の點滴するを以て、涙の櫻といふ。其奥なる御廟所には、八角の大厨子あり、扉の中に五重の石塔を安ず、即ち高祖の遺骨を埋めし所。廟前には、歴代山主の墓壙及び諸侯の墓碑等連なる、尙七面山に登らんとせば、是より身延川に沿ふて、赤澤峠を越え、春木川を右に眺め、白糸瀧を見て、羽衣橋を渡り、更に五十町にして至る。冬季は登攀困難なりと雖、夏期の登山は比較的容易なり。本社別當所に於ては、一般參詣人の宿泊に應ず。斯くて身延は宗門の力によつて、鬼も角も數百年の隆盛繁榮を續くるに至りしも、今後永久に善男善女の信仰のみ待つて、奈邊に迄人を吸集し得るや、今鐵道は身延驛に開通し、更に最近中央線に接續せんとするも、現場に安んじ、徒



景金山延身



らに本山の信仰的宣傳のみにては到底永續する能はざるを思ふ、世相日々に荒廢し人心は愈々惡化せんとしつゝあり、懷ふに佛の大慈大悲も信念ありてこそ其醍醐味も徹底すれ、心なければ月の眞如も影くらく、極めて薄弱なるものと見れば見らるゝ可し、然るに身延の地たるや山紫水明、自然の風光は實に稀れに見る所、祖師開拓の當時に於ても名勝的身延として此方面にも相當に留意せしならん、今に梅平、櫻山等の名稱残れり、香雲橋に配する花の坊あり、此附近必ずや梅櫻の名所たりしは想像するに餘りあり、今後此等の復活は身延山の將來に於ける焦眉の問題にして、總門を起點とし身延川の溪流一帯及び櫻山三門附近より七面山參道に亘り天惠の風景に僅かの施設を加へ全山舉げて一大公園となし、法華經の功德と併行し永遠に其繁榮を圖らん事刻下の急務なるべし。

日

蓮

うつふさにさのみは人の寢られぬを月をみのふに起きかへらん  
立わたる身のうきくもも晴れぬへし妙のみのりの鷺の山風  
浮雲はいくえもかかれ空にすむ月は隈なき光りなりけり



西行坂

所在地 南巨摩郡萬澤村

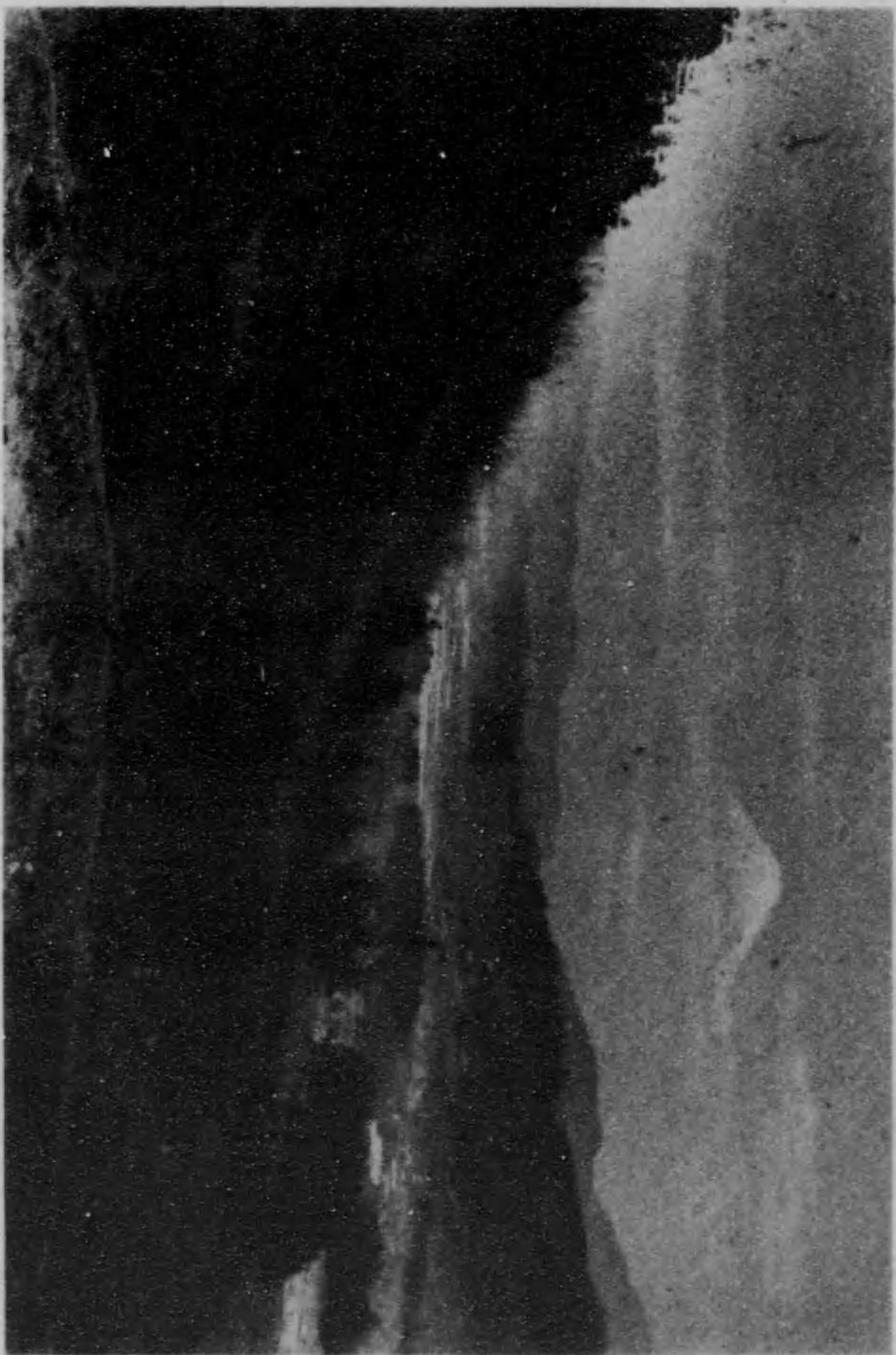
富士身延鐵道十嶋驛より十數町富士川の越戸の渡を西にわたり縣道を北に進めば登攀四五町富士川に臨める斷崖の上にあり頂より觀望すれば急瀬を上る曳船の白帆點々と畫の如く、東の方太子ヶ岳の一角に秀麗なる富嶽の雄姿を仰ぎ風景絶佳、甲斐富士見三景の一なり、往昔西行遍歴の途次この地に草庵を設け居をむすびしと云ふ、昔は西行堂と稱するものあり、中に木像を安置せりと言へど、今は僅かに其礎石を残すに過ぎず。

峡北地方

花水坂

所在地 北巨摩郡清春及日野春村

富士見三景の一にして、清春村花水より日野春村日野坂に至る舊逸見古道にそふ一帶の丘陵



花水坂より見たる富士





厚松の須白



をいふ眺望雄大、西に駒ヶ岳、鳳凰、白根の大山脈を一眸に收め、釜無川蜿蜒々南にのびて其盡る處甲府平野を展開し、富士は巍然として遙かの中天に聳え、容姿秀麗なる蓋し三景中の白眉たり、天正十年三月、織田信長新府城を攻めんと、大河原(臺ヶ原)に陣をすえ、片風の番所曲淵に出で日野坂に至らんとし、此處を通過せるに櫻花爛漫と咲亂れ、釜無川の清流に相映じ、遙かに富嶽に對する絶景を觀賞せられたりと云ふ、近年俳人相圖りて附近なる花水神社の境内に櫻樹を移植し、花の名所として之れが復興に努めつゝあり。

烏丸光廣

立おほふ霞にもると富士か峯におもひをかはす山さくら花

### 白須の松原

所在地 北巨摩郡菅原村

甲信往還にそひ釜無川と相挟みて、白砂青松立續ける約一里の間を稱して白須の松原といふ、今は帝室の林野に屬す、古來松茸の産地として名あり、南北朝の頃、宗良親王南朝復興の壮志を抱き、信濃なる仁科氏に據らんとして駿河より甲斐に入りしが、當時甲斐源氏は悉く北朝に屬せる



を以て親王は山伏姿に變装し、兜巾篠懸に身を窶し、竊かに此地を過させたまふ、日暮れたればとて木蔭の露に袂を濡しつ、野營の一夜をあかせし處、あまりのいぶせさに斯くこそ口ずさみけり

かりそめの行きかひちとは思ひしかいさやしらすに待つ人もなし

とは新葉集に残れる所、大正十二年菅原村民相圖り一大記念碑を建設す、坂正臣氏に揮毫を乞ひ御詠を石に刻して永久に之れを傳ふ。

千ヶ瀧

所在地 北巨摩郡駒城村

尾・白・川の上流にあり菅原村竹宇の前宮より入る、前宮は駒岳神社の前宮にして大國主命を祀る、社内より尾白川の橋を渡れば直ちに駒ヶ岳登山路となる、河にそふて羊腸たる坂路を登れば數十條の瀧懸崖にかかり、落ちては淵となり岩にせかれて再び飛瀑となる、女夫瀧、大瀧、相生瀧、魚止瀧等の名稱あるも總轄して千ヶ瀧と言ふ、巖頭に立ちて眺むれば當面の險をさきて落つる銀河は飛沫衣袂に徹し夏尙寒く心神の爽然たるを覺ゆ、登山者はこゝを清淨の境とし水垢離をとり潔齋して邪念を拂ふの處とす、大正十二年夏 朝香宮殿下南アルプス縦走に際し此附近の道



泉鏡ムウゲラ



路を改修し、觀瀑の孤亭を設け多少の施設を加へしより漸次公園的に開發せんと専ら計劃しつゝありと云ふ。

### ラヂウム鑛泉

#### 所在地 北巨摩郡増富村

鹽川の支流本谷川の溪谷にあり昔は金泉湯と稱し僻陬の地に於ける一鑛泉として附近の人々が農閑の季節に米味噌背負ふて來れる自炊的の湯治場たりしが近年ラヂウムの含有量一、五〇〇マツヘに及べる事を發見するに至るや俄かに稀有の名泉となり常に浴客絶えず鑛泉は河畔各所に湧出し其中優良なるものは飲用壘詰として盛んに搬出す是より木賊峠をこえて御嶽に出づる徑路あり途中本谷川溪流には本谷十勝と稱する名勝あり更に金山より左に入れば金峯山麓の高原に瑞牆山の奇峯あり標高七千三百六十尺、全山岩石よりなり鑛岩子持岩、鎌瀬の瀧などの勝地ありて、紅楓の大觀は實に天下に冠たり。



御嶽圏内

白山

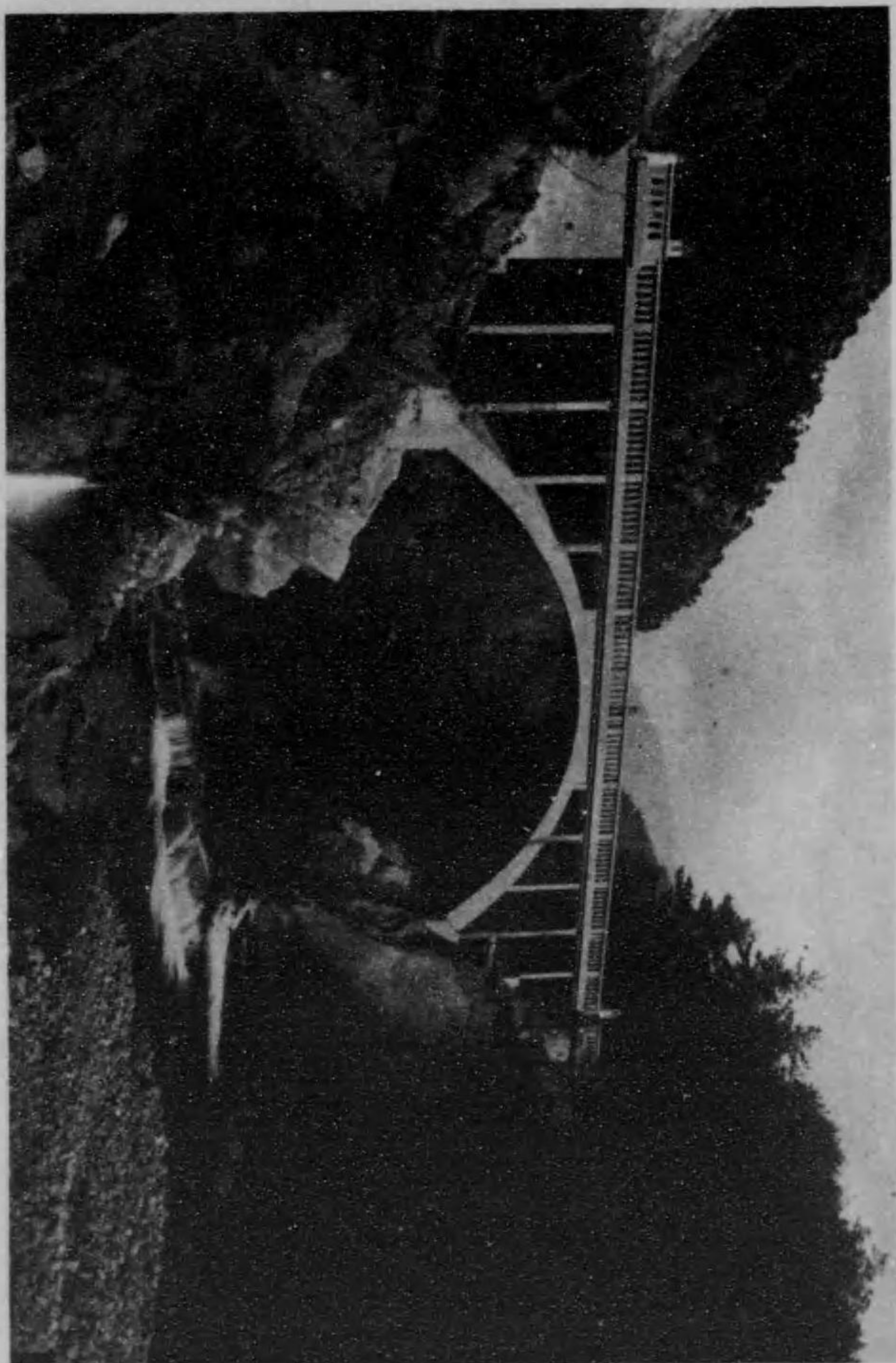
所在地 西山梨郡千代田村

甲府盆地の北に當り突起せる白砂青松の一嶺を白山と名づく、全山悉く花崗岩を以てなり、巒立挺秀倭松點々として恰も人工の盆石を見るが如し、峯に石祠あり、白山權現と稱す、明治四十年秋十月、閑院宮殿下ごに御登臨あらせられ、展望の美に御讚辭を賜ひし所、後郡民圖りて記念碑を建設す、附近松茸を産す、湯村温泉より登攀二十町、浴客の散策に適す。

天神平

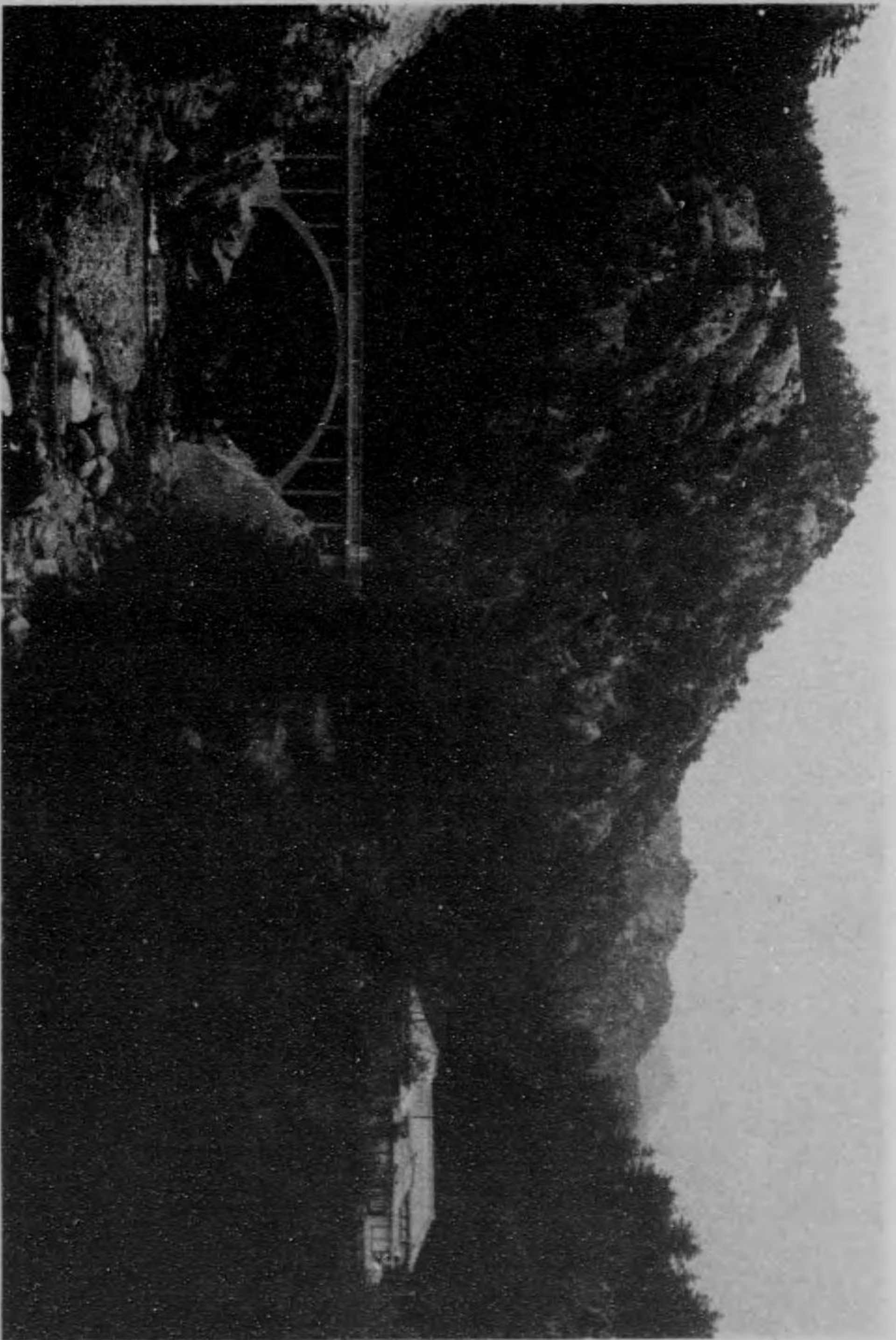
所在地 西山梨郡千代田村

天神平は御嶽東線、西線の合する處、東線路は甲府より和田峠を越へ、西線路は湯村を経て荒川に架する長潭橋を渡りこゝに來りて一線となり、昇仙峽に入る、古松の下に天神祠あり、因て天神



橋 潭 長





平 神 天



平と稱す茶店二戸簡易なる食料品と杖草鞋及名物の土産品等をひさぐ昇仙峽の關門をなし是より仙境に入るを以て觀光者は準備の爲め休憩するに最も便なり。

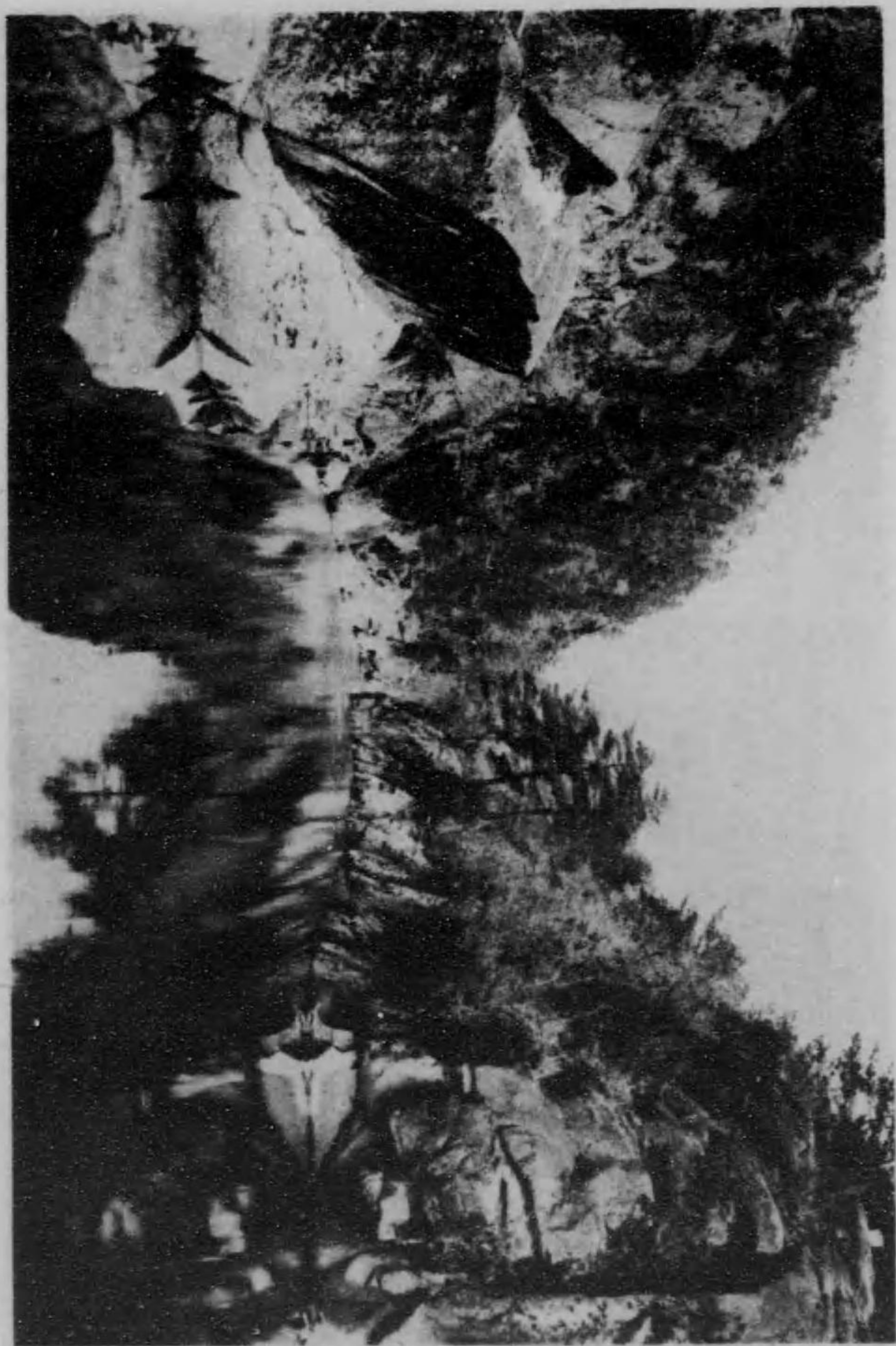
### 御嶽昇仙峽

**所在地** 西山梨郡千代田村能泉村、中巨摩郡吉澤村宮本村

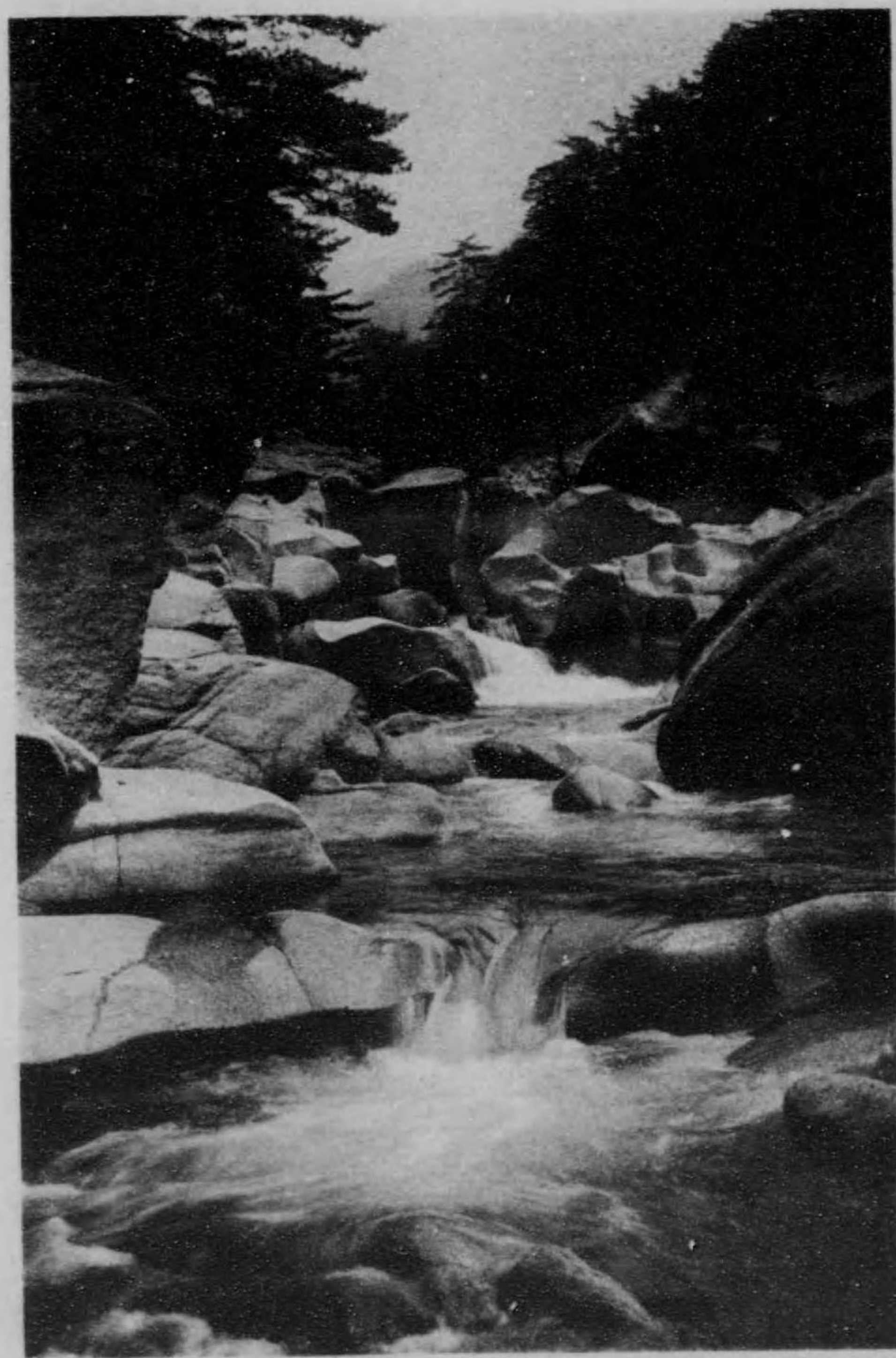
御嶽昇仙峽とは天神平より仙娥瀧迄約一里五町荒川にそふ溪谷一帯の總稱にして昔は御嶽新道と稱し天下の奇勝として耶馬溪及瀨八町を遙かに凌駕せるとは一般觀光者の唱ふる所なり、天神平より入る數十歩、身は忽ち仙境の人となる、荒川脚下に現はれ、奔流瀨をなし瀧をつくり、今や此難關を去らんとして恰も此處に休養をもとめて一大深潭をなす處、斷崖相迫り一躍すれば人も彼岸に飛移らんかと思ふばかり紺碧の底には蛟龍のひそむかを疑ふ、此所を長潭と稱し對岸の大斧壁岩を鷹巢山といふ、其より山徑長く溪流と併行し、一步は一步變化極まりなく山容百姿千態翠を踏め嵐を疊み奇を争ひ妙を競ふ、見上ぐれば危峭に點々と立ちすくめる松も幹細く瘦せたりと雖、悉く數百年を経たるもの、遠く望めば鬱叢翠綠滴らんとして近づけば岩石稜々樹根蟠屈し蜿々として溪谷の奥深く連る、向行けば大砲の形せる砲石、恰もそれに似たる人面石



四〇  
駱駝石、或は不動滝、猿岩、轆轤、富士石、結松等あり、石上蟠屈垂下し、今や深潭に入らんとするが如き臥龍松、亂麻をかけたる如き五月雨岩、默想相對して詩を語るに似たる寒山拾得岩、愈々出でて、奇は眞に迫り、如何なる名匠の筆によるも能く此實景に髣髴たらしむる事を得ん、更に一丘あり、突端を迂回すれば天鼓林と稱する處、松林の中を行く脚を踏めば地下に響きて鼓聲を發す、憩ふに丸木の共同椅子數脚を置く、此の林中に、東宮殿下御登臨の碑あり。寒山拾得岩と天鼓林との間、左岸に登龍岩と云へる怪異の懸崖あり、恰も龍鱗を逆立て岩壁を直線に昇らんとするものと如し、地質學者は學術上頻りに此登龍岩を推賞す、其は昇仙峽全溪を通じ花崗岩にして地質上甚だ單純の如しと雖、此登龍岩と云へる特種の出現により奇異の風景とも見らる可く、所謂花崗岩を貫いて噴出せる兩輝石安山岩の岩脈が北六十度、西の方向をとり荒川を挟んで兩岸に幅六七間、長さ百餘間の峭壁をなし横に發達せる柱狀節理は龍の鱗をなして登龍岩の名を得たるなり、岩脈の例として蟠摩の嘴崎に於ける屏風岩に類似して之れに劣らぬとは學者連の常に推賞しつゝある所なり、天鼓林より七八町を進めば、羅漢寺山の支峯に倚り河に臨みて羅漢寺あり、參路に橋を架す、老僧一人山中曆日を知らぬ顔に寂然として堂を守る、所謂幽邃靜閑の別乾坤をなす此寺古くより羅漢寺山の中腹にありて鎌倉時代有金僧都の開山とす、山號を天臺山といひ天

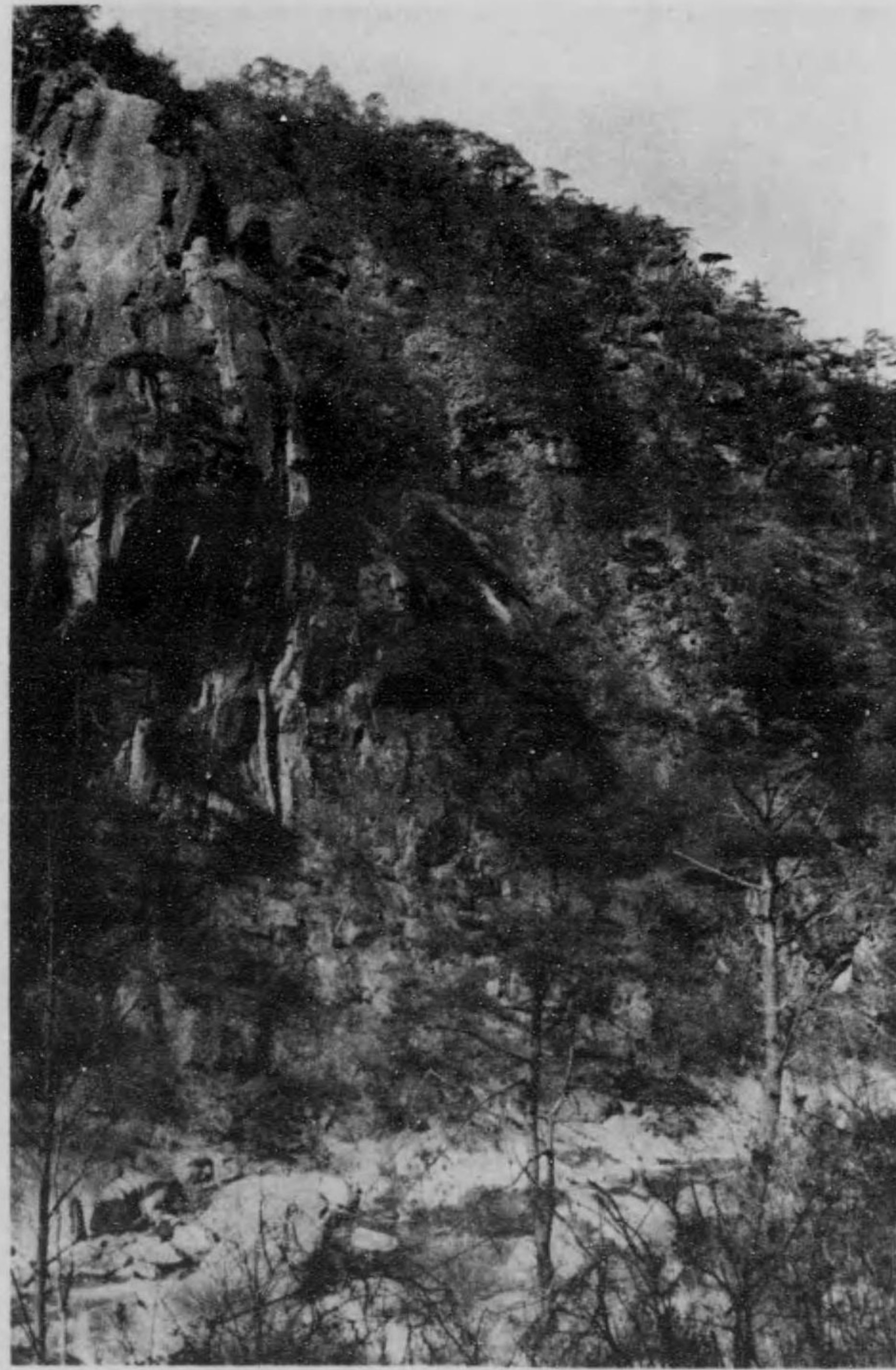






近 附 石 士 富 四三





岩 龍 登 五三





峰 圓 覺 六三





門

石

七三





瀧 虹 雪





九三 昇仙橋





仙 娥 瀑 四〇



臺宗に屬せるが後眞言宗に改め當時は甲斐の高野と稱され香煙盛んなる靈場たり、斯て大永三年三月中山廣嚴院四世俊屋中興して曹洞宗に轉ず、寺内に五百羅漢あり傳へて弘法の作と言ふ、明治二十五年十二月大雨の爲め本堂倒壊次で四十年四月野火の爲め其他の堂宇を焼かれ、四十年八月山嶽崩壞庫裡流失の厄に遭遇し現在の地に移轉せり、橋より十數町を登れば舊寺院の跡に至る、附近に蝥石、筆立岩、天の石橋、天狗岩、彌三郎權現、一の嶽、二の嶽、三の嶽、五百羅漢の岩窟等あり。斯て山高く幽谷窈窕として續き、一峯遠く現はれ近づけば千嶂に岐る、人は溪流と共に幾回か屈曲しつゝ行く、岩の一角を廻れば豁如として兩山開け斜面は數段をなして田圃連る、東方小丘の上なるは能泉小學校にして路傍に二三の茶店及旅館あり、一回開けし溪谷は更に狹まり兩山相接し懸崖萬仞眉端を壓して立つ、夢の松島に面して小ホテルあり、瀟洒たる小建築に過ぎざるも峽中の風景第一位を占め、親しく此大自然に對して山靈に接する絶好の位置にあり、路傍に攝政宮殿下駐蹕の趾あり、ホテルより數十歩長田圃、右の畫像を刻せる碑石立つ、圓右衛門は猪狩の人昇仙峽第一の開拓者たり、碑石の傍を過ぎ行けば突如天をついて鋭刀の如く立てる奇峯あり、覺圓峯と言ふ、一山皆石けづるが如き断面には老松點々と蒼潤將に滴らんとして高く空を排して雲表に入る、川に丸木橋あり、飛雲橋といふ渡れば石逕羊腸として其峯頭に達す、覺圓峯



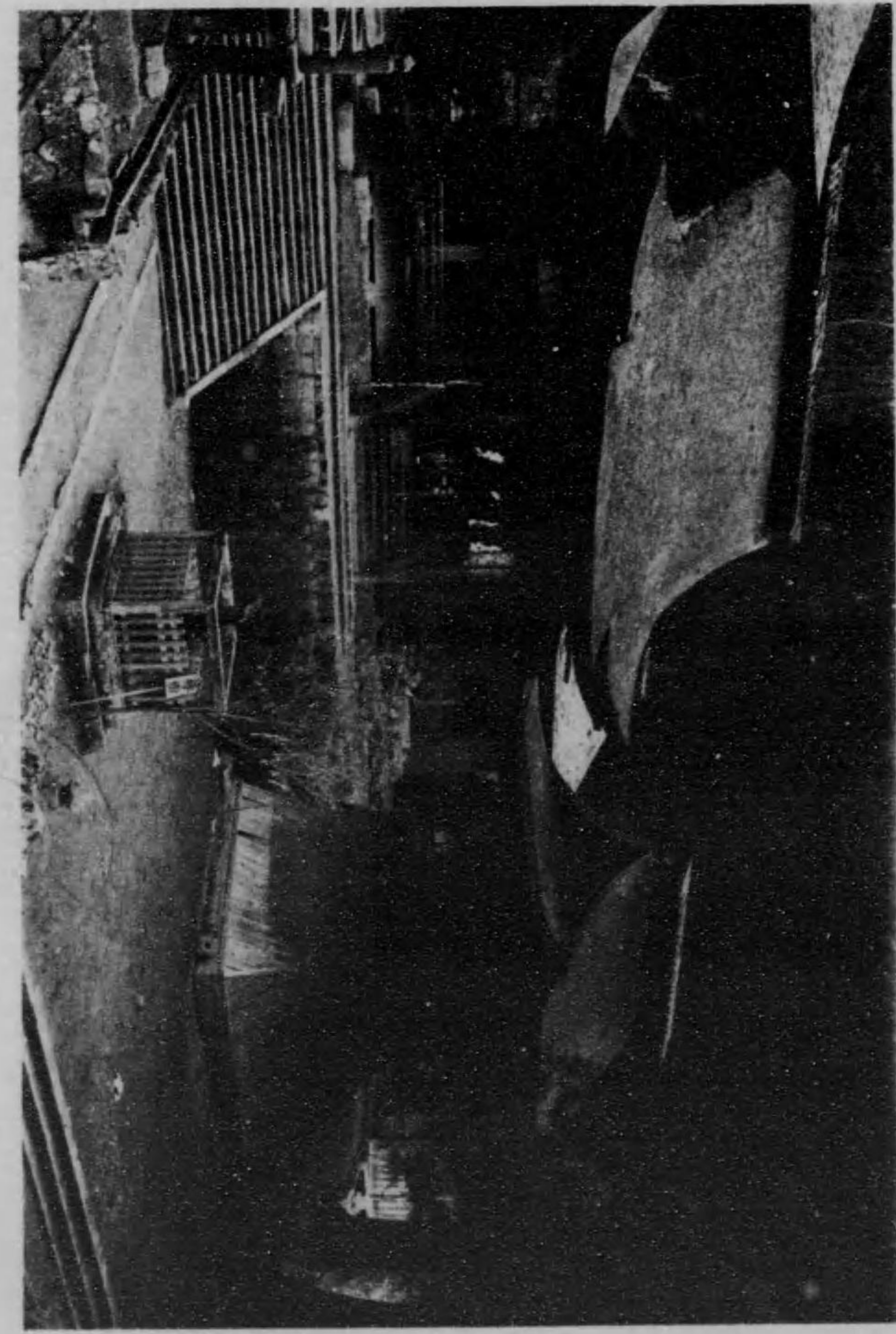
の下なる天然の石門をくぐり眩岩の碑を仰ぎつゝ行けば溪流石に邀して深潭に落つる處一橋あり昇仙橋と言ふ下に雪虹瀧あり橋を渡りて數步當面の懸崖にかゝつて素練を掣曳するが如く瀧は三段となつて落つ高さ十丈水煙濛々として立ち奔瀨岩峽に響きて物凄く瀧に面して僅かに一徑を通ずるの外悉く岩壁峭立して屏風岩鏡岩等の名あり是れ昇仙峽の終端に於ける仙娥瀧にして此附近峽中第一の勝地たり。左に昇仙峽十二勝を掲ぐ

- 長 潭 五月雨岩 天鼓林 登龍岩 羅漢寺山 夢の松島
- 天狗岩 石 門 覺圓峯 雪虹瀑 昇仙橋 仙娥瀧

御 嶽

所在地 中巨摩郡宮本村

仙娥瀧より約半里、金櫻神社のある處を御嶽といふ昇仙峽の終端たる仙娥瀧より登る事一町にして瀧の上流に出づ風景一變地形や植物界に至る迄明らか區劃さるゝ壁の如く峭立せる山腹は崖蹠の發達せる緩傾斜地となり瀧と岩とに滿されたる急潭奔流は極めて平和なる小石積の緩流と化し老松點々たる石壁は潤葉樹の繁茂せる土山と變じ花崗岩層は一轉して輝石安



昇仙峽



山岩及集塊岩となれる急激なる變化に就ては何人も注目する所ならん、爰を猪狩村といふ戸數數十戸昇仙峽開拓者長田圓右衛門を出せる處住民多くは炭焼を以て業とす、村端れより荒川とわかれ其支流御嶽川にそふて登る、十數町にして御嶽部落に達す、兩側や々町並をなし御嶽川は家と道路との間を流る旅館雜貨店など立續ける間を行けば足自ら金櫻神社の參道に入る、老杉立續ける樹蔭の石級を登れば隨神門あり水戸烈公の筆になれる金櫻神社の額は金光を放つて高く輝く、右に社務所あり、更に向數級の石段高く上に本殿、拜殿、神樂殿、東の宮、中の宮、大鼓、こもり、舎、神輿庫等の古建築立並び金壁燦然たる構造の精巧彫刻の華麗結構善美を盡し古松老杉の圍繞せると相待つて愈々崇嚴なるを懷はしむ、今社記によれば緣起頗る古く景行天皇の庚戌四十年日本武尊東征の時、甲斐より信濃に入らんとして途次金峯山に登躋あり信州の地理を観察し給ひし時、こゝに素蓋鳴尊、大己貴命の二神を祀り自ら鐘を納め、櫻の一樹を植えたまふと、本殿幣殿拜殿は今より凡そ四百年前、武田義信の建立にして本殿には名匠甚五郎の作なりと傳ふる、昇龍、降龍の彫刻あり、中の宮、東の宮は今より七百八十餘年前、武田の祖邊見源太清光の再建にかかる古建築にして明治四十年八月内務省特別保護建造物に指定さる、寶物には明治天皇御下賜の康光の太刀勝頼寄進のゐせき、作の能面、柳澤吉保寄進の蒔繪の箱等最も勝れたるものなり。



御嶽展望道路及登仙角 [パノラマ臺]

所在地 中巨摩郡宮本村、吉澤村

御嶽仙娥瀧上屏風岩前より道を左に入り、舊石門を潜り、屏風岩の岩角を登攀し、展望臺彌三郎權現を経て更に進めば、御嶽登仙角(パノラマ)に至る。屏風岩々頭より俯瞰の景は、恰も繪畫の如く、其の妙、其の奇雅趣を極め、言辭に盡し難し。夫より僅に上れば、遙か中天に富士の秀峯を望む。展望臺彌三郎權現に登るに従ひ、眼界愈々廣く、昇仙峽の怪岩奇峯を脚下に俯瞰し、甲府盆地を一眸に收む。荒川、釜無の二川は、帶の如く、富士は雲表を衝て、愈々高く、眼を西に轉すれば、白根、鳳凰、駒の大山脈を指呼の間に望み、北は大刀岡山の鋭峯を挟みて、金峯、茅ヶ嶽の双嶺高く、北東には國師、雁坂等の山脈連亘し、眺望廣闊、氣宇頗る雄大なり。登仙角(パノラマ)に至りて一層、其の景趣を極む。夫より八王子八雲神社に降り、同所より右に至れば、二十町許にして、金櫻神社に達し、左に至れば、鶯谷若松の白砂山、清水平、一櫻、三聲返し、其他數多の勝地を経て、天神森、長潭橋畔に降ることを得、此の間、展望亦大に佳なり。



御嶽のりよ、展望三郎權現臺



### 御嶽奥山の奇勝

昇仙峽の勝地に次で更に金峯山所謂御嶽奥山の奇勝を掲げんとす、先づ金櫻神社より黒平に向ひ、根古坂峠を越え上黒平に行く途中炭酸泉の湧出する所あり、一掬の飲に渴を醫するの爽快は全く平野水等の及ぶ可くも非らず、上黒平は山間の寒村にして旅館等の設備あらざるも近く東洋遊園地株式会社經營の鑛泉旅館あり、こゝより金峯山へ一日にして往復するに適當なる宿泊所なり。初めての登山者は此所より案内者を雇入れ翌朝出發し檜坂、水晶峠、御室を経て金峯山の絶頂を究む可し、乍去豫め露營の準備を以て登る人は御嶽より一日に御室まで突破し御室の堂に宿するを便とす、而して御室より鐵鎖及梯子等によりて岩壁を攀ぢ、巖片手廻しの岩を右に石楠花の中の登山道を登る、一步々々眺望開け頂上御像石附近の展望は特に雄大にして就中日本南アルプス北アルプスの遠景八ヶ嶽秩父の連山及び富士の秀嶺を一時に收め得る大觀は嘆賞措く能はざるものあり、金峯山は單に此景勝あるのみならず、甲信國境の高山にして壯大なる山容をなし、全山花崗岩よりなり、海拔二、五九五米突、山稜は東に蜿蜒として朝日嶽、奥千丈、甲武信國司、破風の諸嶽に連り、莊觀言ふ可からざるものあり、世界的に名を知られたる甲州水晶は



四六

金峯山を寶庫とし尙八幡乙女坂倉澤等の水晶坑は頂上より指呼の間にあり、金峯山の西北麓にある一支脈を瑞牆山と云ふ約一里に亘れる峯頭の花崗岩自然に彫刻せられ犬牙狀に聳立し、天空を咬むで聳え立つ偉容は實に天下の奇觀なり、その前面の森林と溪谷とは幽寂を極め景觀頗る雄大なり。





## 天然紀念物之部

### 山高の神代櫻

所在地 北巨摩郡新富村字山高實相寺境内

神代櫻 (*Prunus aeminothalis* Miyos. f. *aggregata* Miyos.) は寺の門前に獨立樹として生育し幹の基部より多數の支根を出だしたるものが癒着して複軸を形づくり其の上部は基幹となる、基幹(複軸部共)の全高約九尺にして地上五尺の周圍三丈五尺あり基幹の上部は一本の主幹と四本の側枝とに分れたるが側枝は一本のみ生存して他は枯損せり、主幹は發生點より六尺の高さに於いて分岐し二枝となり各枝は共に約五、六尺の處にて更に兩分せり。主幹の基部の周圍約一丈七尺分岐せる枝の基部は兩枝共九尺内外の太さを有せり。本樹は白彼岸に屬するも開花の當初は少々紅色を帯び満開に及んで純白となる、蕾は膨脹し密毛あり繖形花序は三乃至五花を有し三花のもの最も多し、花梗短く約五分、花徑約八分、花序の密集する特徴により群彼岸(むれひがんと



いふ。本樹種と同一の櫻は甲信地方に自生し又所在に植ゑられ往々大木となる故に一名又甲州彼岸(かふしうひがん)の稱あり本櫻樹は其中の最大なるものと云ふべし天然記念物としては珍稀のものならん。山高の神代櫻は里俗にありても古來名高きものにて花時には遠近より杖を曳くもの頗る多し文献としては甲斐國誌甲斐名勝圖會後集、理學博士三好學氏著日本ノ櫻ニ就テノ研究第二報告(植物學雜誌第三四卷一六四頁大正九年)あり。大正十一年十月史蹟名勝天然記念物保存法により内務省より天然記念物として指定せられたり。

### 橋立の大杉

**所在地** 東八代郡一宮村甲斐奈神社境内

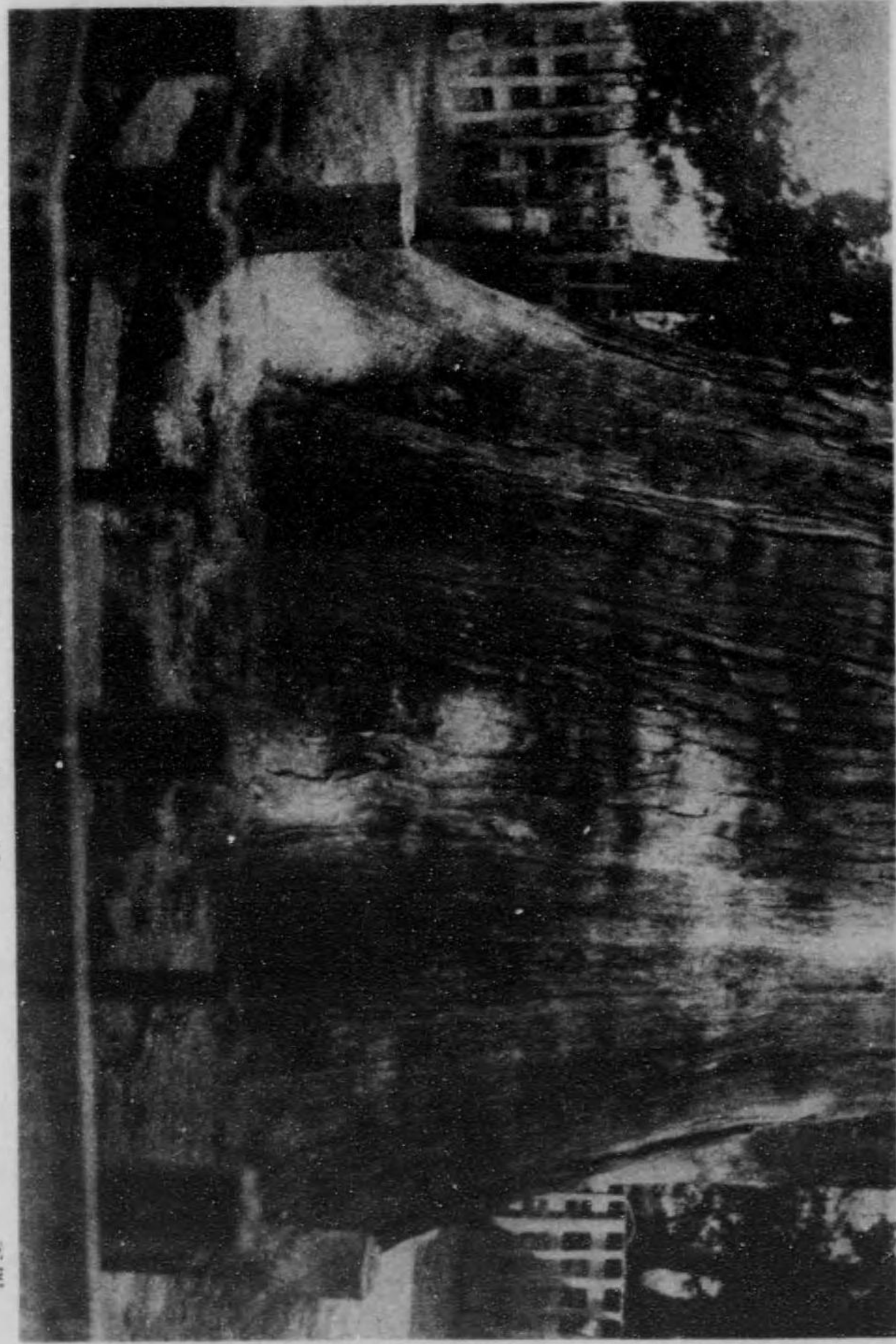
樹幹は眼通り三丈六尺根廻り四丈八尺あり當縣下にありては稀代の巨木とす百數十年前の著書甲斐名勝志及び甲斐國志共に誌して「七圍半」とし植付けの年代等は全く不明なり本幹の梢頭は落雷の爲めに損傷し生育を害せられたるも近年應急の手當てを施し其の害を阻止せり。大正十三年十二月史蹟名勝天然記念物保存法により内務省より天然記念物として指定せられたり。



高山の神代櫻

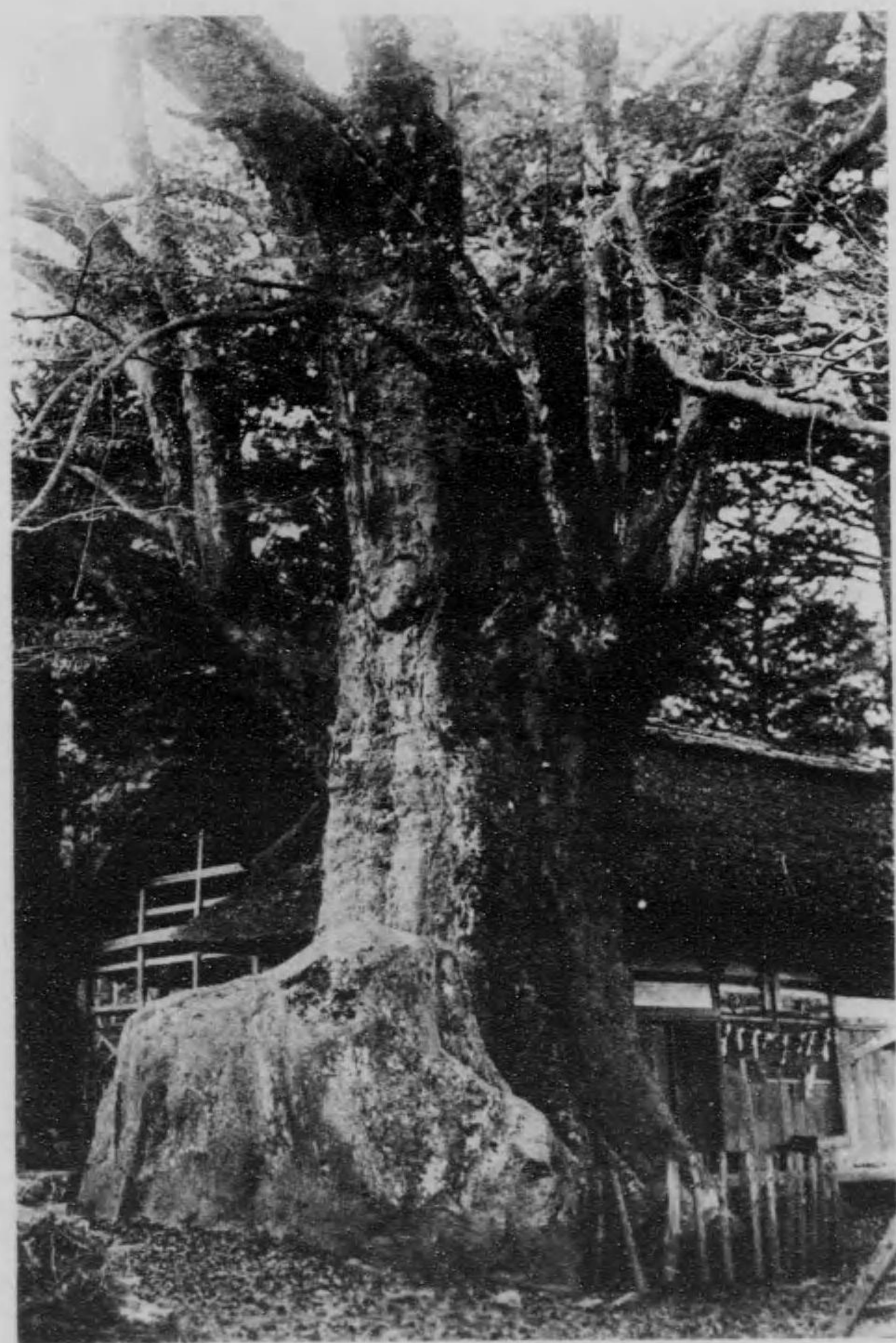


杉火の立橋



五十四





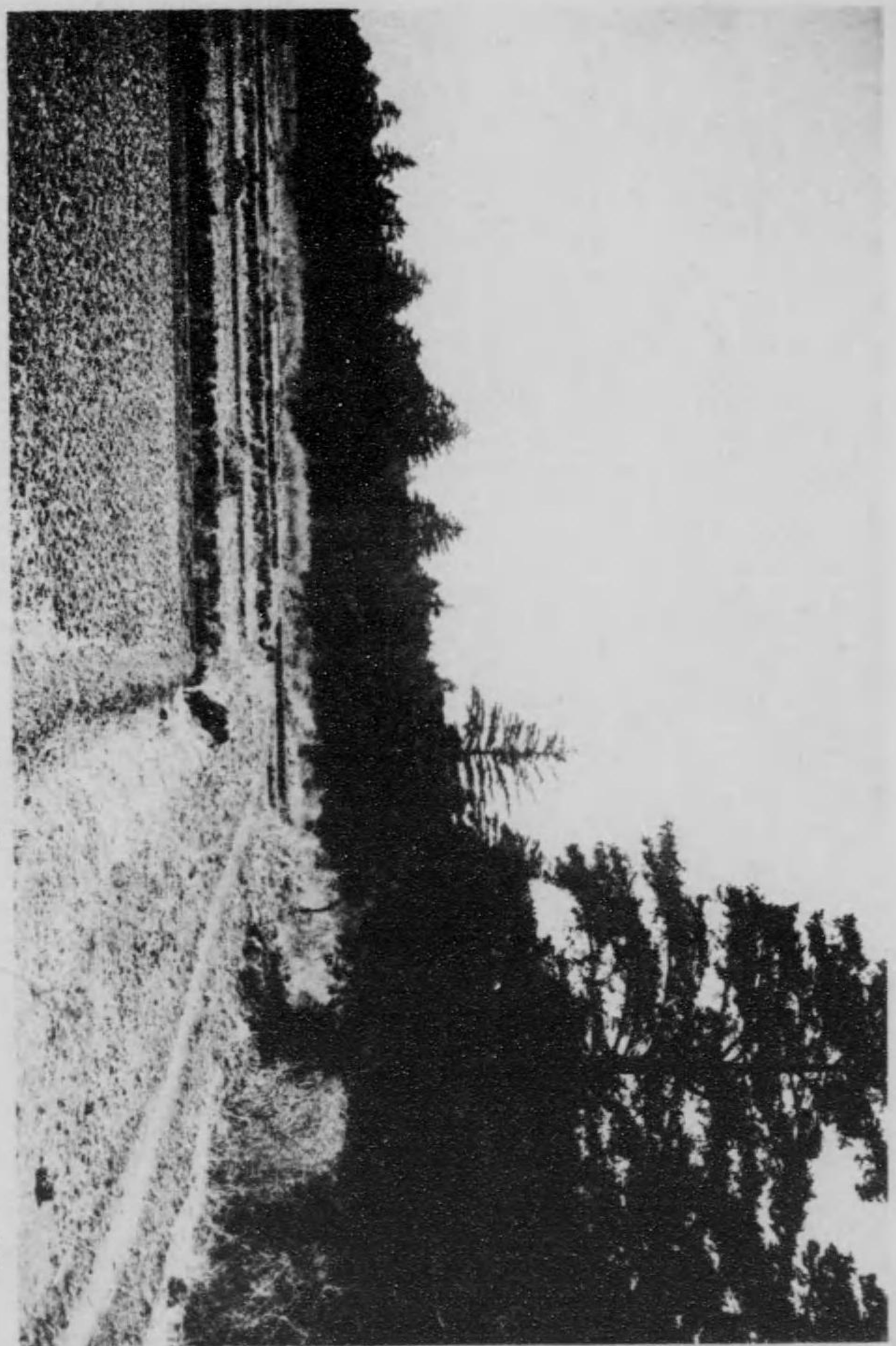
（櫛 大）木 田 六四





（樺 大）木 畑 七四





針 樅 の 純 林





椈 針 九四



### 田木、畑木〔大樺〕

**所在地** 北巨摩郡江草村々社根子屋神社境内

二本の大樺にして一を田木、一を畑木と稱す、其の大きさ田木は地上五尺の所にて周圍三丈七尺畑木は同じく周圍三丈五尺六寸あり。里人は其の枝葉繁茂の状況を見て年の農作物の豊凶を卜すといふ。田木畑木の名之に由りて起ると。

### 針樅の純林

**所在地** 南都留郡忍野村鷹丸尾燐岩流上

針樅純林は山中の北方に流出したる燐岩上面積百六十四町歩に亘りて密生したる原生林にして樹齡は何れも數百年を経たる老木にして蟲々たる樹幹、鬱蒼たる枝葉の間にサルノヲガセを懸垂し嶽麓の植物景觀中一大異彩を放てるものなり、嘗て英國の植物學者ウイルソン氏此地に來り其の森林美を目撃して天下無比と激賞し歸國後彼の國の學界に紹介せられたるより世界的著名のものとなれり。



公孫樹

(俗稱)逆

銀

杏

〔サカサイテウ〕

五〇

所在地 南巨摩郡下山村上澤寺境内

樹幹の發育良好にして眼通り三丈六尺、根廻り三丈六尺四寸の大樹なり、移植の年代につきては日蓮上人の縁起を説けるも詳ならず、雌株にして葉上に結實し植物の形態學上重要な意義を有するものなり(學理的解釋を窺ふ能はざる時代にありては迷信的解説を流布せしも故なきにあらず。)

大 櫟

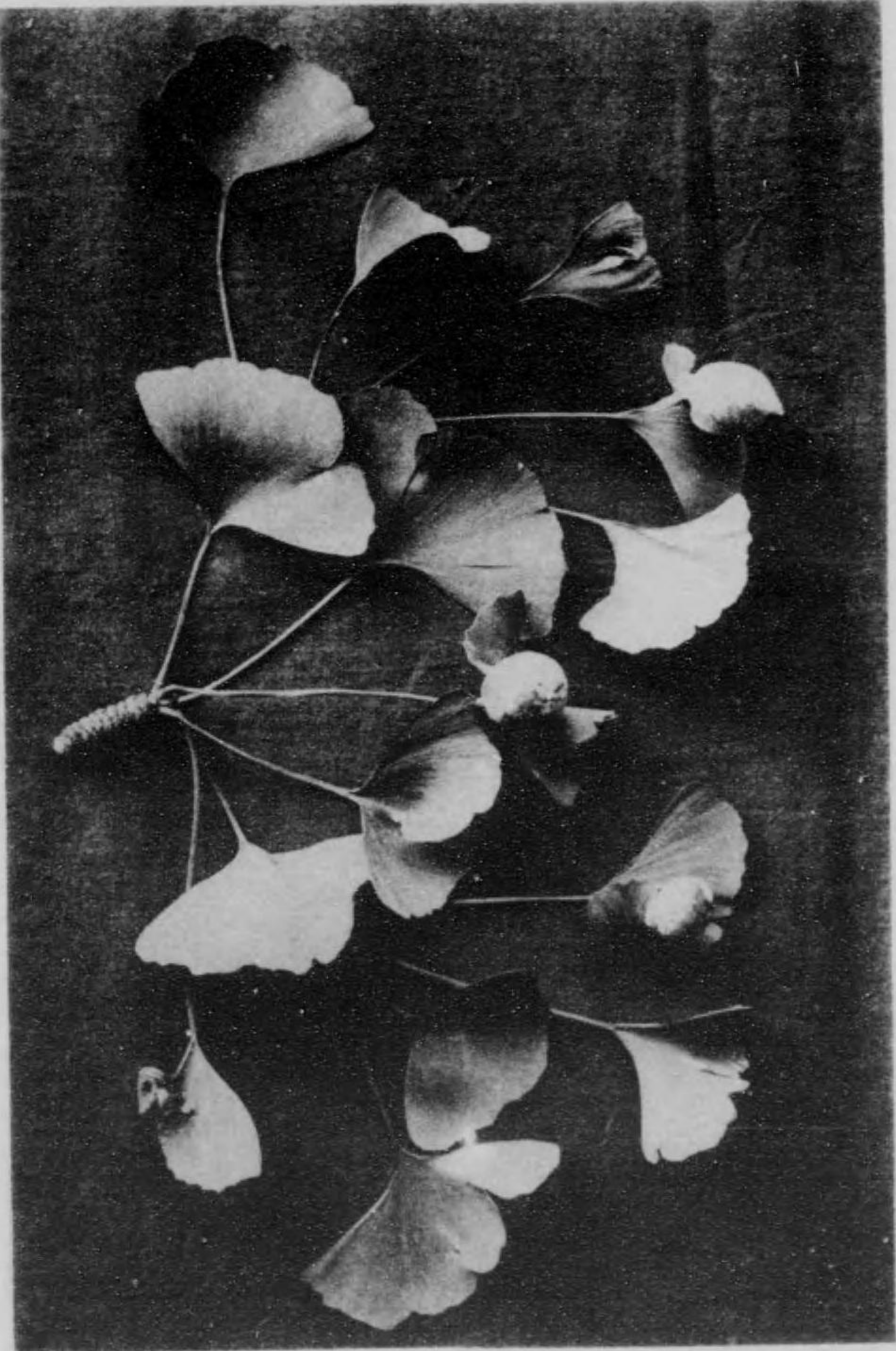
所在地 中巨摩郡三惠村字寺部

樹幹は眼廻り四丈六尺五寸、根廻り五丈七尺三寸あり、地上二間の高さに於いて五枝に分れ内部分は空洞にして數人を容るゝに足る、畑中にある獨立樹なるも遠く之を望めば恰も林の如く茂り發育良好なり、樹幹の形相を察するに少くも二幹位の癒着したるにはあらずやと思はるとも長年月を経過せるため其の證跡不明なり、唯内部の空洞を觀察する時に其の感を起すに過ぎず。



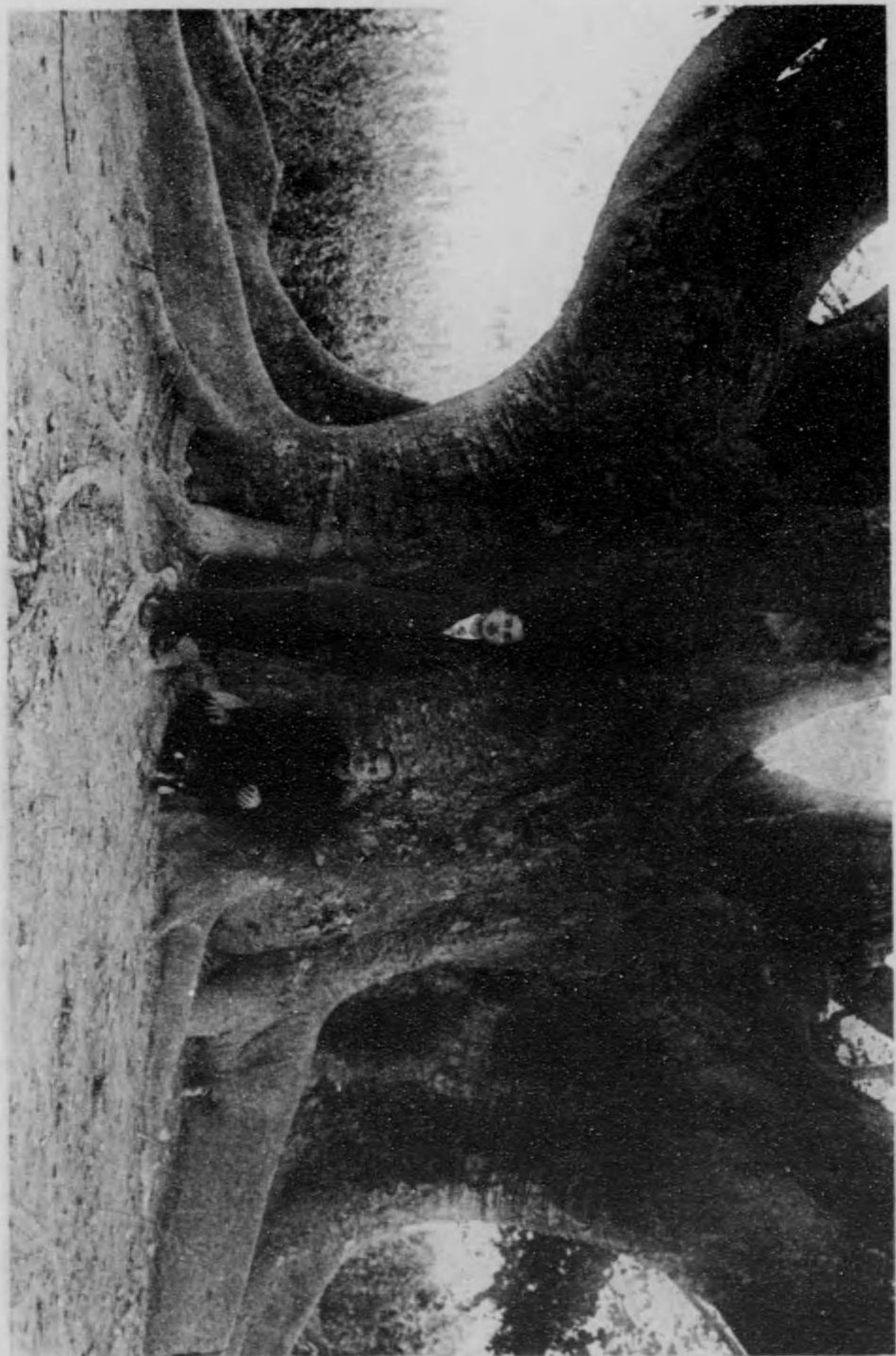
公孫樹 〇五





子種るたじ生に上葉樹孫公



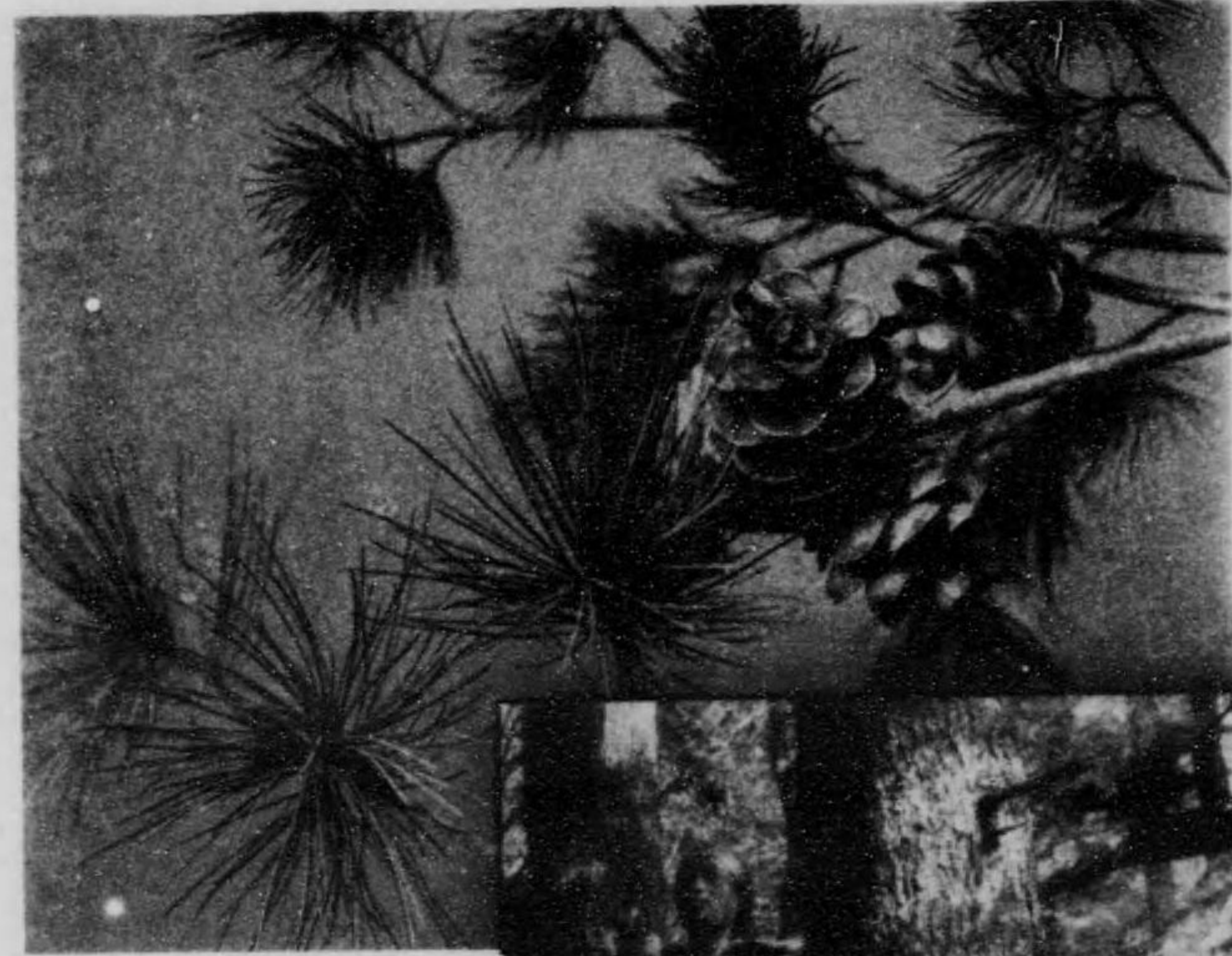


樹

大

二五





松葉五鮮朝ト松葉五姫



幹樹松葉五鮮朝 三五



### 朝鮮五葉松

**所在地** 中巨摩郡蘆安村帝室林野局所管地内

鳳凰山腹野呂川左岸深澤以北一帯に散在す。

現存のものにありては樹幹の大なるものは眼通り五尺内外根廻り五尺乃至六尺内外何れも潤葉樹及び榊等と共に混交林相をなし發育良好なり柚人は材質の佳良なる爲伐採の唯一の目標とし拂下其の他の方法により古來濫伐せられたるも分布廣大なると御料林なるとにより多數の保存木を見るは心強し三好博士は夙に之が分布に注目せられ縣下白嶺附近の所在地は本邦東北部と西南部との限界地區ならんと語られたり本縣山地には諸方に散在するも最も多數を存するは此の地なり故に適當なる區域を限りて保存する必要あるべし。

### 大 檜

**所在地** 南都留郡河口村

傳説によれば日本武尊東征の時御坂峠を越え給ふ時此處に休憩せられ乗馬を繋かれたる樹



なりと稱するも記録其の他の微すべきものなく樹齡も明かならざれば年代を推定するに由なし、樹幹は眼通り二丈六尺根廻り二丈八尺あり發育可良にして樹形亦能く整ふ、檜としては比較的大樹なり。

### 矢立ヤタテの杉

**所在地** 北都留郡笹子村笹子峠の東麓

明治四十年出水の當時同所に山崩れありて其の幹の下部數尺を埋没せられたるが爲め現在の根廻り邊が最初の眼通り以上の高さであり現在の測定にては眼通り二丈九尺根廻り四丈あり。(此の邊元の眼通りの上部らし)高さ二十間餘に達し樹皮には多少損傷の痕あるも樹勢尙盛なり。傳へ言ふ昔源頼朝富士の卷狩あり規模大にして數十里に亘り笹子峠も其の域内にあり此の地より嶽麓河口村に通ずる一帶の地を狩屋野と云ふ數多の武士が跋涉したりと、偶々一矢此の杉に立ちたるを里人之を奇現象とし矢立の杉と呼べりと云ふ。

光

蘇 [ヒカリゴケ]



四五六 大 檜



**所在地**

北巨摩郡駒城村字黒戸山森林内

駒ヶ嶽登山道黒戸山森林中一帯に分布す

本縣に於ける分布は金峰山、大菩薩嶺一部並に鳳凰山脈の一部に散在すれども黒戸山にある群落を最も美觀とす、同地は花崗岩其の山骨を成し同岩の大岩塊によりて洞穴狀に圍まれたる陰所に密生し之を覗けば黄金色の微光を放ち頗る美觀なり本植物は移植などしたりとて平地にて此の生態を實現するは不可能の事なるも近時登山者の激増に伴ひ無智の人々が好奇心に驅られ濫獲して美觀を損ふの虞れあり故に採集を禁制し之を保護するを要す、委員が大正五年八月所在を調査したる時と現在とを比較するに登山者の眼に觸るゝ場所は甚しく損傷せられ却つて登山者の趣味を減少するの傾あり。先年朝香宮殿下南アルプス御縦走の折り此の景觀を激賞せられ長時間御足を留め形態を觀察せられ種々の御下問あり南アルプス中の一奇觀との仰せありし處なり。

**四ツ白檀**〔ヨツビヤクタン〕

**所在地**

中巨摩郡大井村鮎澤古長禪寺

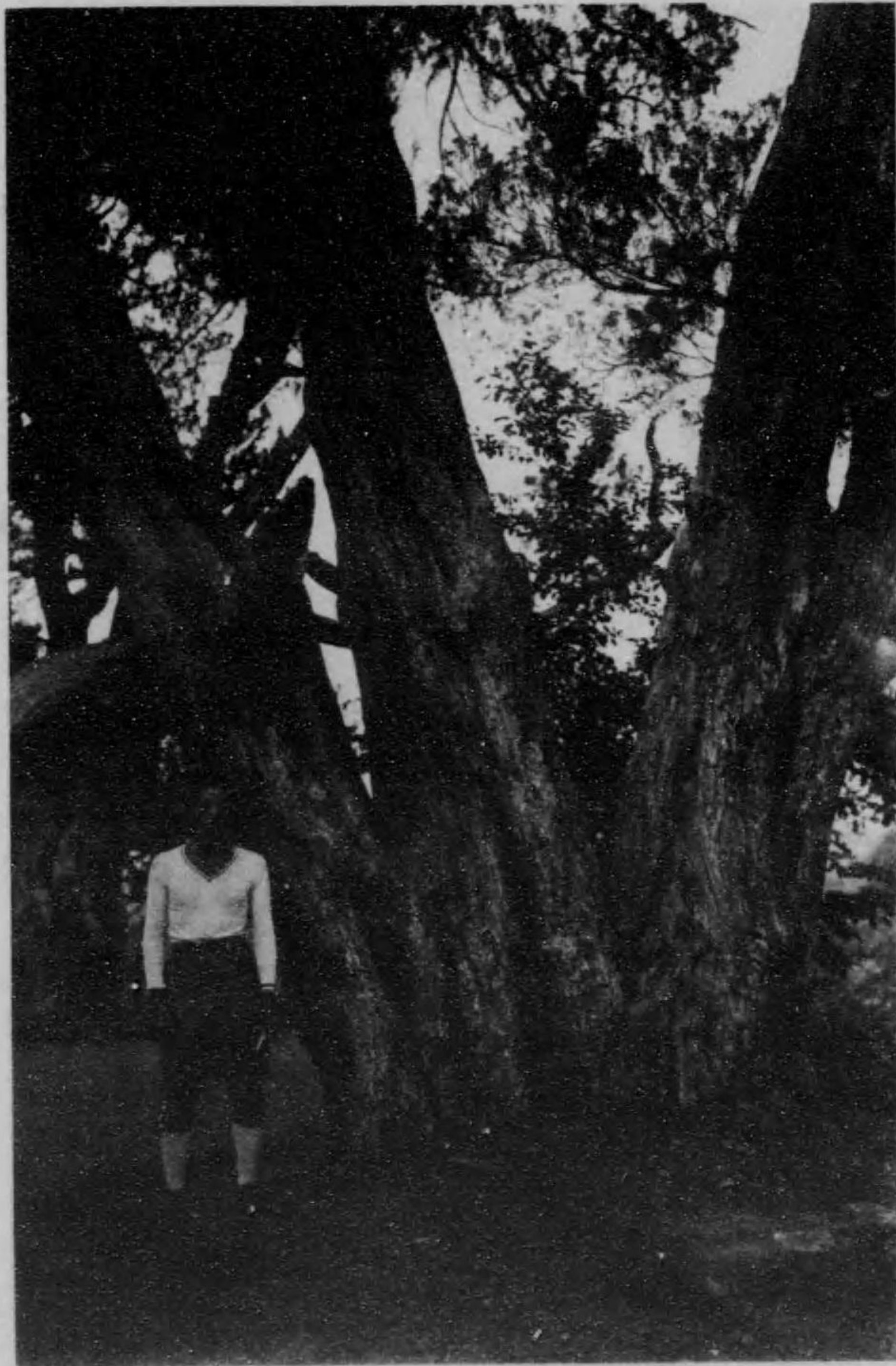


「びやくしん」の老木にして眞の「ビヤクタン」にあらず、四株ありて其の内の大なるものは樹周目通二丈七寸あり上部數本に分れて何れが本幹とも見分け難し、他の三枝も大サ之に次ぎ何れも樹勢旺盛なり。傳説には臨濟宗古長禪寺の開祖夢窓國師國家鎮護の祈願所として釋迦牟尼堂を建つるに際し之を植えたりといふ。眞否は詳ならざるも多くの年數を経たるものなり。

いぞいたち [ヤマイタチ、オロジョ] *Mustela erminea* L.

産地 東八代郡黒駒村神座山

食肉目の鼬科に屬し俗に *Ermine*, *Zoot* (あーみん) と稱し鼬に似たれども小形なり、夏は胸部腹部は白色なれども冬季は殆全部白色に變ず然れども仔細に檢すれば鼻端の小豆色なると尾端少々黒色を認む、全長鼻端より尾根まで五寸五分許、胴の直徑約一寸、尾長約四寸位あり、口邊に十八九本の鬚を生ず、其の他眼本の上方、顎下及び前肢の肘外側等に數本の長毛を生じ觸覺の用をなすものと如し。樹間岩角の間を往來し又は岩穴樹洞に棲み、巧に木の葉の下を潜行し出沒迅速にして容易に捕獲し難し、神座山森林帯に棲息するものは其の數多からざるも冬季に至れば黒駒村落に近く出沒すといふ、好んで果實及小動物を食す、身体の小形なるに比し食肉動物の特性



五五 四ツ白檀



を有し、案外、瘴猛なるものゝ如し、毛皮は高價なる爲め、絶滅の恐なしとせず、故に捕獲を禁止し保護せんことを要す。

神座山に棲息するを見れば、他の地にも棲息するならんも、未だ認めたることなし。該標本は東八代郡黒駒小學校に保存せられたるを、大正四年夏之を知り、其後二回山中に入り、大正六年十一月之を目撃したるも、動作甚だ敏活巧みに、落葉の下を潜りて遁逃し、捕獲するを得ざりき。

### 傾軸式双晶〔一名日本式双晶〕

產地 金峰山腹乙女阪、倉澤、向山、附川端下

本縣の水晶産地は十五個所以上に達し、無色の普通種を多量に産し、着色種は煙水晶の少量と極めて稀に紫水晶を出せしのみにて、我國著名の水晶國と稱せられたるも、現時著しく産額を減じ、今は水晶工業地として水晶國の俤を存するのみ。古來産したる水晶中、我國特有の傾軸式双晶は外國に類例無きを以て、一名日本式双晶と呼ばれ、 $P_1$ を双晶面として規則正しく接合せるものにして、二個の結晶は其の主軸八十四度三十三分の角度を以て交はり、双晶軸に平行なる柱面著しく發達して扁平なる晶相をなす、俚俗平板ちうばんの夫婦石など稱す、本圖板に載せたるものは六



角柱状の晶簇と共生し最も大形完全の美晶をなし世界的奇品として内外に其の比類なき稀有の珍品なり。双晶は長さ二十二センチ幅十七センチに達す、現時山梨縣師範學校の所藏となり居るも特別保護をなす必要あるべし。

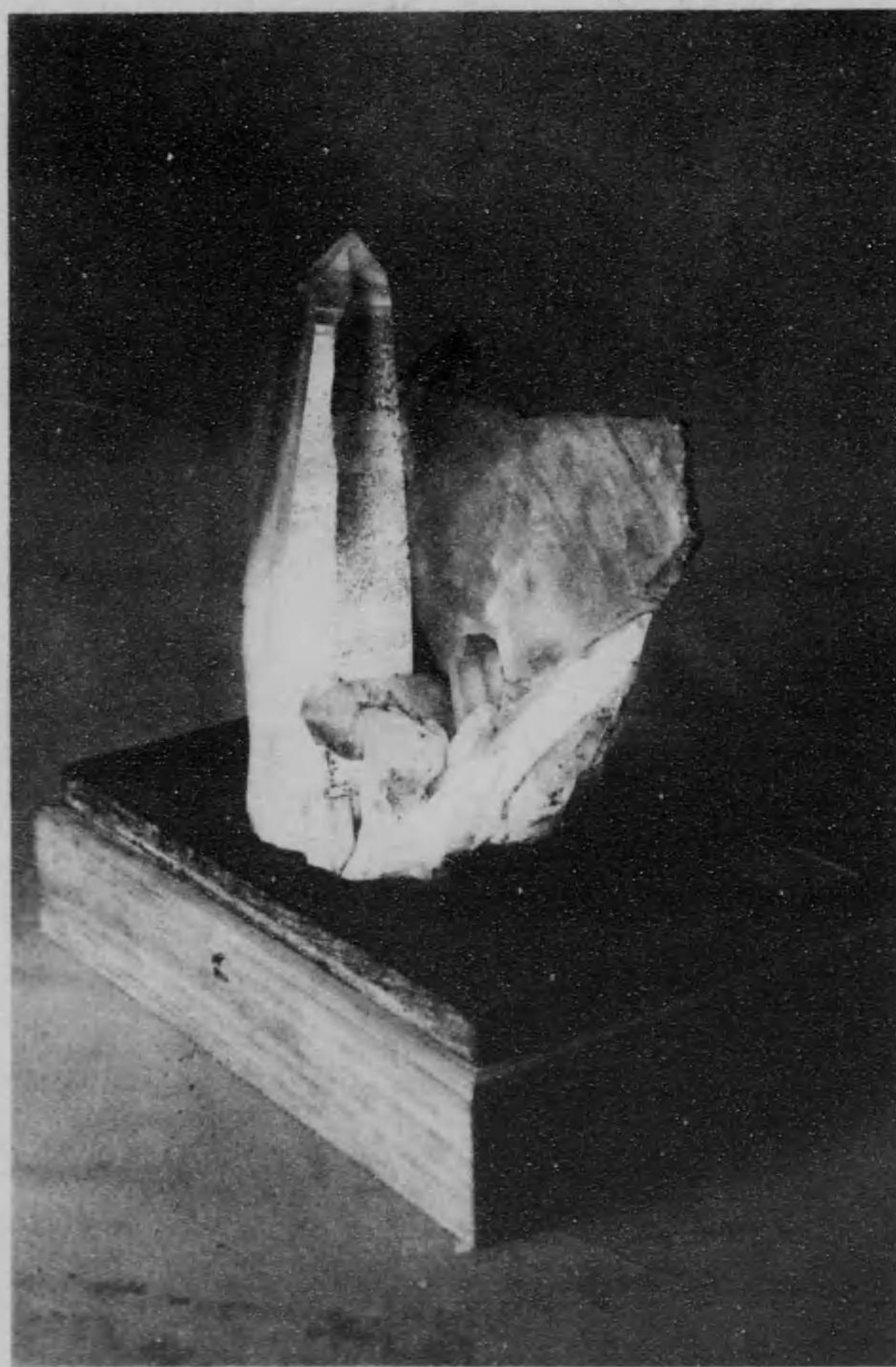
五六

### 大 水 晶

産 地 北巨摩郡増富村小尾御料林区内

本縣に於ける水晶産出物中最も巨大なる結晶にして長さ百センチ餘に達し、柱の最大部は周圍八十センチ直径三十センチ餘に達す、而して晶面各種完全に發育し壯觀を呈せり、之を世界の記録に徴するに英國の礦物學者ダナ氏は其の著礦物學教科書に記載せられたる世界に於ける最大結晶としての水晶と伯仲の間にありて稀有の大品なり、現在は前者と等しく山梨縣師範學校の所藏なり。此の外同校には本縣産水晶の絶品を藏すること多く本邦學界の珍とすべく特に永久保存の必要を認む

### 石 膏



六五 傾 軸 水 晶





品 水 大 七五



産地 南巨摩郡靜川村字夜子澤

第三紀凝灰岩の分解によりて生じたる赤色の粘土層中に完全なる孤晶をなして産し古來結晶石膏の産地として礦物學界に著名のものなり從來濫獲の爲め自然の状態を甚しく破壊し保護の必要を感じたりしも、軟かき粘土層は年々河蝕の作用に逢ひ崩壞甚だしく爲に上部を通ずる村道を破壊するを恐れ砂防工事を施したるため濫獲は免るゝを得るも今は却つて研究觀察上の不便を見るに至れり、天然紀念物として保護することは素より必要なるも一部分の露頭を自然に委し觀察の便宜を得る様にして保護するの必要あり。本地産の結晶は透明若しくは半透明の美しき單晶をなし、 $xP$ の三面完全に發育し大なるものは四センチ以上に達し稀には $xP$ を双晶面とせる矢筈狀の双晶をなすものあり。

富士風穴

所在地 西八代郡上九一色村

富士の側火山大室山の北麓にあり青木ヶ原熔岩流中の洞穴にして大なる氷柱を多く存すること富士の風穴中他に比類なきものなり。入口は深さ三十五尺方二十四尺の竪孔にして洞穴



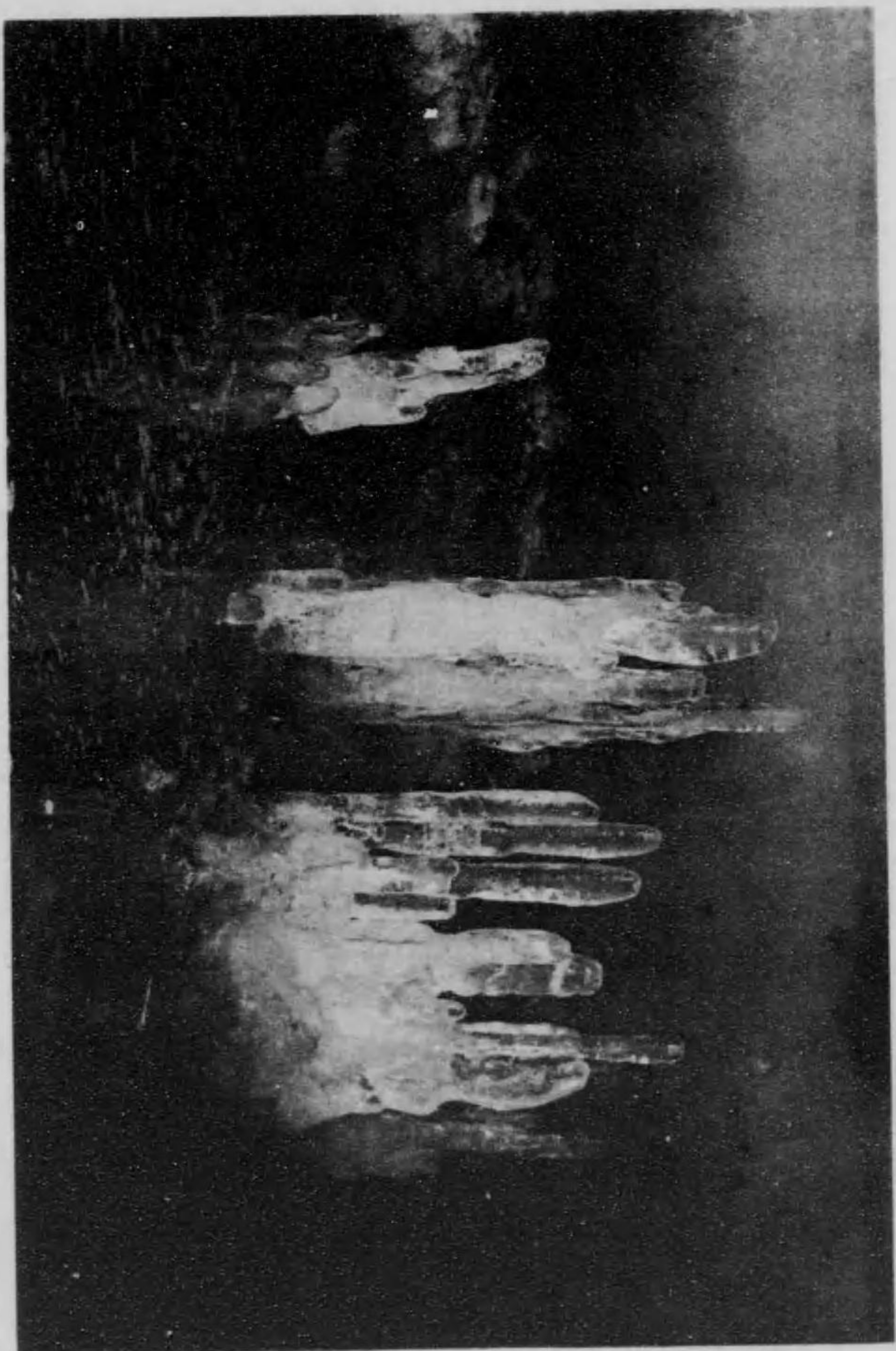
の陥落部に相當す洞穴の長さは百間餘に達し洞穴の幅は十六尺乃至三十八尺高さ七尺五寸乃至十六尺の間を消長し直立又は匍匐して最奥まで達することを得此の風穴は八田氏の風穴と稱し夙くより蠶種の貯藏に利用せられ一號より三號まで三個の貯藏庫あり洞内の氣温は盛夏の候にても氷點に近く洞底は氷結のため滑り倒れる危険ある故極めて注意して徐行するかカンジキを用ふるをよしとす洞内の氷柱は頗る美觀にして見る人をして嘆賞せしむ大正十一年十月忝くも攝政宮殿下親しく御探險の光榮に浴したるは又他の洞穴に例なきことなり。此の外に神座風穴富嶽風穴鳴澤天然氷穴等大小數十を算す何れも保護の要あるべし。

蝙蝠穴

所在地 南都留郡西湖村西湖の西南方

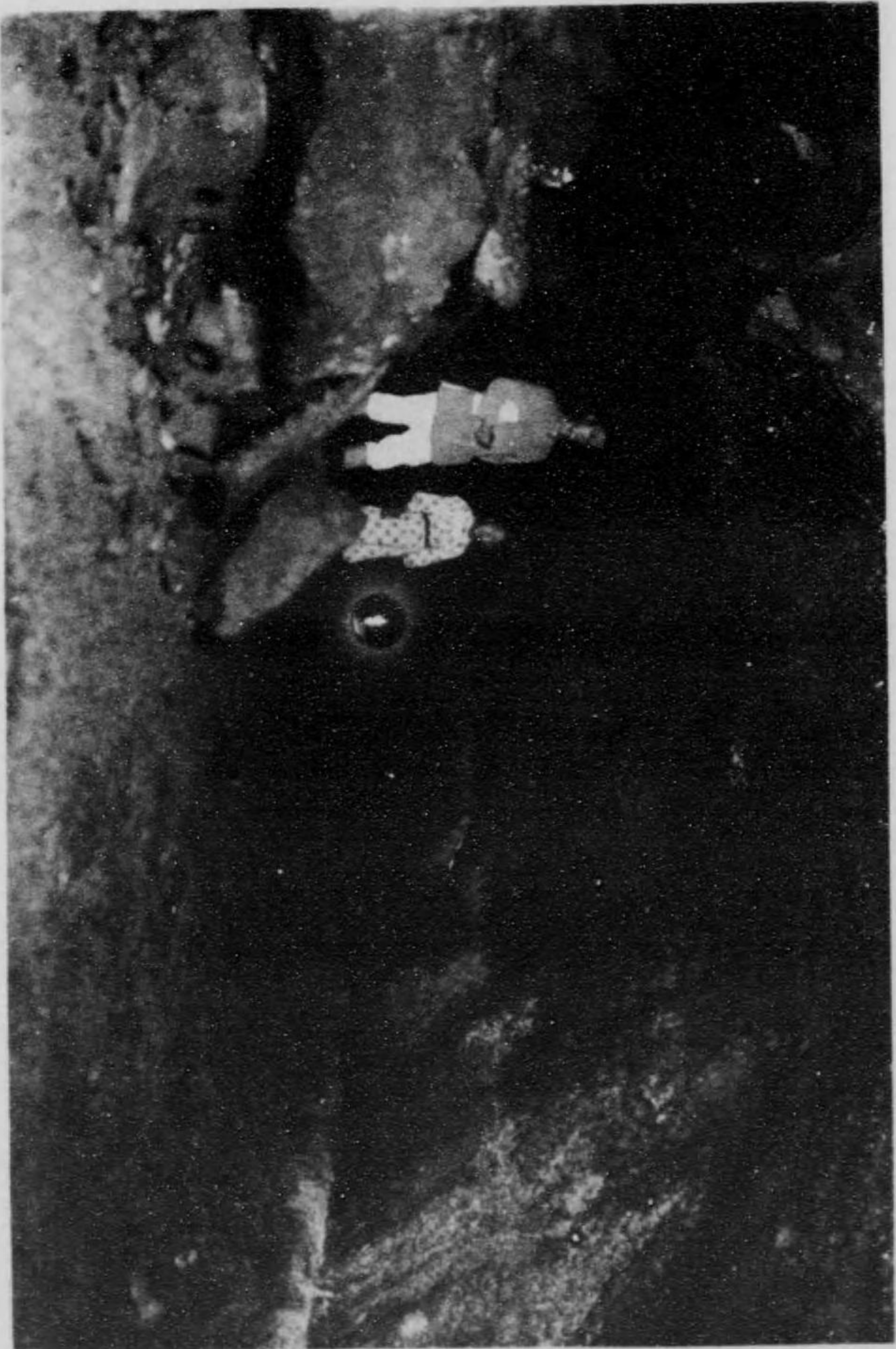
同 鳴澤村字テングー臺

兩者何れも富士山麓に多數散在する熔岩洞の一にして前者は西湖の西岸に露出せる熔岩上を湖岸より数丁南に踏み入りたる處に在りて其の入口には熔岩の上部陥落して生じたる五六十間許りの長き熔岩溝を存し西北に向ひて段階的に洞穴をなし縦穴になり又は斜穴をなし復



柱氷穴の内穴富士宮





穴 風 壕 富





穴

窟

窟

〇六